

今上天皇

天永二年二月十一日行幸御神寶如例

同天皇

保安二年辛丑十月二十八日己未行幸御神寶如例

當帝王 (崇德天皇ナリ)

大治三年四月二十七日行幸御神寶如例

新院御幸

長承四年二月二十七日御幸

保延七年辛酉二月二十二日辛卯高陽院御幸

久安三年丁卯二月二十二日丙辰當社行幸 但董御

當帝王 (後白河天皇)

保元三年戊□二月己未二十八日己辛行幸 御冠御歳三十二

當帝王 (二條天皇ナリ)

永曆二年辛巳二月辛卯二十八日辛未行幸御冠

嘉應二年庚寅三月二十二日行幸

當帝王 (高倉天皇ナリ)

治承二年戊戌三月丙辰二十二日丙辰行幸 御冠御歳十七

治承以後一院隱岐院 中院阿波 新院佐渡 此三代皇行幸不注

(附箋)

建久二年十月二十九日天晴後鳥羽院行幸

永元四年庚午八月乙酉二十日乙亥當社行幸 後鳥羽院太子 號土御門院

建保二年甲戌三月戊辰二十六日辛卯當社行幸 後鳥羽院 第二皇子

安貞元丁亥年十二月十四日己未行幸御冠 御歳十七後高倉院 太子所謂持明院宮

嘉禎四年三月二十八日□卯行幸御童子御歳八歳 天晴

(附箋)

寛文四年正月十七日

建長七年乙卯十月十九日壬午當社行幸御冠 太子

文永七年三月十四日行幸當社

弘安九年丙戌三月壬辰廿七日甲午行幸日記別卷ニ注之

トアリ。永祚ヨリ弘安ニ至ルマデノ例大略右ノ如シ。元弘元年八月二十五日後醍醐天皇關東ノ兇儀ヲ

添 上 郡

避ケ東大寺東南院ニ潛幸セラルルヤ、其ノ普御ノ夜半ヲ以テ潛ニ當社ニ行幸シ、御鏡一面ヲ奉納シ寶
祚ノ無窮ヲ祈リ給ヘリ。當時之ヲ秘密ニセラレシヲ以テ正史ニ所見ナキモ其ノ顛末大宮氏ノ記録ニ詳
ナリ。

八月二十 日夜三人來誰人ゾト問候——ナカニトリ答云ワレハ未房ナリコンヤミヤシ
ロニコモルナリト申候——シハラク候トロロニヒソカニ祈トヲセヨト申候——テナヲ問申候——
主上シチヨ也ト申サレ候——御ハシノモノミナノワカミヤ江ニケユキ候——又申候——コノカ
、ミヲソナヘハヤク武ウソノキトウセヨト申サレ候——ヲハラヒヲ上祈トヲ申候——ミナノワカ
ミヤ江ニケユキ候——又申候——コノカ、ミヲソナヘハヤク武ウソノキトウセヨト申サレ候——ヲ
ハラヒヲ上祈トヲ申候——ミナノワカミヤ江ニケユキ候——又御廊ニ入ラセ候ラヘハ廿ハシ刻
ニナリテゴセントヲセラレ候——イマヨリ申入候——答候——イソキノ事トヲセラレ候——ヲ下ノ
小食○大宮氏云小食トハ本社
日供ノ黒米ノ御飯ナリアフリテクキリウヲ○同云クキリウトハ饗
類ニテ夏季ノ供料ナリタテマツリ候——ミナノ御上
リテ日々ノキトウセヨトセラレテイソキヲ立ナリ御アン内スルモヒトリユヘワカミヤヘユキニケ
ル人トカヘリ候——ヘハイツクヲ立ニナリソノアトニカ、ミアリ細クラニヲサメ申候——ア
ルヒトカタノ御名シラヌナリ夜アケカタニナリ申候——
リカ日四ツトキ恒レイノヲコクスミソレヨリカヲソナヘ百度ノハラヘ武ウソノキトウイ

タシ候——

一條院好專御教書

一昨之夜之事主上御參籠之由聞入其子細可及注進
之沙汰狀如件

元弘元年八月

好專

乍恐返答

一昨夜御サシムケイノモノハラノトアリ申候——主上様ト申ヨウヲカタハミウケ申サス候——

—ヤフソノ事候——扱サンロイタシ候——モノモコレナク候——依注進如件

元弘元年八月

北郷常住神守

一條院様

コノ中一條院様ヨリキヒシクヲシラヘニテコハシノモノミナノ返答シラヌト申候——日々寺
門ヨリヒシクヲシラヘユヘ其カ、ミシ東地井ノ屋ニケ祈トウニチノカワリニ
イイマイニチ寺門ヘシラヌ返答申候——
又寺門ヨリ社家ヘ御タツネ神守日ニキキトウスルハナニユヘト申サレ候——答云藤門ノ御

添上郡

繁昌
ハンシノタメキフセ レタルイヘト答申候——

九月 日東地井屋ニキトウスル其トキ東地井申サレ——サクシツ寺門ヨリ御タツネノシタイ

今日 ンシヨイタシサシイタサレ候——○以下
欠文

○大宮氏曰件ノ館ハ櫻ノ屋又禁裏殿ト稱シ殿ヲ設ケ安置セシガ後、春日社家東地井氏ノ二階ニ移シ祭ル文久三年春日社造
替ノ際大乗院家宰原遠江ノ計畫ニヨリ櫻ノ屋ノ舊地ニ再ビ殿ヲ設ケコレヲ安置セシトゾ

天皇ノ南都ニ潜幸シ給フヤ、東大寺ニ倚リ後關ヲ計ラントシテ其ノ東南院ニ御幸アリシモ一山ノ議
協ハズ。翌二十六日ヲ以テ鷲峯ニ行幸シ遂ニ笠置ノ行在ニ入御シ給ヘルコト、當時聖駕ヲ護衛シ奉リ
シ樂師院東大寺ノ下ニ引
三綱ノ記録ニケリ參考スベシ 詳ニシテ、其ノ年月日正ニ大宮氏ノ記録ニ符合セリ。而シテ其
ノ春日潜幸ノ際親シク龍顔ニ咫尺シ、勅命ニ依リ御食ヲ進メ奉リ、且ツ御鏡ヲ受ケ帝室ノ安泰ヲ祈禱
シ奉リシハ、大宮氏ノ先人北郷常住神守ニシテ、其ノ功勞ハ樂師院氏ト相並べ共ニ後世ニ傳フベキモ
ノナリ。此時ニ當リ興福寺ノ一乘院ハ關東ニ縁故アリシヲ以テ、嚮ニハ大塔宮ヲ寤メ奉リ、今又天皇
ノ潜幸ヲ聞キ常住神守等ヲ訊問シ、其ノ實否ヲ極メ將ニ關東ノ爲ニセントスルモノノ如シ。幸ニ神守
等之ヲ秘密ニシ其ノ實ヲ告ゲザリシヲ以テ事ナキヲ得タルノミ。

明治十年二月九日 明治天皇行幸アラセラレ神饌料二幣帛料八ヲ供進シ給フ。

雜事

齋女

垂仁天皇皇女倭姬命ヲシテ天照大神ニ侍セシメ給ヒシヨリ、歷朝コレニ遵ヒ皇女ヲ其ノ齋宮ニ
祇候セシメ給フ。是ヲ齋主ト稱ス。藤原氏當社ヲ以テ祖廟トナシ、之ヲ尊敬スルノ餘伊勢ノ大廟ニ
准ジ、同族良家ノ女ヲ以テ春日ノ齋女トナス。山城ノ賀茂・大原野ノ
兩社ニモ亦齋女ヲ置ク三代實錄ニ、「貞觀八年十二月二十
五日丙申詔以藤原朝臣須惠子 爲春日并大原野齋女」貞觀十年十二月二十五日甲寅 勅令大
和國差充騎兵四十人執杖士二十人 備春日齋女參社之威儀 每至春祭 在前差課國郡司各二人
相共祇承立爲恒例ト。即チ是、中世以後已廢ス。若宮祭禮ニ國中ノ武士兵杖ヲ以テ祭事ニ預ル
ハ齋女參社ノ儀ニ倣ヘルモノナリト云フ。

神木入洛

昔時興福寺ノ盛ナルニ當リ、僧徒兇器ヲ弄ビ、相互ニ吞嚙ヲ恣ニシ、苟クモ國郡司ノ治己
ニ便ナラザレバ大衆蜂起ト稱シ、僧徒ヲ催シ神人ヲ驅リ、春日ノ神木ヲ携ヘテ京洛ニ入り、禁闕ヲ
闢ガシ櫻門ヲ劫シ敢テ嗾訴ヲ逞ウス。僧徒ノ濫惡極レリト謂フベシ。蓋シ其ノ入洛ハ安和元年ニ始
マリ、モト東大寺ト爭論シ志ヲ得ザルニ出ヅ。爾後事每ニ之ヲ繰返シ嗾訴ノ一手段トナセリ。北郷
常住大宮氏ニ是ニ係ル記録アリ。左ニ掲ゲ參考ニ供ス。

當社御遷坐御進發御入洛御歸座代々日記

一安和元年七月十五日御入洛依東大寺興福寺確執也

一寛仁元年六月二十二日御進發着御大極殿宇治殿御代同二十三日御歸座

添上郡

- 一 治曆二年三月七日御入洛同九日御歸座
- 一 寬治七年八月二十六日御入洛同二十八日未廻御歸座
- 一 天永四年四月二十七日御進發二十八日丈六堂江一夜二十九日粟居山及合戰畢
- 一 永久元年同三月二十日御入洛着勸樂院同二十二日御歸座
- 一 永久四年五月十二日御進發同十二日御歸座
- 一 保安元年八月二十日御進發同二十四日御歸座
- 一 保延三年二月八日御進發同十二日御歸座
- 一 保延五年三月二十六日御進發翌年二月廿九日御歸座
- 一 久安元年七月十二日爲金峰山奉下御神木寺內守護同八月二十一日御歸座
- 一 久安六年八月五日御入洛着勸學院同廿一日還御御本社
- 一 永萬元年十月十六日御進發自石崎同二十六日御歸座
- 一 仁安二年五月十二日御遷坐移殿二十日戊刻御歸座
- 一 承安元年九月十一日御遷坐十月四日御歸座
- 一 承安二年十二月二日平等院二十八日御歸座平家清盛公郎從平三郎宗貞事
- 一 承安三年十月三日平等院十一月十一日御歸座

- 一 治承四年十二月十六日御遷座移殿二十八日御歸座平家長賴
- 一 建仁元年九月三十日御遷坐金堂前同十月九日御歸座
- 一 建曆三年建保元年也十一月十四日平等院二十九日御歸座山法師訴事也
- 一 建保二年八月四日着御金堂前同二十四日御歸座三井寺訴二依也
- 一 安貞二年五月十日御遷坐移殿同八月十三日子刻御歸座
- 一 安貞二年十二月二十一日己酉宇治殿同三年十一月二日御歸坐寺社開門子刻御歸座多武峰事
- 一 天福二年六月移殿一切經供米事
- 一 天福二年七月四日移殿大安寺相論事
- 一 文曆二年七月二十七日御遷座移殿同八月二十六日御歸座但大住庄與八幡宮領薪庄依用水相論事
- 一 嘉禎元年十二月二十一日御進發同二年二月二十一日御歸座大隅薪事相論
- 一 嘉禎二年七月二十八日御進發金堂十一月二日御歸座
- 一 建長八年九日移殿大隅事
- 一 正嘉元年七月二日移殿同八月二日金堂九月二十一日御歸座水田庄之下司訴事
- 一 文永元年七月二日移殿同八月二日金堂同九月二十一日御歸座
- 一 建治元年五月五日金堂同八月二十一日御歸座

- 一 建治三年六月八日移殿十月十日御歸座
- 一 弘安元年七月二十一日移殿同二十六日御歸座
- 一 弘安三年十二月十六日移殿同二十九日御歸座
- 一 弘安四年九月二十五日御入洛同五年十二月二十一日御歸座
- 一 正應四年正月十七日御進發木津二月二十三日御歸座
- 一 正應四年十二月二十七日遷座移殿翌年四月廿一日御歸座
- 一 永仁二年十月五日御進發木津同三年五月四日御歸座一乘院家衆徒ノ沙汰
- 一 永仁三年十一月二十八日金堂放光院御遷座同四年八月二十一日御歸座
- 一 正安三年四月五日御遷座金堂前同九月二十九日御歸座
- 一 正安三年十月二十五日夜二十人隱密大明神奉取同十一月一日自平田與樂寺
- 一 正安四年三月十五日御遷座金堂前進發木津六月二十八日御歸座
- 一 乾元元年十二月二十九日遷座移殿同二年正月十九日御歸座
- 一 乾元二年八月十八日移殿同九月十四日御歸座
- 一 嘉元四年六月二十三日御遷座同七月十六日遷座金堂前同二十六日御歸座
- 一 德治二年十二月十二日入洛法城寺同三年七月十三日御歸座

- 一 正和元年四月十三日金堂前同八月二十五日入洛同二年八月十六日御歸座
- 一 正和三年三月十二日金堂同十三日木津同十五日宇治同十七日入洛同年八月十四日御歸座
- 一文保二年七月十三日金堂前同二十二日御歸座
- 一元應三年二月十四日御遷座移殿同三月十二日御歸座
- 一元亨元年八月六日移殿同十月七日御歸座
- 一 正中二年六月二十四日金堂前同十二月十五日御歸座
- 一 嘉曆二丁卯三月八日進發金堂但内山殿禪師殿院務御相論事大明神ヲ金堂エ入マイラセラル同
十二日カセムニヨテ金堂カクル同夜本社エ御歸座但觸穢ニヨテ本タムキノ御經藏ニ三十ケ日御
トウリウ
- 一 嘉曆二年八月二十二日着御木津殿九月十五日御歸座
- 一 建武二年六月十四日移殿同六月二十日木津同七月十一日御歸座
- 一 建武三年十一月二十七日移殿同十二月二十六日御歸座
- 一 曆應二年己卯十一月九日子刻御遷座移殿同三年六月二十日御歸座
- 一 曆應三年十月二十四日木津同十二月十九日宇治殿長講堂着御今度始也同四年八月十九日御歸座
- 一 康永三年十一月十八日丑刻金堂前同四年四月十六日木津同二十一日宇治殿七月十九日御歸座

- 一貞和三年辛亥七月二日遷殿同四年二月十二日御歸座宇多郡可被責事
- 一貞和四年七月八日移殿同八月二日御歸座
- 一文和四年乙未九月六日移殿同五年正月十三日御歸座
- 一延文元年丙申七月十二日金堂前同二年三月四日御歸座當今
- 一貞治三年十一月九日御動座移殿同十二月十九日御入洛同五年八月十二日御歸座
- 一應安四年十二月一日御入洛同二年自赤井御堂六條長講堂着御同七年十二月十七日御歸座
- 一永和三年九月二十六日御進發宇治平等院同年十一月二十六日御歸座但次日二十七日着御本社
- 一永和四年十月九日御遷座金堂
- 一康曆元年八月十三日自金堂御進發宇治平等院同十四日巳刻自平等院御入洛着御六條長講堂同二年十二月十五日御歸座
- 一寶德三年 一寛正
- 一明應十年二月二十八日御遷座移殿

手向山神社

手向山ニアリ。モト東大寺八幡宮ト稱シ其ノ守護神タリシガ今縣社タリ。應神天皇中姫大神左仲哀天皇神功皇后右ヲ祭ル。創始ハ續日本紀ニ「天平勝寶元年十一月己酉八幡大神託宣向京甲寅遣參議從四位上石川朝臣年足侍從從五位下藤原朝臣魚名等以爲迎神使路次諸國差發兵士

一百人以上前後驅除、又所歷之國禁斷殺生、其從人供給不用酒肉、道路清掃不令汚穢……十二月戊寅遣五位十人散位廿人六衛府舍人各二十人迎八幡神於平群郡。○是ヨリ先字治ヨリ神幸是日入京即於宮南梨原宮。○金澤氏云此梨原ハ平城ノ宮南ニアリ今ノ南都ノ内侍原ニアラズト。造新殿以爲神宮請僧四十口。悔過七日丁亥八幡大神禰宜尼大神朝臣社女其與紫色一拜。東大寺天皇太上天皇太后同亦行幸是日百官及諸氏人等咸會於寺請僧五千禮佛讀經作大唐渤海吳樂五節田儺久米儺……ト見エ、天平勝寶元年十二月東大寺ノ守護神トシテ此所ニ鎮祭セラレタルモノニシテ、此時奏セシ舞樂ノ器具今尙當社ニ傳ハル。抑、宇佐ノ八幡神ヲ以テ東大寺大佛殿ノ守護神トスルハ、是ヨリ先聖武天皇河内國大縣郡智識寺ノ盧舍那佛ヲ禮拜シ初メテ大佛鑄造ノ叡願ヲ發セラレ、天平十三年使ヲ豐前ノ宇佐八幡ニ遣ハシ、神慮ヲ窺ハシメ并セテ其ノ加護ヲ祈ラシメ給ヒシガ、天平勝寶元年十月ニ至リ大佛鑄造ノ功成リシカバ、即チ八幡神ヲ此所ニ鎮祭シ以テ其ノ守護神ニ定メラレシモノナリ。故ニ鎮祭ノ時ニ當リ左大臣橋諸兄ノ奏セシ宣命ニ

天皇我御命爾坐、申賜止申久、去辰年、河内國大縣郡乃智識寺盧舍那佛造、奉天、則朕毛欲奉造止思登毛、得不爲之間爾、豐前國宇佐郡爾坐、廣幡大神爾申賜閉止、勅、久、神我天神地祇乎、率伊左奈比天、必成奉毛、事立不有、銅湯手水止成、我身遺草、本土爾交天、障事無久奈佐率止勅、賜奈我良成奴禮波、歡美貴美奈毛念食須、然猶止事不得爲

天、恐家禮登毛御冠、獻事乎。○此時大神ニ一品、姫神カレコトモマフニタマハクトマツス
トアリ。以テ徴スベシ。
天、恐家禮登毛御冠、獻事乎。ニ二品ヲ授ケ給ヘリ。恐美恐美毛申賜、久止申。

創始ノ後不詳、梨原ヨリ大佛殿ノ近傍今ノ一ノ鳥居ノ南、池ノ道ヨリ、巽東塔址ニ對スル小丘ノ所ニ遷セシガ、治承ノ燒失再建後北條時頼ノ沙汰トシテ今ノ社地ニ移シ立ツ。爾後ノ沿革詳ナラズ。慶長四年ニ至リ郡山城代増田長盛之ヲ造營セリ。八重櫻曰

治承四とせ師走に燒失有しを鎌倉の右大將軍源頼朝卿あらたに宮居をつくらざたまふそののち北條相模守平時頼はからひとし石清水の上手より今のやけあとへ遷宮せられ……○舊跡考亦略、

南都藥師院舊記曰慶長四年辛亥東大寺八幡宮若宮同小社舞殿拜屋以下増田左衛門尉御造營アリ、奉行井上四郎右衛門。

寛永十九年十一月南都西ノ坂火ヲ失ヒ、延テ當社ヲ燒ク。元祿四年公慶之ヲ再建ス。即チ今ノ建物ナリ。八重櫻曰

寛永十九年壬午霜月二十七日類火にてやけ玉ひしより今にかり御殿にて三十餘年の星霜をおくらせたまふされともいにしへの御てんのあとには石すへわつかに残り年々の草のみ茂りぬ○舊跡考亦略、コレニ同

南都一覽藥師院藏、寶曆二年ノ記録ニシテ曰

寛永十九年十一月二十七日未刻分從西坂出火町方并東大興福少々寺院燒失其砌與福ハ一乘院北院勸學院四五軒燒失東大寺新禪院東南院藥師堂眞言院堂舍燒失餘火飛テ八幡宮一具安居屋燒失夫々關東へ御普請所々先例ヲ以テ御修理相願候へとも訴訟不相叶貞享元年八幡宮造宮御訴訟願大喜院□□爲使節下向八幡宮訴訟不相叶大佛殿再建之儀も被相願日本勸化被仰出其上造功遲滯ニ付日本國中高百石ニ付地頭金子百匹百姓方へも金子百匹勸化高百石ニ付地頭以下奉納也

又曰八幡宮大宮若宮寛永十九年十一月二十七日燒失其後假殿 以前假殿ニテ候處元祿四年龍松院公慶勸化ヲ以再建

當社ノ祭禮ヲ轉害一ニ手振會ニ作ルト云フ。往時毎年九月三日ヲ以テ執行セシガ今ハ九月十三日ヲ用ユ。其ノ舊式ハ藥師院氏ニ藏スル轉害會ノ記録ニ詳ナリ。就テ見ルベシ。轉害ハモト礮磓ノ假字ニシテ其ノ式ヲ東大寺礮磓門ニ行ヒシヨリ名ヅケラレタルモノニシテ、殺生ヲ禁斷スルハ即チ災害ヲ轉ジ幸福ヲ得ル因縁タルニ依リ、音義ヲ借リテ轉害會ト稱セシモノナラン。古ハ官祭ニシテ殊ニ官符ヲ畿内伊賀等ニ下シ殺生ヲ禁斷セシコト、舊神主上司氏所藏ノ古文書及ビ其ノ宣命ニ見ユ。錄シテ參考ニ供ス。左辨官下攝津國

應東大寺八幡宮每年轉害會日禁斷殺生事

右得、彼寺衆徒等去月日奏狀、備謹考、轉害大會之濫觴、起自天平影向之儀式、出彼西府之神祠、

移此南都之靈社御行多國之間徑路數州之中悉禁殺生同制害命會式號轉害厥寄蓋任斯矣
 自爾以降成每年不易之恒規暮秋上三之神事則仰放生於近隣六箇之國中行祭禮於當寺轉害之
 門前已爲恒例屢涉年序之處時移世改劣於事凌夷寺衰人廢兮崇神功微矣然間中古以
 來禮敬漸怠大會放生往闕空絕今社壇適復天平之舊蹤神靈忽儼如在之威光須與會式之
 稍廢令續放生之久廢者也伏惟畿內伊賀六箇國之放生者蓋是天平已來數十年之舊例也今任先
 蹤欲致此再興望請天恩迎每年轉害一會之日悉摸往代之佳規仰畿內伊賀六箇國被
 禁殺生之最惡者尊神殊滿慈悲之本誓忝守帝德之安全僧侶倍勵懇懇之懇念奉祈寶祚之長
 久者權中納言藤原朝臣宗冬宣奉勅依請者國宜承知依宣行之

嘉元二年七月二十五日

大史小槻宿禰判

天皇我詔旨止掛畏支東大寺爾御座世留八幡大神宮乃廣前爾恐美恐美毛申賜者久止申久當寺乃轉害會者恒
 例乃舊式奈利而爾且敕信無武久尊崇異他爾仍且德治乃冬與利任例且放生乃事乎令行給比且奉出給布宇都
 乃御幣乎正六位上行左衛門少尉大石宿禰國弘差使且令捧持且奉出給布事乎掛畏支大神達此狀乎平久
 安久聞食且天皇朝廷乎寶位無動久常盤堅盤爾夜守日守爾護幸給比且天下國家乎毛無事久無故久安穩太
 平爾恤助給度恐美恐美毛申賜者久止申

天文八年九月十三日

其ノ他祭式社領神輿入洛等ニ係ル古文書數通及ビ威儀馬具舞樂等ヲ藏スルモ繁キニ依リ之ヲ略ス
 唯古文書ノ二三ヲ左ニ掲グ

來十六日可有東大寺八幡宮神輿歸座東寺掃除事任例可被下知給之由被仰下候也仍執達
 如件

延文五年三月十二日

左中辨忠光

謹上 東寺長者僧正御房

來十六日可有東大寺八幡宮神輿路次警固事可被仰遣武家之旨天氣所候也

左大辨忠光

西園寺大納言殿

東大寺八幡宮遷宮神輿事任天平所見可有其沙汰但天子乘輿不相異之條不可然爲神輿
 之上奉懸正體可用金物御帳可爲紫錦候也以此旨可被下知□之由院御氣色所以也仍上
 啓如件

五月三十日

添上郡

斤片上 左大辨宰相殿

東大寺八幡宮祭禮田樂人數事有關之由其開候以此加々法師可被加人數之狀如件

文和二年三月二十四日

判 (尊 氏)

東大寺衆徒中

東大寺八幡修理檜皮千餘束周防國より所運送候也河々關々無煩可被勘過之狀如件

應安四年二月五日

沙 彌判 (足利義滿)

奉寄

東大寺鎮守八幡宮

伊賀國瀧孫四郎保氏高山十郎保光等跡事

右仍社官延廣致害之咎所寄進當社也早々先例可令致沙汰者奉寄如件

延文四年

五月二十四日

參議左中將源朝臣御判

○油藏 モト東大寺諸倉ノ一ニシテ上司倉、下司倉ト稱ス。八重櫻ニ「空海寺より乾にあたりて油

藏と號するあり此くらの内に種々様々のたから物あまた有……俊乘坊大佛殿再興の……勸進檜酌

並に袈裟等あり」ト見ユルモノ即チ是ナリ。治承・永祿ノ火災ヲ免レテ現存ス。說、東大寺要録ニ見ユ 近年

當社ノ境内ニ移シ一字ハ當社ノ有トナリ一字ハ東大寺ニ屬セリ。

夜支布山口神社 大柳生村大字大柳生ニアリ。延喜式神名帳ニ「夜支布山口神社」三代實錄ニ「貞

觀元年九月八日庚申……大和國養父山口神……遣使奉幣爲風雨祈禱」ト。即チ是、今郷社タリ。

祭神大山祇命ニシテ當國十三山口ノ其ノ一ナリ。説高市郡飛鳥山口社ノ下ニ詳ナリ。

氷室神社 奈良市登大路町ニアリ。祭神ハ關雞稻置大山主命仁德天皇左額田大中彥皇子 右〇社傳ノ

三座ナリ。和銅三年ノ創始ニ係リ、モト吉城川ノ上所謂日月ニアリシヲ建保五年此所ニ移シ祭レリ。

氷室トハ氷ヲ藏ムル所ニシテ、之ヲ朝廷ニ獻リ初メテ國家ノ例式トナリシハ仁德天皇ノ世ニアリ。

天皇ノ六十二年五月額田大中彥皇子當國關雞野今山邊郡福住ノ地ニ遊獵シ、野山ヲ瞻望セララルルニ物

アリ、其ノ形廬ノ如シ。乃チ關雞稻置大山主ヲ召シ之ヲ問ヒ給フ。答ヘテ云フ、是、氷室ナリト。

因テ具サニ之ヲ蓄フル方法ヲ陳ブ。皇子大ニ悦ビ齋ヲ歸リ天皇ニ獻ジ給フ。是氷ヲ朝廷ニ供進ス

ルノ始ニシテ其ノ氷室ヲ關雞氷室後、福住氷室ト稱ス。允恭天皇三年正月三田宿禰ニ勅シテ其ノ地ニ就キ

宮殿ヲ造リ、氷室神ヲ祭ラシム。今福住村大字福住ノ氷室社、即チ是ナリ。事山邊郡氷室社ノ下ニ

述ブルガ如シ。宜シク參考スベシ。

仁德天皇ヨリ文武天皇マデノ間ハ毎年春分ノ獻水ハ關難ノ氷室ヨリセシガ、元明天皇和銅三年都ヲ奈良ニ遷スニ及ビ、又之ヲ春日ノ三笠山ノ麓、吉城川上即チ水谷川ノ崖ニ作り、以テ朝廷ニ獻ゼシム。之ヲ吉城川氷室一ニ春日氷室、水谷氷室トモ稱セリ。乃チ神殿ヲ此所ニ作り、以テ其ノ靈ヲ祭ル。是、實ニ當社ノ創始ナリ。古、高橋氷室神社ノ稱號アリ。延喜式神名帳ニ所謂高橋神社ハ蓋シ當社ナルベシ。元要記曰

四十三代元明天皇御宇平城都春日氷室或書云吉城川氷室、奈良京始也五十代桓武天皇御宇山城國平安城都高野郡宇多氷室、其後國々處々勸請也

坊目考曰

元要記云、和銅三年七月二十二日添上郡三笠山下津岩根宮鎮座也貞觀二年二月朔日御影向依瑞相三所宮柱鎮座建保五年十一月朔日三所宮柱造營遷宮

神主家春日舞人狛近眞蒙附屬下知畢云云

永久五年九月朔日恆例神祭始興別當終南院家惠曉之時云云

神主家記曰、氷室神社昔在于吉城川上、也高橋神社神階正位是也建保五年十一月朔日遷宮於當氷室敷地左近府生大神遺弘爲祭主云云

寛文名所記廣大和名志所引曰氷室社は南向なり北向荒神より西に在此祠はいにしへは水谷の西にありけるを興福寺の院家修南院僧正寺務の時春日の樂人より惣伶人守護の神と崇め奉らんと訴訟す元より春日の末社ならねはとて此所へ移し奉る

建保五年十一月朔日今ノ社地ニ遷祀セシハ右ニ引ケル記録等ニテ明ナルモ、其ノ吉城川上氷室

水谷氷室トモ云フノ址何レニアルベキヤ、其ノ址ノ在ル所即チ舊社地ナリ。天平勝寶八年勅定ノ東大寺古圖

ヲ案ズルニ、三笠山神地ノ北。水谷川吉城川ノ上流ノ邊ニ一池ヲ圖シコレニ氷池ノ二字ヲ記入セリ。又氷

室社記廣大和名志所引ニ

元明帝遷都于平城時新造構氷室於春日山之北山足、水屋氷室則是也衣笠内府家良公五條三位俊成卿氷室之哥爲證也其先祭氷室明神于此地爲護神、故號吉城川氷室、或云高橋氷室神社、而建保五年遷坐於登大路、今社地自是水屋氷室廢亡

又曰元明天皇御宇氷室巖窟遷造於三笠山吉城川上南之崖、而每歲六月朔日獻氷于平城朝廷、今謂日月磐、即此也云云造營神殿於此地、齋祀守護神、號氷室神社

トアリ。所謂日月磐ハ名所圖會ニ日月磐氷室舊地平城跡跡考曰水谷川上六町餘東山の間にあり……磐面に日月星の三光の形を彫る俗に其地を呼んで日月といふト

云ヘル所ニシテ實ニ水谷川上ニアリ。故ニ當時之ヲ水谷氷室トモ吉城川上氷室トモ稱セリ。而シテ社殿ノ位置ハ均シク一社ノ記録ニシテ一ハ水屋ニ祭ルト云ヒ、一ハ川上ノ南崖日月磐ノ地ニ造營ス

ト云フモ、要スルニ水屋ニ祭レルモノハ古圖ニ見エタル氷池ノ風神ナルベク、日月磐ニ祭レルモノハ氷室神ニシテ即チ當社ノ根本ナルベシ、然ラバ即チ氷池ノ堅氷ヲ打チ、之ヲ今ノ日月磐ナル氷室ニ藏メタルモノナラン。氷池ニ風神ヲ祭リ、氷室ニ氷室神ヲ祭ルコトハ延喜式ニ見ユ。又山邊郡氷室社ノ下ニ引用セリ。須カラク參照スベシ。

率川坐大神御子神社

附阿波

奈良市本子守町ニアリ。延喜式神名帳ニ「率川坐大神御子神社三座」ト

見ユル即チ是、俗ニ子守社ト稱ス。又其ノ祭儀ニ依リ三枝神トモ稱セリ。率川ノ一名ヲ子守川トイヒ、社地ヲ本子守ト云フモ皆社名ニ因メルノミ。中殿ハ姫踏躰五十鈴姫命、左殿ハ玉櫛姫命、即チ子守神右殿ハ大己貴荒魂命即狹ヲ祭ル。五十鈴姫ハ大神大物主命ノ御子ナリ。故ニ大神御子神ト稱ス。推古天皇勅シテ大神御子神ノ社殿ヲ此所ニ建テ、大神君白堤ヲシテ之ヲ祭ラシメ給フ。即チ是、當社ノ創始ニシテ、養老中ニ至リ藤原不比等、子守・狹井ノ二神ヲ其ノ左右ニ齋ヒ祭ル。子守ノ稱蓋シココニ起ル。言フハ二神左右ニ座シ其ノ子ヲ擁護スルノ義ナリ。其ノ率川阿波社ハ率川ノ若宮、又三枝御子社ト稱シ事代主命ヲ祭リ、寶龜中藤原是公ノ阿波國ヨリ勸請スル所ナリ。

當社ハモト山邊郡大倭神社ノ別社タリシヲ以テ彼ノ社仁安中ノ注進狀ニハ率川社記ヲ之ガ附録トナセリ。後、大神神社ノ別社ニ屬セリ。故ニ嘉祿二年勅作ノ大三輪三社鎮座次第ニハ之ヲ春日三枝神社ト稱シ別宮小社ノ部ニ收メタリ。所謂大倭社注進狀仁安二年二月十三日觀部大倭直盛繁國司ノ命ニヨリ注進セルモノナリ坊間流布ノ本ニハ各異同アリ今大神社ノ藏

本ニ附録シタル當社記ハ左ノ如シ。

率川神社

神名帳云、大和國添上郡率川坐大神御子神社三座、大神氏家牒曰、小治田豊浦宮御宇天皇案推古天皇御世、建大神御子神案姫踏躰宮於春日率川邑本名狹井川邑大神君白堤奉齋之、大寶年中始行祭祀案イ本今三枝祭是也、養老年中、左大臣藤原史建子守神即母儀案三島壽狹井神案大己貴命荒魂大國魂神兩神社、奉齋焉類聚國史云、仁壽二年冬十月辛丑、率川坐大神御子神、授從五位下、養老令曰、孟夏三枝祭、義解謂、率川社祭也、以三枝和名佐井草古事記曰山由理草之本名云三佐草也或曰烏扇華、飾酒罇祭、故曰三枝也、集解曰、伊謝川社祭、大神氏宗定而祭、不定者不祭、即大神族類之神也、以三枝花嚴饗而祭、大神祭供、此云龜靈和靈祭、延喜式曰、四月三枝祭三座率川社又曰、擇日付祝大三輪君等令供祭、又曰、率川祭、春二月、冬十一月、上酉日祭之、春日使便參。

別社

三枝御子社一座、南家社殿口傳云藤原是公立率川社即當社殿傳聞狹井神之子、事代主神、神名帳曰、大和國添上郡率川阿波神社一座、類聚國史曰、仁壽二年冬十一月辛丑、率川阿波神授從五位下即當社焉

關神三座

關神三座

大神氏家牒曰、養老年中、藤史亦建園韓神社奉齋焉、神名帳云、宮内省坐神三座並名神大、新嘗、園韓神社一座、韓神社二座、舊記云、伴神等素盞烏尊之子孫、守疫神也、傳聞、園韓者大己貴命之和魂大物主神也、案此神、園花飛散之時疫疫病、守避之儀止之、仍云園韓神、園韓草木之處也、集解所謂三枝和靈祭云、當社之事、又大物主神可謂三素盞烏尊之孫、韓神者、大己貴命、

少彥名命也、兩神經營天下、爲顯見蒼生、則定其療病之方、或抄云、大己貴命、少彥名命、神託曰、民更亦來歸、因以號兩神、云三神神、數、古語、外國云、韓也、又按、神皇產靈、紫野今宮三座、社家者說如、右、韓曰、少彥名命、與大己貴命爲兄弟、如此少彥名命可謂三素盞烏尊之子、社家者說如、右

右率川神社記、者、獻上於注進狀之節應、或人之需、勸作者也、神祕口傳到其地、可尋云、
十月二十一日

花押ハ祝部大倭直盛繁ノ署判ニシテ、十月二十一日ハ仁安二年ニ係ル月日ナルベシ、大三輪三社御鎮座次第ニハ

別宮小社之事……春日三枝神社、媛踏躰五十鈴命也、社傳、小墾田宮御宇天皇御世、大三輪君白堤承勅立社於春日邑率川坂岡兩處、奉齋媛踏躰五十鈴媛命、大物主命也、平城宮御宇天皇御世、益造兩社之相殿爲三座、又始行三枝祭、此事見分詳、是大三輪氏長奉仕之

トアリ、以テ當社ノ創立祭祀及ビ別社ノ由來ヲ概知スベシ、而シテコレニ係ル古今ノ沿革、社頭ノ盛衰等ハ載セテ率川御子守本縁ニ詳ナリ、此書ハ今ヲ去ル百六十餘年享保中南都ノ人村井古道無名、説ガ三十餘年間舊記ヲ蒐集シ、口碑ヲ搜訪シテ著作セルモノニシテ、論說極メテ正確ナリ、廣大和

名勝志ニハ往々之ヲ引用スルモノヲ見シモ、未ダ世間其ノ全本アルヲ聞カザリシニ偶々大神社藏書中ニ之ヲ得タリ、ココニ其ノ全文ヲ掲ゲ本項ノ記事ニ代フ、但シ本文ニ洩レタル記錄ニシテ尙參考トナルベキモノハ○符ヲ附シ間々之ヲ挿入シ以テ讀者ノ通覽ニ便ナラシム、

率川御子守神社御本縁

率川坐大神御子神社三座一作伊謝川

在本子守坊俗云子守宮

中殿 媛踏躰五十鈴命

左殿 玉櫛姫命 又名三島溝瀝姫號母神

右殿 狹井神大己貴命荒魂也

春日社司註進狀曰、自御寶殿西十五町去坐率川明神所謂三枝明神是也、

神祇令集解曰、伊謝川社即大神族類之神也、大神氏宗定而祭、不定者不祭、

中殿姫踏躰五十鈴命大倭社註進狀與書

古事記中奏曰神像伊波禮毘古命、更求爲太后之善人、時大久米命曰、此間有媛女、是謂神御子、其所以謂神御子者、三島溝瀝之女、名勢夜陀多良比賣、其容姿麗美故、美和之大物主神、見感而、其美人爲大便之時、化丹塗矢、自其爲大便之溝流下、突其美人之富登、此

字以音、爾其美人驚而、立走伊須々岐伎、乃將來其矢、置於床邊、忽成麗壯夫、即娶其美人、下做之、生子、名謂富登多々良伊須々岐比賣命、亦名謂比賣多々良伊須氣余理比賣、是者惡其富登云故、是以謂神御子、下略

於是、其伊須氣余理比賣命之家、在狹井河之上、天皇幸行其伊須氣余理比賣之許、一宿御寢坐也、其河謂佐草河、由者、於其河邊、山由理草多在、故取其山由理草之名、號佐草阿也、山由理草之本名云佐草也、後其伊須氣余理比賣、參入宮內之時、天皇御歌曰、

阿斯波良能、志祈去岐袁夜邁、須賀多多美、伊夜佐夜斯岐氏、和賀布多理泥斯、然而阿禮坐之御子名、日子八井命、次神八井耳命、次神沼河耳神三柱云云、以上古事記文

今案神代卷、古事記姬踏輪五十鈴命者、大三輪神大物主命御子、神武天皇皇后也、文德實錄、神名帳、大神家牒、所謂率川坐大神御子神是也、令義解、集解、所謂三枝祭、謂率川社祭也、即大神族類之神也、大神謂大三輪社也、

元要記、率川神社、中宮開化天皇也、春日率川宮舊庭也、今按否也、當地為姬踏輪五十鈴命狹井宮之古地也、古事記、春日率川宮舊跡矣、

左殿東 玉櫛姬大倭社注進狀奧書
今按古事記神代卷、大倭社注進狀奧書曰、三島滄昨之女、勢夜多良比賣、亦曰溝檝姬、或云

玉櫛姬、大神氏家牒所謂子守神御母儀是也、

元要記云、二宮子守神、號頭振女神母神女體、今按天地麗氣記、天兒屋命亦名頭振女神、並非、是以東方末社神號、為本社混雜而已不可不正乎、

右殿西 大己貴命荒魂
今按大倭社注進狀奧書、大國魂神大己貴命荒魂、大神氏家牒、所謂狹井神是也、令義解、延喜式神名帳同意、

元要記云、三宮住吉大神、今按以於西方末社神號、為本社混淆、並是抑當社第一姬踏輪五十鈴命御鏡座者、人王三十四代推古天皇元年癸丑二月三日癸立大神御子神宮、大神君白堤所祭也大神家牒、元要錄、日本書紀、一說謂崇峻天皇六年、非是、

四十四代元正天皇養老元年丁巳十一月二十八日甲子立大神御子神社、右左子守神、狹井神兩神二座、左大臣藤原不比等所營作也、大神家牒、元要記、續日本紀、稽古歷法全同、其先中宮一座為東面焉、不比等祭、副左右二殿、爾來為南面三座矣、

藤原南家口傳曰、右大臣藤原是公建此社三座宮柱、云云、雖然載于神祇令率川神社、有證也、寶龜二年大納言藤原是公卿、營作於率川、若宮阿波神社矣、後世謬傳、為當社、不可若宮祭神事代主、在於西城、戶坊南側、

神祇令曰、孟夏三枝祭、義解曰、率川社祭也、以三枝華、飭酒、饗祭、故曰三枝也、
延喜式卷第三曰、四月三枝祭三座^{率川社}、擇日、祝等令供祭、又卷十五日、率川祭、春二月冬十一
月上酉日祭之、春日使便參、

○大宮氏^{北鄉常}住職ニ率川祭ニ係ル記録ヲ藏ス。錄シテ參考ニ供ス。

作法順行酉刻御戸開御供進次神寶次使參、二鳥居前身潔次黒木御供、次幣帛、次奉幣次御馬、
足次盃、次挂祿……

祭文

皇御孫乃御命以天春日乃率川仁^{神等乃前仁言左久常毛奉仕} 遠祖與里年
緒不落間^{之天大幣帛乎官位姓名乎爲使令} 給御命乎申給久刀言寸故是
以且^{毛國家乎慰勳爾助守坐風雨調} 又申左久參或百官人等乎母平久安
久^{天皇朝廷爾伊賀志夜久波延乃如久} 米令仕奉給刀稱辭奉竟久刀宣
文德實錄卷第四曰、仁壽二年壬申十月辛丑率川座大神御子神、授從五位下、

○新抄格勅符抄ニ率川神六戸^{左京四戸}丹後國二戸

八十一代安德天皇治承四年庚子十二月二十八日、率川社燒失、神體神寶、以興福寺一言主社奉
遷矣、同二十九日奉遷於南圓堂內也^{元要記、歷代編年集成}

八十二代後鳥羽院文治四年四月社殿建立、建久元年庚戌九月二十二日正遷宮^{元要記}

○内院末社二座

東小社春日明神^{向西}

天兒屋根命 辰市家記録

西小社三輪明神^東

辰市家記録

大工造營日記云住吉明神、今按住吉說可也、

右件以末社神號、誤本宮左右神名焉、嘗丹波國與謝郡籠守神社祭所住吉大神矣、亦大和國吉
野水分神社祭神、住吉明神也、當所御子守社雖同社號、爲別神於是令本宮混錯不可
不辨乎、今按東西末社者、建久元年本社再興以後初可爲勸請處無疑哉

元要記曰、本社御殿内御神物事、

中宮 御厨子 御垂跡神財物、母屋御鏡一面八花形也、^鹿御鏡五面圓形 銚六本 同銚幡六流

御杖八 御太刀一口 御弓矢三具 御唐櫃一合 仁王經^{金字} 鈴五口 御柵一枚 御座疊一帖

出雲莛^{高麗} 承塵一枚 几帳一 御棚机^{花瓶} 四面 錦壁代 御座 獅子狛犬^{東大寺僧}正造勸也

二宮^左 神財物 母屋御鏡一面 庇御鏡一面 御銚六本 同銚幡六流 御太刀一口 御弓矢一具

御鈴二口 御經箱一合 金剛經^{金字} 御柵一枚 御座疊 承塵 几帳 御棚机 壁代 御座

獅子狛犬^前

添上郡

三宮右 御神財物 母屋御鏡一面 御庇御鏡五面 御鉾六本 鉾幡六流 御笏一口 赤箱錦袋奉納御勅筆額文在之 御裝束櫃一合 御太刀一口 御弓矢四具 御鈴五口 御摺 御座疊 承塵 几帳 帷 御棚 机 壁代 御廉 獅子狛犬各同前

文治四年四月下旬、中御門右大臣家忠公、御體神財物等難、治定、經奉聞、爰御白河法皇發、勸願社壇令造營宣下、大外記清原賴業、中原師尙、左大史小槻廣房等具趣被儲畢、

建久元年九月二十一日申時、御神物調進、御使下野權守藤原康家長親息下向、訓獻、告文前、遠江守正五位藤原行房行隆稱息也此時長者殿此度新調物送文云

奉送率川社殿內御神物事

御摺三帖 御裝束櫃一合 御座疊三帖 出雲莖高麗承座三枚 几帳帷三 御机三 花瓶 母屋御鏡三面八花形 鈴十二口 御杖八本 庇御鏡十五面圓形 御鉾十八本 御太刀六口 御弓矢八具 御笏一本 壁代御廉三社分 御唐櫃一合 仁王經金剛經金字 幡十六流 獅子狛犬三社分以上御殿分

右註文調進如件

建久二年九月 日

別當刑部權大輔正五位下藤原朝臣宣房奉

御本願一乘院殿累代御別當成故、今度覺照大僧正奉聞再興成就被成畢、元要記云拜殿付鳥居事

右拜殿鳥居造營時代未詳、保元二年丁丑二月二十七日、從御殿前過六尺五寸奉曳畢、往古大鳥居建者角振明神之前過、現在大鳥居者二鳥居建跡也、是保元二年奉改寄畢仍治承四年悉炎上畢、以彼此神慮不相叶歟

當社田植春日御田植明日上酉日云云

寶龜年中此事始也、自春日拜殿執行之、自治承年中御田植怠轉云云

同書云、弘仁四年南圓堂建立、弘法大師此御堂壇築之時、交人夫翁在之准和國風詠歌、逝去畢、件老翁者率川大明神、一人者榎本明神云云已上元要記文

延喜式神名帳頭注曰下部兼俱作 大和國

率川坐大神御子神社

大臣贈從一位藤原是公卿建立也再興其後每一季之祭日有公家奉幣使云云

其社南又有社號三枝明神即大神御子神也、件二社同在一村相去不幾、世俗稱率川南之社即若宮

大三輪神三座鎮座次第曰祝出雲殿祀本 別宮小社之事、春日三枝神社、媛蹈輪五十鈴媛命也、小墾田宮御

宇天皇御世、大三輪君白堤、承勅立社於春日邑率川坂岡兩處奉齋媛蹈輪五十鈴媛命、大物

添上郡

主命也。平城宮御宇天皇御世益○造(依イ本補)兩社之相殿爲三座。又始行三枝祭。大三輪氏長奉仕之。云云

萬葉集同詠河歌。作者未詳。

波羅曼今爲妹乎浦若三去來率川之音之清左

白河殿七百首和歌曰。率川御子神社。

祝子波早祭率率川乃神之宮井爾幣手向也

續日本紀曰。高野天皇天平神護元乙巳年八月朔日。從三位和氣王令人親王之孫竄於率川社中焉。如。今狹

夜逃竄。索獲於率川社中。流伊豆國。云云

今按當社往古添上郡一宮而。境內廣大茂林鬱々。故朝敵和氣王逃竄於率川社中焉。如。今狹

淺之神地。如何有所藏一身乎。當往當御子守社。漢國社。若宮阿波社三箇所俱爲一鄉神

域矣。後世民間犯社地而別三所。在人家間矣

述言

謹今按春日社記。南都名所古記。並俗傳等。謂當社中殿稱開化天皇靈神。謂相殿左右稱伊

弐諸尊。或春日大神。或住吉明神。或亦號吉野山水分神同林。未足論各不當說也。粗舉記

于前殿辨之所。謂本傳中宮媛踏躡五十鈴姬命。左東殿母神玉櫛姬命。右西殿狹井神大已貴也。於

是上代爲三輪神宮大倭社之別宮。顯然焉。所謂其始推古天皇元年大三輪祭主大神君白堤奉詔所

祭也。其後和銅三年遷都于平城。而養老元年右大臣藤原不比等。祭副左右相殿二神。改東正面

舊殿爲南面三座御殿矣。此時雖有興福寺金堂建立。未有春日明神鎮座焉。故以此御子守

神宮爲興福寺護神。於是累世藤原氏有尊敬起于斯者歟。而後寶龜二年冬月。藤原是公卿有

御子守神社三座再興造營。而始立稚宮阿波社事代主命於率川南方。自阿波國遷座因御託宣有建

造焉。其後桓武帝御宇。遷都於山城國。竟以成平城舊都荒廢地焉。就中神護景雲年以降。春

日四所大神威驗盛而爲興福寺鎮守神宮。自是以來使當社御子守漢國及阿波社三所變改春日明

神之攝社也。加之治承四年十二月回祿已後社頭祭祀衰弊而社領境界年々減少。當代漸四至社內

不過十八間四方也。雖然。從上古以二十一年。春日社造替之時。俱有於此御子守宮殿造

營。不違例。故神宮莊嚴美麗未變額乎哉

○先規錄曰

神護景雲年中春日大明神御影向以來神威益盛而爲興福寺之僧侶一山之鎮護。藤原氏亦益尊

敬之。自是率川社自猶春日之攝社。成來矣。愚按大神氏甚衰廢故日供以下准春日中社之例。來

矣。且正安元年依別當一乘院門主之御命。三方常住子時北德當住ハ守職。南德當奉成御遷宮。爾來

到于今。歲霜五百餘載。三方常住等爲定役。而子孫連綿奉勤。仕下正遷宮也

率川遷宮勤祭文大宮氏ノ藏但何レノ

添上郡

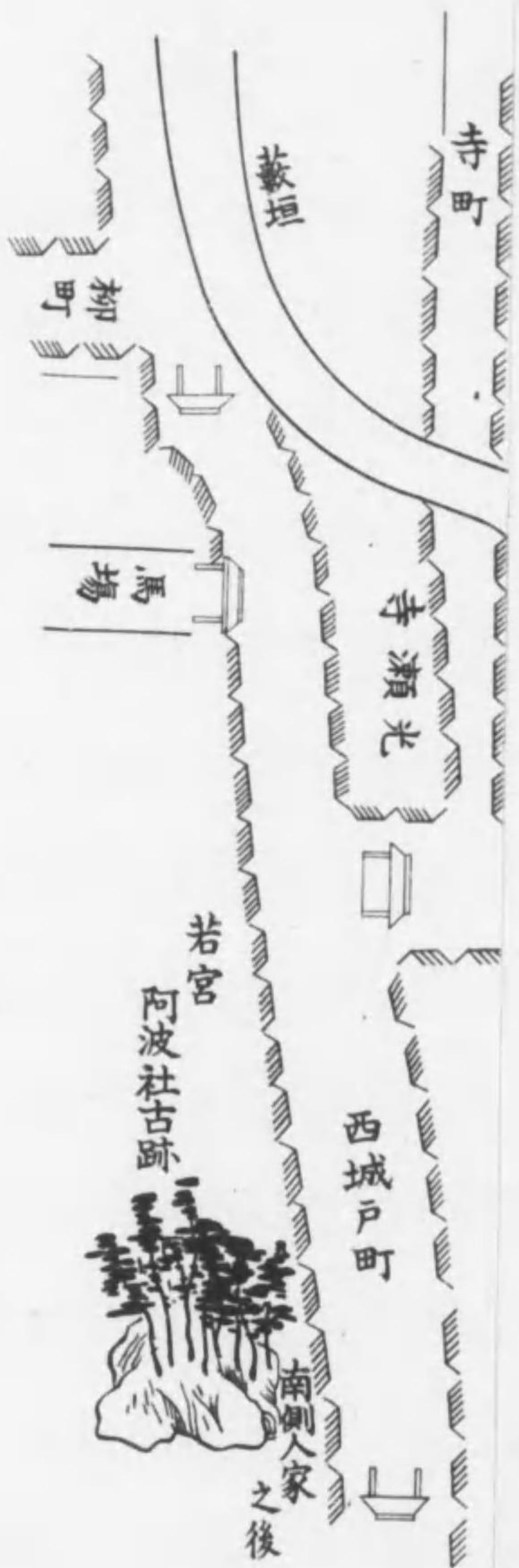
三〇三

唯當禮留年次者 年月 日吉日良辰於撰比定而申佐久大和國添上郡三笠山麓乃下津岩根爾宮
柱於太敷立_テ高天原仁鎮座寸率川子守神等乃御殿造營奉留願主大政所口傳殊_ニ者天下泰平國土
安穩社頭靜謐仁志而興福寺伽藍速_ニ建立給布事成就志米朝廷宮中兩門主寺院繁昌乃事乎平介久
安良介久聞知食天夜守日守理爾守幸開給倍止申寸

興福寺年中行事文明中曰寺務○門主以御判_ニ御下知_ヲ補_ル其職事……一率川神社主號子守神主
大河日專湯田

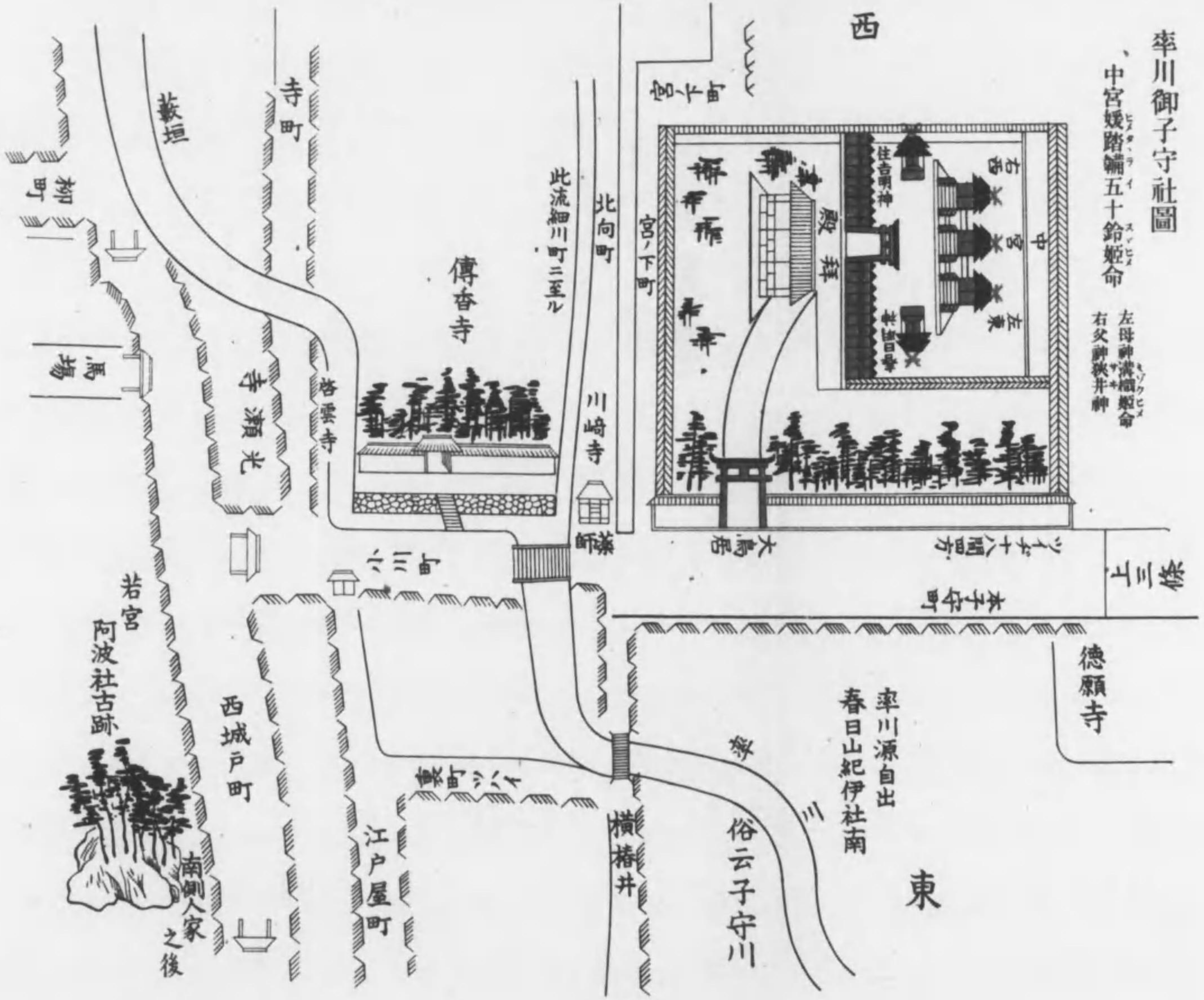
知行

復云南都名所記、或俗諺謂、當社敷地、曰、往昔率川宮開化天皇禁庭地、亦稱所祭開化天皇靈神、
太安談浮說也、所謂率川坂本山陵一_ニ坂上_ニ在於漢國社西方念佛寺境內、則開化天皇山陵焉、然開
化帝御宇未_レ去_レ神代、遠_ニ如何於_ニ禁闕敷地_ニ立_レ山陵_ニ可_レ葬_レ遺體_ニ哉、無_レ其謂_レ也明也、開化天皇率
川都皇居者、今云、春日野田鄉四恩院其舊跡焉、依_レ伴_レ坂本山陵不_レ遠_ニ于當社_ニ誤傳而、令_レ山陵與_レ
此御子守神宮_ニ混合錯亂_レ矣、亦春日攝社記神號者按_レ轉_レ自_ニ三十八所社吉野水分神_ニ而為_レ異說_ニ俱
不可_レ信用_レ矣、蓋當御子守社天文年中以降及_レ衰微_ニ歲々俗家犯_レ奪神地_ニ或變_レ寺院_ニ而今僅存_レ故
不在_ニ神主社司社僧等坊舍_ニ稍春日社家兼_レ帶當宮神職_ニ而已、故每八月朔且着_レ賢木木綿四手_ニ春日
禰宜黃衣鳥一人、主典一人、來_レ詣當社并漢國社二所、其餘平日曾_レ以不_レ有_レ神供祭祀奉幣法施等儲_レ
歟、適興福寺加行僧侶有_レ參詣_レ耳、自_ニ素雖_ニ隣鄉在家_ニ非_レ氏子產神_ニ各_レ屬_ニ于漢國明神之氏子_ニ



不可信用矣。蓋當御子守社天文年中以降及衰微歲々俗家犯奪神地或變寺院而今僅存。故不在神主社司社僧等坊舍稍春日社家兼帶當宮神職而已。故每八月朔日着賢木木綿四手春日禰宜禰宜朝子一人主典一人來詣當社并漢國社二所其餘平日曾以不有神供祭祀奉幣法施等儲。歟適興福寺加行僧侶有參詣耳。自素雖隣鄉在家非氏子產神各屬于漢國明神之氏子。

率川御子守社圖



中宮媛踏躰五十鈴姫命
左母神瀧織姫命
右父神秋井神

左母神瀧織姫命
右父神秋井神

德願寺

東

西

率川源自出
春日山紀伊社南

俗云子守川

此流細川町三至五

傳香寺

寺瀨光

阿波社古跡

南側人家
之後

西城戸町

江戸屋町

横橋井

川崎寺

宮下町

寺町

藪垣

柳町

馬場

岩宮

三三條

女子守町

大鳥居

築

三三

三三

矣、伏以此大神御子守神宮者、奈良京最第一舊社、而御神威嚴密靈所也、如斯平日止參詣人、而
衰蔽寂寞地嗚呼雖難量神慮不忍歎息乎矣

寶永四丁亥年三月十一日酉下刻、上三條町南側酒家號井戸屋土藏有出火、於此子守神社御神禮神寶
御動座、奉遷於興福寺講堂內西脇、然不係餘燵于社壇、依爲安全、同月十日戌刻、自講堂御
歸座正遷宮也、還御途中次第奉出自南大門、經橋本町角振三條通、而從神前本子守町北小路
俗云金房辻子入御也、三座御正神財物三箇度奉遷之、春日社家衆氏人神人等掌之奉運畢、御道中
用松明御神體奉覆指几帳用白布

去十一日火災御動座之時、三殿三座御神寶令混雜紛錯、因茲遷宮、夜使御圖分三殿上焉難測、人
力奉仕神慮尤可貴可仰者耶云云

明曆二丙申年 子守社御修理諸色入用

一米二百二十五石一斗八升七合

內 渡 分

十七石一斗三升六合

材木代

二十五石二斗

大工飯米作料

添 上 郡

一石五斗六升
 二十六石九升四合
 二石六斗三升三合
 六十六石八斗八合
 四石八斗一升八合
 二十二石九斗三升八合
 十八石

木引飯米作料
 檜皮代
 竹釘代
 屋根葺料
 瓦代
 釘録金物代

下遷宮正遷宮精進料三方常住渡

寺務大乘院殿

下奉行

桐山興市郎
 赤堀源太郎

中坊美作守時祐

下奉行

岡本源兵衛
 田中興介

享保十五庚戌年十六日辛亥快晴

巳刻御修理新始執行

寺務一乘院宮 御家人奉行二人出座

春日禰宜二人黃衣烏帽子

春日大工十六人烏帽子素襖

春日社御造營同時、當社造營爲舊式恒例、然所今度過三箇年許、令遲引訖、仍而殿內及大破云云

同十一月十二日下遷宮、移殿立拜殿、西塀際東向

同年十二月二十六日夜正遷宮

大島居其翌年修理成就、云云、

享保丙辰歲仲春下澣

无無園道靜 謹輯

李川若宮阿波神社一座舊跡今在於西城戶坊、南側

當初祭神事代主神也

古事記曰、大國主神娶神屋楯比賣命、生子事代主神、云云延喜式神名帳上曰、大和國添上郡李川

阿波神社一座小

同下卷曰、阿波國阿波郡建布都神社一座、小、事代主神社一座、小

○案ズルニ三輪高宮系圖ニ「天事代玉籤入彦命、率川阿波神社……神功皇后紀曰、皇后擇吉日入齋宮……有神乎答曰、幡萩穗出、吾者於尾田、吾田節之淡郡、所居之有也、問亦有乎答曰、於天事

添上郡

代於「虛事代玉籤入彦嚴之事代主神」ト見ユ。所謂淡部ハ即チ阿波國阿波郡ナリ。

社傳曰、寶龜二年冬比大納言藤原是公夢云、吾狹井御子神也、汝氏神建布都神社考御靈也、共住阿波國、互有相親、而令皇孫命依召集、項吾與建布都神共來、臨于帝都、歟、建布都神欲留三笠山、於是吾等思居住率川邊、宜敬祭之、是公依夢告、造神殿、自阿波勸請之、仍云阿波神也。

文德實錄曰、仁壽二年十一月辛丑率川阿波神授從五位下云云。

拾芥抄曰、三枝率川社南有社三枝御子也、以三枝華、鎊酒樽祭故曰三枝祭云云。

大倭神社進狀奥書曰、率川社別社三枝御子社一座、南家口傳云藤原是公立率川社、即當社歟傳聞、狹井神之子事代主神、神名帳曰、大倭國添上郡率川阿波社一座、類聚國史曰、仁壽二年冬十一月癸巳朔辛丑九日率川阿波神授從五位下、即當社焉、仁平年中平相國註進之云云祝部大倭直盛繁謹書。

大國主命分身類社鈔附尾曰、率川阿波神社一座大和國添上郡小、事代主命之和魂、私考八尋熊罥也乎、文永乙丑之歲黃鐘阿波社官散位從七位上大神家次述作也。

公事根源云、藤氏南家口傳率川社者、右大臣是公建立、是即率川阿波神社也。謹按元要記、南都古記等、雖載於御子守神社漢國神祠、未載記於若宮阿波神三枝社焉、抑、

當社鎮座者、寶龜二年依參議從三位藤原是公卿武智原之孫、夢想告建宮柱於率川南方今西城川坊南側之後是也、自阿波國阿波郡建布都神社有神格而奉號子守之稚宮、阿波三枝神社也、至龜山院御宇文永年中、在當社、神主大神家次朝臣、亦如卜部兼俱、神名帳頭註奥書、文龜年中猶阿波神宮現存乎、以爲天正年中土一揆或永祿年間松永久秀、兵革或澤藏新助暴虎、又天正一字慶長年豐臣秀長卿南都押領、或元和元年奈良南方火災俗云新町燒、等以降、神社佛宇廢滅而悉變、民屋田園、故阿波神跡今僅在松樹一株於人家後而已、雖鄉內住人、未知有舊社遺跡焉、古老云、天和貞享年間迄、在神石而稱御子守之若宮跡、里人云每月三日御進燈明神酒於其石上、若犯不淨污穢、損害神木一艸者、則忽受疫疾、有神咎而、感驗嚴重也、近世易家改主而蔑神蹟、不詳舊祠遺址乎、雖不可測神慮、未至再興之時、爲荒蕪幽廢、誠可惜可歎歎矣。

里諺云、往昔阿波神宮殿爲西正面也、在大鳥居于其西、故今日西町名馬場町、是即大路馬場前之遺風矣焉云云。

率川御子守神社御本緣、並若宮阿波神宮、由緒世間に流布の神號は甚た誤多きなり、於是下僕率川近邊に幼年より住居し侍りて、神名正傳來歷鎮座詳に尋ねまほしくて、諸家之秘説記録神書國史大三輪大倭大神之社家社流を搜し需め、或は古老の談話里諺に至るまで、編集せしむること既に三十餘歳を経て、漸く成就の功を得たり、雖然愚昧短才にして更に深長の旨を知らず、冀

くは後の君子其の否を除き、正を擧げて補益あらは、終に神明の冥慮にも納受ましまさむと、拙き筆を顧みず書寫さしめ、率川社頭に奉納し侍るものなり。

行年六十二歳

無名園古道 敬白

寛保壬戌歳林鐘穀旦

漢國神社 奈良市大字漢國町ニアリ。モト韓神ト稱ス。神國音相若ケリ。故ニ「カンガウ」ト呼ビ遂

ニ漢國・漢郷ノ字面ヲ用フルニ至レルナリ。祭神ハ大物主命カミヤマトノミコ韓神コリノカミ小彦名命コヒコノミコノ三座ニシテ、古ハ率

川神社ノ別社タリ。故ニ仁安二年十月二十一日ノ率川神社記大倭觀大ニ

別宮……

園韓神社三座 大神氏家牒曰、養老年中、藤史亦建園韓神社奉齋焉神名帳云、宮内省坐神三

座、並名神大、月次、新嘗、園神社一座、韓神社二座、舊記云、伴神等素盞烏尊之子孫、守、疫神也、傳聞、

園神者、大己貴命之和魂大物主命……韓神者、大己貴命、少彦名命也……○此一草ノ全文率川社

トアリ。以テ祭ル所ノ神名ヲ知ルベシ。然ルニ坊目考ニ之ヲ韓神大物主命園神大己貴命韓神少彦名命

スルハ頗ル故實ヲ失ヘリ。

當社ハ率川社記ニ據ルニ亦養老年中藤原不比等ノ創始ニ係ルモノノ如シト雖モ、其ノ實ハ本社率川社ト同ジク推古天皇元年大神君白堤勅ヲ奉ジテ齋齋スル所ナリ。大三輪鎮座次第嘉祿二年大ニ

春日三枝神社 媛踏躰五十鈴媛命也、小墾田宮御宇天皇御世、大三輪君白從承イニ勅立社於春日邑

率川坂岡兩處、奉齋媛踏躰五十鈴媛命、大物主命也、平城宮御宇天皇御世、益造兩社之相殿

爲三座……

ト見ユ。此ノ文ヲ玩味スルニ是率川社即チ春日三枝社及ビ當社ノ創立ヲ并記セルモノニシテ、所謂媛踏躰

五十鈴媛命ハ春日率川ニ祭ラレ、大物主命ハ園神ノ名ヲ以テ坂岡ニ祭ラレタルナリ。其ノ「平城宮

御世益造兩社之相殿、爲三座」トハ既ニ上ニ述ブル如ク、率川社ハモト媛踏躰五十鈴媛命ノミナ

リシヲ養老中藤原不比等、子守・狹井ノ二神ヲ相殿ニ祭り、初メテ三座トセシモノナルガ、ココニ

兩社トアル其ノ一社ハ即チ坂岡ノ園神ニシテ、此ノ時不比等、韓神大己貴命二座ヲ之ガ相殿トセシ

コト甚ダ著明ナリ。然ラバ即チ率川社記ニ「養老年中藤史亦建園韓神社奉齋焉」トアルハ、韓神ノ

二座ヲ園神ノ相殿ニ創齋セシヲ記セルモノニシテ、亦ノ字ハ率川ノ相殿ニ襪接セシモノナリ。元要

記ニ當社ノ事ヲ記シテ

崇峻天皇六年二月癸酉於春日里率川舊庭社壇一所宮柱立……養老元年丁巳四月甲子湖漢國社鎮壇率川御門北面之内蘭林坊良方三所宮柱太敷立奉安神體……

ト云ヘリ。其ノ之ヲ崇峻天皇ノ御世ニ係グルハ謬傳ナルベキモ、社壇一所ハ即チ園神ニシテ、養老以前之アリシヲ藤原不比等相殿二座ヲ副造リ、三座トナシタルノ事實ハ大神氏ノ家牒ニ符合セリ。亦以テ傍證トナスニ足ルベシ。

延喜式神名帳ニ狹園神社八座トアルヲ大和志ニ「在法蓮屬邑佐保田」ト見ユ。因テ今奈良市法蓮町ノ佐保田ニアルモノヲ以テ式内狹園神社ト稱シ現ニ村社タリ。然ルニ大神分身類社鈔ヲ讀ミ、狹園神社ハ佐保田ニアラズシテ漢國社ノ一名ナルヲ發見セリ。其ノ書ニ曰ク

率川狹加園神社一座 添上郡、舊本神名帳云、鳴雷神社八座、率川坐大神御子神社三座、狹加園神社、率川阿波神社、流布鳴雷神社、爲一座、狹加園神社爲八座、脫加字、今隨舊本耳……大物主命現在三座、相殿合祭大己貴命少彥名命也

トアリ。大神君白堤勅ヲ奉ジテ園神大物主命ヲ坂園ニ祭り、其ノ子ノ五十鈴姬命ヲ率川ニ祭りシコト、大三輪鎮座次第ニ見エテ正ニ分身類社鈔ト相符合セリ。類社鈔ハ文永年中率川阿波社ノ神官大神家次ノ撰ニ係リ、所謂神名帳舊本ハ今傳ハラズト雖モ三輪ノ神主大三輪氏ノ藏本ナリシ由、類社鈔ノ跋文ニ見エタリ。然ラバ則チ當漢國社ハモト狹加園神社ノ名稱ヲ以テ延喜式神名帳ニ收メラレシヲ、流布ノ神名帳ニ偶、加ノ字ヲ脱セルヨリ古來謬ヲ傳へ、遂ニ當社ヲ措キテ他ニ狹園神社ナルモノアリトスルニ至レルナリ。察セザルベカラズ。以テ千古ノ謬ヲ正スニ足レリ。

清和天皇貞觀元年當社ノ祭神ヲ平安城宮内省ニ勸請シ、正四位ヲ授ケ奉リ名神大ノ社格トナシ、月次新嘗ノ官幣ニ預ラシム。延喜式ニ「宮内省坐神三座、並名神大園神韓神社二座」ト、即チ是、降ヲ治承ノ兵火當社率川社ト共ニ燒失セシガ文治四年之ヲ再興ス。元要記曰

人王五十六代清和天皇御宇貞觀元年春正月二十七日平安城都宮内省勸請園神一座韓神二座此則當國漢國社乎太裏遷本位正四位此時加一階云云月次新嘗聞食式載之八十一代安徳天皇御宇治承四年庚子冬十二月下旬依平家惡逆春日里忽令廢滅仁民悉成灰燼……爰漢國社壇燒止御神體興福寺一乘院殿長講堂奉移且中宮許御體御出坐殘二社燒上、文治四年夏四月下旬一乘院殿覺昭大僧正後白河院奏聞、被成宣下中御門右大臣家忠自長者承宣率川社漢國社兩宮造立指圖殿内、神物等悉注進也其時長者九條殿也兩宮者御本願一條院殿累代御別當也宮司神人等以悉下知所也爾後沿革詳ナラズ。要スルニ當社ハ率川社ノ別宮タリト雖モ、其ノ創立ハ本社ト同時ニシテ奈良ニ於ケル舊社タリ。且ツ藤原不比等之ガ社殿ヲ造立シ、相殿ヲ加ヘ祭リシヨリ藤氏ニ尊崇セラレシハ之ヲ宮内省ニ移シ祭レルヲ以テ徵スベシ。故ニ古ハ其ノ神地モ廣ク、隨テ所領モ多カリシナランニ、中世以來漸ク衰頹セシハ亦率川社ト其ノ原因ヲ同ウセシナルベシ。宜シク彼ノ社ノ下ヲ參考スベシ。慶長十九年十一月十五日徳川家康奈良ニ次スルヤ、當社ニ參詣シ祈願スル所アリテ鎧一領ヲ奉納ス。今尙存セリ。

集神社 奈良市角振町ノ四辻ノ巽隅ニアリ。因テ角振明神ト稱ス。祭神詳ナラズ。春日ノ末社ニ椿本
 社アリ。長承二年中臣祐房ノ注進狀ニ「中院御寶殿之乾方脇戸際坐字椿本明神所謂角振明神也」ト
 見エ、先規錄ニハ「椿本神社明神 社記曰三見宿禰命也……愚案大和志曰集神祠在 南都角振町 昔在
 春日山ニ號曰三椿本神祠ニ事見成身院僧英俊天文十二年日録……」トアリ。之ニ據レバ三見宿禰ヲ祭
 レルナルモ他ニ憑據ナシ。一説ニ火酢芹命ヲ祭ルト云フモ疑ラクハ華人火酢芹ハ華人ノ祖ノ文字ニ附會セル
 モノナラン。後考ヲ俟ツ。

創立ノ事亦詳ナラズ。延喜式ニ「左京四條坐神一座集神社」トアリ。保元物語ニ「東三條殿に行
 むかつて見るに門戸を閉ちてたゞけともあけすよつて西表南の小門を打破つて入ぬつのふり早ふさ
 の社の前をすきて千巻のみまへにだんを立て行ふ僧あり」ト見ユ。コレ平安城ノ集神ヲ謂ヘルモノ
 ナリ。平城都ヲ平安ニ遷セシヨリ故京ノ神祠ヲ勸請セルモノ多シ。例セバ鳴雷社ノ主水司ニ、太昭
 戸命神社ノ左京二條ニ、園韓社ノ宮内省ニ於ケル皆是ナリ。乃チ知ル、左京四條ノ集神ハ當社ヲ彼
 處ニ勸請セルモノナルヲ。「つのふり早ふさ」ノ社名以テ證トナスベシ。然ラバ則チ當社ノ創立亦
 延喜以前ニアルハ固ヨリ論ヲ俟タズ。惜哉今其ノ傳説ヲ失ヒ之ヲ微スベキナシ。

社傳明治六年ノ神祠明細帳ニ治承四年兵燹ニ罹ルト云フ。再建詳ナラズ。彼ノ替者默阿彌普テ當社邊ニ住シ、
 北小路城主飯田宗義ニ仗リ豊臣氏ニ事ヘズ、亦當社邊ニ隱遁セシコト大和詣將軍傳ニ見ユ。八重櫻

ニ「角振といふ町の東かは南角やしき會所のうらに準明神祠有そのむかしは神の御心中々あらく渡
 らせ給ふゆへ毎月朔日町の老人烏帽子襖をちやくし御供神酒等をさけ神すゝしめけるか中頃より
 襖を略し上下となせりされとも朔日毎にいにしへの法式をなす」ト見エタリ。坊目考ニ「治承已後
 神社不造乎今柿樹爲神體」ト云ヘルハ蓋シ非ナリ。

宇奈太理坐高御魂神社 延喜式神名帳ニ「宇奈太理坐高御魂神社大、月次 相嘗新嘗」トアリテ往時盛大ナル
 社頭ナリシモ稍ク衰微シ、今其ノ所在ヲ確知スル能ハザルニ至レリ。按ズルニ春日若宮神主祐房ノ
 長承註進狀ニ「井栗明神又實名字奈太理坐高御魂神、」又山陵廻リ日記谷森種 案著ニ「古き檢地帳を見
 侍りしに法蓮村の佐保殿村と法華寺との間の田地の字に雨多利と書きたるか見え侍るは宇奈太利の
 舊蹟にて侍るへきを今は社廢して字のみ存せり」ト。之ニ據レバ、モト彼ノ雨太利ニ在リシヲ荒廢
 ノ後春日ノ境内ニ遷シ祀リ、更ニ之ヲ井栗社ト稱セシカ、後考ヲ俟ツ。今奈良市法華寺町梅谷ニア
 ルモノヲ以テ當社トナシ、現ニ村社タリ。

祭 神

祭神社號ニテ自ラ明ナリ。神名帳頭註ニ「武内宿禰勸請之」ト見ユ。

神 戸

天平二年十二 大倭國正稅帳正倉院 文書 曰菟足神戸稻伍拾捌束參把 租伍拾貳束合壹佰壹拾束參把 用伍

拾肆東祭神四東神嘗 殘伍拾陸東三把

新抄格勅符抄曰、菟足神十三戸大和八戸 尾張五戸

奉幣

日本書紀曰、持統天皇六年十二月甲申遣大夫等奉新羅調於……菟名足社

雜事

三代實錄曰、元慶三年六月八日授法華寺正三位薦枕高御產栖日神從二位

延喜式曰、平城法華寺大神神子二人春秋襲東料絹六疋五丈八尺襪料調布八尺沓四兩東大寺古文書本

内開ニニ當社ニ係ル文書一通アリ。左ニ掲載ス。

國使謹牒 東大寺衙

欲被相對公驗、辨定御寺所領春日庄肆町玖段、稱菟足社并喜多院、相妨與福寺狀

三町五段百八十步 稱菟足社田 五段 稱觀禪院田 四段 稱高鷲寺田 五段 稱彌

勒道院田

牒今月七日國符備被左辨官去年十月二十七日宣旨、爾彼寺去三月十九日解備謹檢舊記、件庄本願聖靈天平勝寶八年十二月十二日勅施入也、爾自以降、專無他妨、而今年三月十五日興福寺牒狀、備春日庄内或稱菟足社司所進神田、或稱喜多院傳領田、將以進退者因、茲出下圖帳公驗、令被檢彼寺

司已了然而猶陳可爲社領田之由、耕作下種、已了總件田正爲神田者、寺家司與社司相共依、公驗可糺定也、何興福寺橫以押領、乎加之未定、理非之間引率數多之寺人耕作下種、其所競作、甚以無道、然則以此道理、論彼无道、有開亂口舌之事、望請天裁、早下宣旨、對向彼此公驗、召向官底、將糺理非者、右大臣宣奉、勅宣下、知國宰相對公驗、令辨定、言上者、國宜承知、依宣行之者、所仰如、件郡宜承知、官人并使相共、且臨田頭、且對於社所領公驗等、依實托、理辨定、早以言上、但候公家裁定之間、其坪々田暫不可令耕作、件社寺人々者、牒送如、件是瀾察之狀、早相對公驗、欲被辨定、今勒狀、謹牒

使

大掾五百井 花押

東市正藤原 花押

正曆二年三月十一日

國使謹牒 東大寺衙

衙牒奇紙

被戴早辨定、寺家所領春日莊田稱菟足社田并院々領田、興福寺押領上狀

牒今日衙牒同日到來、任國符、早可辨定、春日莊田四町九段、稱菟足社領、興福寺押領者、今依衙牒、謹檢案内、今月七日國符、傳去年三月十三日宣旨、傳得東大寺解狀、傳寺家所領春日庄田稱菟足

添上郡

社田、興福寺俄以押領望請天裁、早賜宣旨、召向公驗、將於官底辨決、理非者在地國司辨定言上者、乃差定國使東市正并據五百井、發向如件、郡司承知、與使者共辨定言上者、因茲隨身、今月十三日到着、在地即可、被出各公驗、對向之由牒送兩寺、已了而興福寺被送、寺使未送公驗、又蒐足社司大中臣良實進申文件、社雜務爲藤原扶高、從去年被進退者、然則興福寺不被送公驗、社司者申爲扶高、被進退社務之由、勘糺之旨以誰決之、又御寺所被送、勅書圖券興福寺所被送者、唯民部省勘文并國田所勘文等、其外圖券等、于今未持來、仍忽以難辨決、延引之旨使非懈怠、乞衛察狀、今勅事狀、謹牒。

正曆二年三月十四日

國使大掾五百井 花押

東市正藤原 花押

太詔戶神社

延喜式神名ニ「太詔戶神社」大月「新抄格勅符抄」ニ「大祝詞命神」一戶神護元年「天平」ト見エ、太詔戶命ヲ祭ル。太祝戶命ハト筮ヲ知ル龜ノ靈ナリ。故ニ龜津比女トモ稱ス。當社ノ事ハ元要記曰

添上郡太祝詞神社大月次新嘗地神三代尊降臨時有龜神名太祝詞命服玄衣而進延頸白日照大神曰鹿者知天而不知地龜莫所不知焉請獻甲灼之觀兆則天下之吉凶居可知矣云云

龜相記日本紀所引龜龜傳コレ曰

皇親神魯岐天照大神神魯美命高皇產靈日荒振神掃平石本草葉斷其語詔詳神吾皇御孫命者豐

葦原水穗國安平知食天降奉寄之時誰神皇御孫尊朝之御食夕之御食御食也長之御食遠之御食

開食開食大嘗會昏曉御膳也可仕奉神問賜之時俚天香山白眞名鹿一說白吾將仕奉我之肩之骨內

抜々出火成ト以問之間給之時已致火爲太詔戶命進啓又按持神女住天香山龜津比女命今稱天津詔戶太詔戶命也白眞鹿者

可知上國之事何知地下之事吾者能知上國地下天神地祇況復人情云云

太詔戶神社本社在三國壹岐島壹岐郡大和國今祭ト部坊櫛間智神社母鹿木神也本社在二國壹岐

大和國十市對馬國上縣郡祭ト部坊行馬社一名駒駒社在對馬國平群郡火燧木神也大嘗御代々探此社灼ト用水龜元住池故令開水

凡壹岐島ト部上祖天比都豆柱命對馬島直之上祖押磨命陪於天兒屋命仕龜ト御體吉凶三年

爲期中天之兒屋執奏神倭伊波禮比古天皇始御倭豐秋津島今是上都也

活目入彦伊佐知天皇定賜國境及天神地祇之社始從男弭御調乃太詔戶社更建於大和國

帶中日子天皇御代兒屋命十二世孫雷大臣命執掌曰在東國ト部姓者皆我之後也以伊豆之

ト部令供ト部今以號四國ト部

ト見ユ抑ト筮ノ我國ニ傳ハルハ蓋シ壹岐對馬ノ二島ニ於テス後之ヲ内地ニ傳ヘ朝廷ノ

大事ヨリ民間ノ吉凶ニ至ルマデ苟モ人事ノ及バザルモノハ一ト筮ニ依リ之ヲ決斷ス十市郡天香山社ノ下參考ス

故ニ當時其ノ勢力頗ル盛ニシテ以テ神人相通ノ一機關トナセリ其ノ之ニ從事スル者ヲト部ト

稱シ、天兒屋根命ノ後ト云フ。其ノ族壹岐・對馬・大和・伊豆ニ分居シ、時ヲ以テ出テテ官府ニ勤仕シ、コレヲ四國ト部ト謂フ。而シテ此輩其ノ居ル所ニ於テ各主神ヲ祭ル。天香山ノ坂門社ノ當國ニ於ケル、太祝詞社ノ對馬ニ於ケル皆其ノ類ナリ。然ラバ即チ當社ハ平城ノ朝ニ神祇官ニ奉仕セルト部等龜靈ヲ祭リ太詔戸社ト稱セルモノナリ。但、龜相記ニ垂仁天皇ノ時太詔戸社ヲ大和國ニ立ツトアルハ十市郡ノ太祝詞社即チ坂門社ヲイフナルベシ

延曆遷都ノ後舊京ノ諸神ヲ平安ニ移スニ及ビ、更ニ太詔戸社ヲ左京ニ建ツ。延喜式神名ニ所謂京中左京二條坐太詔戸命神月次相嘗新嘗ニシテ、龜相記ニ「本社在ニ三國今祭ト部坊」ト。即チ是ナリ。爾後當社漸次衰微シ、今已廢シ其ノ址詳ナラズ。或ハ奈良市東新在家町南側東角人家ノ後ニアリト云フ。

註（東新在家ハ今奈良女子高等師範學校敷地トナル。同校寄宿舎東南ノ邊カ。）

鳴雷神社

春日山ノ香山カサセノ山ノ道地獄谷池ヘ行ニアリ。俗ニ髮生宮ト稱ス。會延喜引神名ニ「鳴雷神社大、月」ト。即チ是。祭神ハ鳴雷神ニシテ即チ水德ノ靈ナリ。之ヲ鳴雷ト稱スルハ水ノ旺ンニ涌出ヅル狀ヲ形容スルノミ。延喜式ニ「宮中主水司坐鳴雷神」ハ蓋シ延曆遷都ノ際當社ノ祭神ヲ宮中ノ主水司ニ齋祭セルモノニシテ、即チ平城ノ準神ヲ平安三條ニ祭ルト同例ナリ。高市郡波多御井神社ノ下參照ヲ要ス

祭祀

延喜式四時曰、二月鳴雷神祭一座十一月准此……右差中臣一人 供祭
 年中行事秘抄云、二月擇吉日之條、鳴雷神祭事大和國添上郡 神祇官遣中臣一人 供祭

宅春日神社

奈良市白毫寺町田谷ニアリ。天兒屋命ヲ祭ル。俗ニ宅春日ト稱ス。社記ニ「天兒屋命者神護景雲二戊申年自河内國平岡遷御大和國添上郡高圓山之麓……矣同年十一月九日遷御笠山峰其高圓山舊社地者往古添上郡大宅郷之地也據之今號宅春日……」ト見ユ。然ルニ春夜神記ニ「大明神平岡より此所に影向ありて其後本宮嶽に移らせ給ける也遷宮の後雷火にて社燒ぬ故に燒春日ともいふ」トアルハ、宅ヲ燒ニ附會セル俗説ニシテ道フニ足ラズ。

奈良豆比古神社

奈良市奈良坂町ニアリ。延喜式神名帳ニ「奈良豆比古神社堂」トアル即チ是。俗ニ奈良坂春日ト稱シ、中ゴロ衰頽シ、西福寺境内ニアリテ、其ノ鎮守タリシガ今ハ村社トナレリ。坊目

考ニ奈良神社

西福寺境内ニ在リ 奈良坂春日社ト號ス

若宮神殿 左座 春日稚宮是也

大宮神殿 中座 春日四御殿是也

奈良神殿 右座 矢幡大神田原天皇是也

延喜式神名帳曰添上郡奈良豆比古神社是也

當社緣起曰正中元年神主 弓削氏之記 光仁天皇寶龜二年辛亥正月廿日奉祭施基皇子於奈良山春日離宮 奈良津

彦神是也後奉諡田原天皇……

○續日本紀云寶龜元年十一月己未朔甲子詔曰……掛恐御春日宮 皇子奉稱天皇……

緣起云寶龜十一年庚申十一月廿一日春日王田原天皇第二皇子奉祝春日四御殿大神當座中之御社是也

同云保延二年丙辰十一月廿二日春日若宮天押命神勸請於左座奉號奈良春日三社云云

トアリテ其ノ大宮神殿中座ハ施基皇子ノ二子春日王ノ靈ヲ祭り、奈良神殿右ハ施基皇子即チ奈良津彦尊ニシテ共ニ寶龜中ノ齋祭ニ係リ、若宮神殿左ハ保延中三笠山春日社ノ若宮ヲ此所ニ勸請セルモノナリ。施基皇子ハ光仁天皇ノ御父ニシテ、薨後春日宮御宇天皇ト追尊セラレシコト既ニ國史ニ明ナリ。當社ヲ春日社ト稱スルハ所謂春日離宮ト春日宮御宇天皇ノ名稱ニ因メルモノニシテ、三笠山春日ノ社名ヲ襲ヘルニアラズ。相混ズルナカレ。緣起ニ春日王ノ逸事ヲ記スルモ要ナケレバココニ載セズ。

和爾坐赤坂比古神社

樺本町大字和邇北垣内ニアリ。天平二年十二月大和國正稅帳殘關正倉院文書ニ「丸ワカ神ノ戸ノ穀伍拾斛漆斗玖合升四合定肆拾玖斛漆斗壹升伍合、替依稻肆佰玖拾漆束壹把半、額肆佰伍拾貳束租壹佰壹拾參束、合壹仟陸拾貳束壹把半、用肆束神祭殘壹仟伍拾捌束壹把半新抄格勅符抄ニ「和爾神四戸大和」延喜式神名帳ニ「和爾坐赤坂比古神社大月次新嘗」トアリテ、古ハ盛大ナル社頭ナリシモ中世以降衰微シ今ハ村社タリ。祭神赤坂比古命何神ナルヲ知ラズ。蓋シ和珥氏ノ祖神ナラン。

和爾下神社

延喜式神名帳ニ「和邇下神社二座」トアリ。一座ハ樺本町治道ニアリテ、俗ニ上治道天王ト稱シ、一座ハ大字横田治道山ニアリテ下治道天王ト稱ス。其ニ今村社タリ。祭神ハ素戔鳴命・大己貴命・稻田姫ノ三神ヲ祭ルト云フ。按ズルニ横田ハ横田物部氏ノ住所ニシテ、饒速日命ニ關係アルコト横田學下ニ述ブルガ如シ。而シテ筒井諸記ニ當村ノ事跡ヲ記シテ

當村鎮守 下治道午頭天王ト云フ
又ノ説横田物部社トアリ
文祿御高 一千七百七十七石二十九坪

慶長巳後春日社領御寺務御殿御支配

添 上 郡 横 田 村

トアリ。此一説ニ據レバ物部氏ノ祖神ヲ祭レルモノナリ。後考ヲ俟ツ。

天乃石立神社

小柳生岩戸谷ニアリ。天手力雄命ヲ祭ル。今村社タリ。式内天乃石立神社ハ即チ當社ナリト云フ。按ズルニ柳生家傳本朝武評傳所引ニ「神戸岩之邊四箇莊所謂大柳生莊坂原莊邑知莊小柳生莊也神代以來靈地而藤原基經並領四箇莊其六代後孫大師藤原賴通以四箇莊寄附春日社以爲神料地時長曆二年也後年爲春日神職料大柳生庄右京利平也坂原庄左京基經也邑知庄修理包平也小柳生庄大膳永家也相分爲四箇庄主以分領之居焉」ト見ユルモ當社ノ事微スベキナシ。中臣祐房ノ注進狀長承二年ニ「少神名……中院青神明神又名天乃石立神……青神一前實名天乃石立神」トアレバ、春日ノ末社青神神ハ式内天乃石立神社ヲ勸請セシモノカ。マタ荒廢ノ後春日ノ境内ニ遷祀シ、更ニ青神神ト稱セシカ。後考ヲ俟ツ。

添 上 郡

二二三

穴栗神社 東市村大字古市穴栗ニアリ。穴栗四社明神ト稱ス。本朝神社牒内閣文庫蔵ニ

伊栗社 穴栗社 青柳社 辛柳社右四社相殿ニ而惣名穴栗神社ト唱來候

ト。即チ是ナリ。今村社タリ。按ズルニ春日ノ末社ニ伊栗・穴栗・青柳・辛柳ノ四社アリ。中臣祐

房注進狀ニ「小神目錄……青柳一前實名天乃辛柳一前、穴栗一前實名井栗一前實名字奈太理」ト見ユ。

彼ノ穴栗社ハ當社ヨリ勸請セシカ、マタ春日ノ末社ヨリ此所ニ合祭セシカヲ知ラズ。但シ中臣祐重

記ニ「保延元年八月三日依左衛門佐宗光奉小神十七社毎日可備進之旨被仰下其十七社内穴栗井栗

神社若宮神主祐房自横井村奉渡于中院備進之」ト。コレニ據レバ穴栗・井栗ノ二神ハモト本郡横

井村ニアリシヲ、若宮神主祐房春日社境内ニ移祭セルモノノ如シ。姑ク記シテ後考ヲ俟ツ。

延喜式神名帳ニ添上郡穴次神社アリ。上田百樹云フ「穴次舊訓「アナツキ」「アナフキ」「フエフ

キ」とあり其に誤れり穴昨是なり」ト。然ラバモト穴昨神社ト稱セシヲ昨吹呷體相似タルヲ以テ

穴吹ト誤リ更ニ穴次ト誤レルナラン。今之ヲ「アナクリ」ト稱スルモ「アナクヒ」「リ」「ヒ」ノ轉訛

ナルベシ。穴昨ハ景行天皇紀ニ「五十五年春二月戊子朔壬辰以彦狹島王拜東山道十五國都督

是豊城命之孫也然到春日穴昨邑臥病而薨之」トアル地ナレバ、疑ラクハ王ノ靈ヲ祀リテ穴昨

社ト稱セシカ。亦後考ヲ俟ツ。近地ニ宅布世社・大和日向社アリ。參考スベシ。

宅布世神社 延喜式神名帳ニ見ユ。宅布世ハ「タカフセ」ト訓ズベキカ。古、宅ヲ「タカ」ト訓ズル

ノ例多シ。豊城入彦命五世ノ孫ニ多加波世アリ。多加波世一ニ竹葉瀬ニ作り、仁徳天皇ニ仕へ國家
ニ功勞アリシコト國史ニ詳ナリ。蓋シ其ノ靈ヲ祭リシナラン。今東市村大字鉢伏ノ村社ヲ式内宅布
世社ナリト云フモ據ナシ。

大和日向神社 延喜式神名帳ニ見ユ。在所・祭神詳ナラズ。神名帳考證ニ「姓氏錄云豊城入彦命男倭

日向建日向八綱田命今在奈良村稱輕天社是乎輕部八綱田命後也」トアリ。是ニ似タリ。

賣太神社 延喜式神名帳ニ見ユ。在所・祭神詳ナラズ。祭神ハ比賣陀氏ノ祖菟上王カ。今平和村大

字稗田ノ村社ヲ以テ式内社ト稱スルモ據ナシ。

註 (大和國稗田村猿女君族ノ舊趾ニテ其ノ養田ヲモ存シタルコト西宮記・類聚三代格之ヲ證スベク、猿女君族ガソノ氏祖

又ハ族中傑出人ヲ祭祀スル古俗ニ則リ稗田ニ神社ヲ創祀シタルハ當然ニシテ延喜式神名帳ニ所載ノ賣太神社ナル可シ。

然ラバ祭神稗田阿岐ナルコト自ラ明ラケシ。

春日神社 延喜式神名帳ニ添上郡春日神社ト見ユ。但シ官幣大社ノ春日社ニアラズ。或ハ云フ、野田四恩院境内ナル浮雲

宮ナリト。據ナシ。

天乃石吸神社 延喜式神名帳ニ見ユ。在所詳ナラズ。中臣祐房若宮神主ノ祖ノ長承二年注進狀ニ「自御寶

殿巽方五町去座紀社明神申春日祭神所謂赤徳神島田神社立命天乃石吸神又曰夕紀社四前所謂赤徳神島田神御前トアリ。尋尊僧

仁二年春日末社之ニ據レバ當社荒廢ノ後春日社境内ニ合祀セラレ、紀伊社ト號セシナリ。

御前社(原)石立命神社 延喜式神名帳ニ見ユ。長承注進狀應仁春日末社記ニ據ルニ既ニ紀伊社ニ合祭セラレシナリ。大和志ニ「在古市村」ト云ヒ、因テ今東市村大字古市宮ニアルモノヲ以テ式内社トスルモ據ナシ。

島田神社 同帳ニ見ユ。亦既ニ紀伊社ニ合祭セラレシナリ。大和志ニ「在八島村」ト云ヒ、因テ今東市村大字八島今ニアルモノヲ以テ式内社トスルモ亦據ナシ。

赤穂神社 同帳ニ見ユ。亦既ニ紀伊社ニ合祭セラレシナリ。大和志ニ「在南都高島神坊」トアレド何ニ據ルヲ詳ニセズ。

附 録

春日若宮祭禮

保延元年即チ長承四年二月二十七日中臣祐房若宮ヲ創祀シ、同二年九月十七日ニ至リ初メテ祭禮ヲ行フ。爾後恆例ノ神事トナレリ。

和州誌曰 上若宮神主祐房蒙神勅、保延二年九月十七日初行祭禮。

若宮祭一ニ保延祭ト稱シ、或ハ單ニ御祭トモ云フ。言フハ保延ノ創始ニシテ、其ノ禮式ノ盛大ナル國中諸祭此右ニ出ヅルモノナク、單ニ御祭ト稱スルモ尙當社ノ祭禮タルヲ知り得ベキヲ以テナリ。昔時藤原氏ノ盛ナルニ當リ春日社ニ齋女ヲ置カレ、其ノ參社ノ威儀トシテ特ニ當國司ニ令シ、騎士執戟數十人ヲ差發シ之ヲ護衛セシメタリ。若宮ノ祭禮ニ古來國中ノ武士コレニ預ルハモト攝政關白藤原忠通ノ命令ニ出デ、即チ齋女社參ノ威儀ニ倣ヒタルモノナリト云フ。ソレ或ハ然ラン。而シテ大和武士ノ祭禮ニ於ケル、古ハ流鏑馬ヲ演ズルノミナリシハ神主千鳥家藏祭禮記ニ「正和四年流鏑馬十騎芳野二騎箸尾二騎脇田二騎……文保元年十一月十六日檜原五騎元亨二年九月十六日檜原有遺五騎元弘元年九月伴田遺任五騎同三年萬歲九郎一騎建武元年長谷川一騎」ト見ユルニテ自ラ明ナリ。然ルニ建武以

來國中、大ニ亂レ、武士皆威カヲ振ヒ、嘗テ興福寺衆徒或ハ春日神人タリシ緣故ニ因リ祭事ニ預リ自家ノ富勢ヲ觀スベク、其ノ儀仗料足ノ施主トナリ、之ヲ願主人ト稱セリ。至德元年四月注進ノ中川流鏑馬日記川東村大字唐古住今中氏藏、ニ願主人ノ交名ヲ記シテ曰ク

- 箸尾殿 金剛寺殿 伴堂殿 片岡殿 立野殿 相谷 島岡 北角 萬藏 高田 中村 布施殿 拘
 - 尸羅殿 椿原 脇田殿 吐田殿 糰田殿 室殿 稻屋戸殿 越智殿 五條野殿 子島殿 南郷殿
 - 筒井殿 檜垣殿 細井戸殿 岸田殿 河合殿 襟本殿 山田殿 福住殿 長谷川黨 唐古殿 在原
 - 殿 大木殿 楊本殿 戒重殿 江堤殿 大西殿 大佛供殿 賀留殿 十市殿 味間殿 木原殿 松
 - 塚殿 土庫殿 吉備殿 池内殿 安倍 放野 志賀 佐味 高瀬 迎田 小林 郡山 超昇寺 山
 - 陵 狹川 深川 平清水 長谷 椿尾 小藏 助命 山中 丹生 柳生
- トアリ。此輩地勢若クハ他ノ關係ヨリシテ散在・長谷川・中川・乾・南ノ五黨ニ分レ遞番祭禮ニ勤仕ス。事、中川流鏑馬日記ニ詳ナリ。宜シク本書ニ就テ見ルベシ。坊目遺考ニ引ケル記録ニ

大倭武士春日大宿所願主人勤番次第

散在等

高市郡誠火山西

越智姓物部

二萬四千石餘

大宿所毎年相詰

長谷川等

十市山城住

十市姓中原

十萬石

大宿所隔年勤之

中川等

廣瀨郡箸尾住

箸尾姓藤原

六萬石

大宿所隔年勤之

乾等

添下郡居城筒井村

姓大神

十二萬石

大宿所五年目勤之

南等

葛上郡金剛山麓住

椿原

三萬石

大宿所五ヶ年目勤之

之ニ據レバ越智ノ物部氏ハ散在黨、十市ノ中原氏ハ長谷川黨、箸尾ノ藤原氏ハ中川後、長川ニ作ル黨、筒井ノ大神氏ハ乾黨、椿原氏ハ南黨ノ首領トシテ之ニ預リシナリ。後、長谷川・中川・乾・南ノ五黨ハ所謂南黨ノ別名ニシテ、平田黨ハ田・葛上ノ六黨トナル。至德中ノ長川流鏑馬日記ニ乾臨平田ノ名稱見ニ、當時既ニコレアリシヲ知ルベシ葛上黨ハ所謂南黨ノ別名ニシテ、平田黨ハ

添上郡

嘗テ興福寺領平田ノ莊官タリシ萬財・布施・高田ノ一黨ヲ謂フ。若宮ノ祭式ハ千鳥家ノ記録ニ詳ナルモ繁キニ依リ之ヲ略ス。但シ願主人ノコレニ對スル作法ハ、今中氏ニ藏スル中川流鏑馬日記・若宮會目錄ニ詳ナリ。他ニ類本ナキヲ以テ左ニ全文ヲ掲ゲ以テ參考ス。但シ流鏑馬日記ハ稍混淆ナルヲ以テ之ヲ省ク、宜シク本書ニ就テ見ルベシ

若宮會目錄 (全)

一 當年願主請取事

二月中ニ法貴寺氏人等成ニ集會、其龍次ニマカセサシ定也願主木口之仁體モトヨリ其心カケ有アキタ吉日ヲモツテ何ノ日請取ヘキ由公文方ヘ云也彼使ハ公人ヲツカハサル願主ノ分限ニヨツテ種々ニモテナシテ引出物ニアルイハ太刀或ハ料足トラシテ返事ヲ渡ス然ルニ此日流鏑馬ノ射手御師願主ノ一家一門ヲ請シ申テ酒ヲモル也祝言ノ初也何ニモ可祝事也(助成ヲ云ソムルナリ楊隨兵先打ナントノ太儀ナル役者ヲイカニモノ急申定ヘシ但去年ノ祭)

一 自寺本 差狀之案文

當年若宮之祭禮願主役事任龍次ニ差定申候目出可被勤仕之由衆議評定候也恐々謹言

二月 日

公文名判

願主之名字御宿所

同返事之案文

若宮之御祭禮願主役之儀私木口之由承候意得申候雖爲如形目出可奉勤仕之由可有御披露候也恐々謹言

乃尅

願主

長谷川公文殿御返報

一 願主自請取可心精進事

請取テヨリ出陣セスケカレタル所ヘ不入又ケカレタル人ヲ家ノ内ヘ不入但服者ナントハ六月マテハ凡ソクルシカラサル歟

一 所々へ助成可申事

總而以吉日スルノト請取給フヘキ人ノ所ヘ行テ助成ヲ云ソムル楊隨兵先打ナントノ太儀ナル役者ヲイカニモノ急申定ヘシ但去年ノ祭禮過ハ則木口ノ仁ハソノ心カケアル間ウケトラサル前ヨリモ其器量ニ仍テ契約アルコト有也惣テ月日ノ立コトハホトモナシ次第ノニ役者並カケ物以下何レヲモ人々ニ申契約スヘシ彼助成ノシツタウナントハ委細他本ニシルセリ

一 願主精進初之事

五月晦日ニ立田ノ鹽瀬ニテコリヲカキ給フヘシ彼トコロヘ新キヒシヤクコリカタヒラウハシキ

添上郡

ヲモタスルナリサテ鹽瀬ノ御エヒスへ參錢同ハラヒシタル御子ニモ料足百文又ハ二百文ツ、マ
イラス最下ノ願主ハ人別ニ一文ツ、ハカリマイラスルナリ同彼在所ノ茶屋ニテ伴衆ニモ茶ヲノ
マセテチャノ錢ヲ置ナリ同ク一家中精進ノ事コリカキニ行マエヨリ服者月水ノ女等悉ク出シテ
御湯ヲツカハセ高シメヲ引ヘシ今日ヨリ彼シメヨリ内へ重服輕服トモニ入ヘカラス願主人ハ則
今日ヨリ烏帽子ヲ召給キコモヲアテ飲事ニ火ヲ打懸別火別座敷ノ儀式タリ鹽田石ヲ取テ來テ日
コリヲカキ給フヘシ又餘所へ行給テ人ノ内へ入タマフ共若ケカレナントノ行フレナキ在所ヲヨ
ク／＼キ、テ御入アルヘシ但服者ノ内ニアルハクルシカラサルト云サリナカラ家主ノ服者ナラ
ハ其門ヨリ内へ入レヘカラス

一 六月一日御社參ノ事

先法貴寺天滿宮へ毎月マイリ給テ御神樂在之則ミキヲ祝イ給フ御神樂錢ハ願主ノ分限ニ仍テ多
少アリ最下ハ六月マイリト八月ト九月ト十一月ト二十六日ト此四度ハ米一斗ツ、ナリ其外
ノ月マイリニハ三升ツ、ナリ是ハ地下ニテヨク／＼ノ無力ナル願主ノサタナリヨソヨリノ願主
ニ如此日記シツタウユメ／＼出スヘカラス

同奈良ニテタチカラヲノ御前ヨリサルサハノ池ノハタヨリワキノ坂ヘトヲリ給フヘシ南大門ヲ
スタニ馬ニテ通ル事ハ御祭禮ニ兩日ナラテハアルヘカラスサテコマツナキニテ下馬シ給ヘハ二

鳥居ニ願宜マチ申テハラキ殿ヨリ案内者ヲ申ス也 大宮殿ニテ願主エンサノ上ニ祈念シ給ヘハ
御師御幣ヲ三ヘイキタ、カセマイラスル一騎別ニ一ヘイ宛也分限アル願主ハ神馬ヲマイラセ給
フ其後若宮殿へ參リ給テ拜屋ノエンサノ上ニ祈念アリ是モ次第サキノコトシサテ兩殿へ御神樂
錢マイラス或ハ八乙女ヲ立給モアリ或ハ亂拍子ヲマハセ申サル、モアリ或ハ常ノ御神樂ハカリ
マキラセ給モアリ又兩社并諸社へ參錢アルヘシ同御師へ御幣ノ布施アリ一コンノ禮錢下行アリ
其ノ外ケキエイ衆ノ中ヘモ料足ヲ出シ給フ也

一 流鏑馬射初事

六月社參下向之日則馬場へ出給テ三度引渡也同鞍懸ナラシヲモヲシヘソメケリ但シ若日暮ル、
コトアラハ以後ナリトモ吉日ヲ以テ何モサセソメラルヘシ流鏑馬ヲシムル次第他本ニ注置上ハ
不能一二者也

一 法貴寺之神事用意事

彼神事ニ御幣之入目并一コンノ注文公文方ヨリ兼日ニツカハス也彼注文ハ昔ヨリアリ付タル日
記也ソレハカタノコトクナリ此外イカホトモサケサカナヲホンソウアリテ申給フナリ

一 九月十九日神事等之事

然ハ十八日夜宮參シ給フテ御神樂マイラセ其ノマ、スクニ流鏑馬アリサテ客坊へ奉行人アマタ

留リヨキニタイト毛立共モタセラル、ヲ請取テサシキニ夜ノウチニカキ立テ置也彼膳數昔ハ百六十膳ナリ今比ハ百二十膳ハカリニテアル也サル程ニ辰ノ時ノ出仕也御杯マイル鳥ノコニテ五コンマイル其後マナイタ物ニテ三コンサテ亂酒ニナル一薦ノ前へ願主シヤクニ立給フ又一薦其外願主ノマヘエ立給フ御杯トモ末へ悉クトヲリテ一同ニ座敷ヲ立給フナリ

一 楊張替用意之事

一 御幣注文 アツカミニ帖白ヌノニタン御幣フクリ 一 楊之道具 竹笠水干ハ寺本ニアリ弓矢 サカツラ フハフヒ マト二本カシナカケ九マイ白米二升 一 張替之道具 同丸 同甲 弓ノ袋 ヌノノウハ帯 カタナ カチンノヒタハレ 一 當矢二人 マトモチ御ヘイモチ 同ボウシ 同キヤハン カミワランツ 馬クラ フサ ウチマセ 也下部ニハカミシモ 一 馬クラ フサ 白サ シナハ 一 馬クツ ムコテ ムカハキ フチ スル

一 渡リ馬場之會次第

一 一番御幣 二番的 三番張替 四番楊 五番願主氏人等 千體堂ヨリ小門へ出鳥居ノ西ニ 東へ向テセイナウノ次ニ渡ル

一 馬場會之薦次

一 一番 ハ、ア 二番的 三番小揚 マト立ハ願主口 取ハワキ願主 四番 ハ、 五番 ヤフサメ 其後願主并役人等宿坊へ同道アツテ一コンイハイテ後直垂ヲヌキ上下ヲメシ拜殿ニテ猿樂ヲ見給也但見物ハ隨意ナリ 一 京上之事

十月中ニ上洛アリ買物ノ注文

一 一番ニ新シキ □子ヲカキテシメヲ引テ 御幣ノアツカミ三帖 付絹 カケ絹 ヒサツキ 小刀 ステフチノ扇等買給フナリ 又射手ノ裝束願主ノ裝束惣シテ色々ノ買物并楊ノ裝束契約のヲアツラへ先料ヲヤリ悉皆此時事ヲナス

一 小精進屋之事 彼注文クワシ 他本ニアリ

十一月二十一日早朝ニ立田コリカキ給フ鹽田ニテノヤウ以前ノコトシ同精進屋用意ノ事他本ニアリ

一 諸奉行人奈良へ上可給事

二十日二十一日ノ比ヨリ次第ノ上リテ其ノ用ノ事ヲナシ給フヘシヲソク上テハ萬事取コミテ事ヲカクコトアルナリ同大宿所ニテ可入資材道具借物等之注文イツレモ他本ニアリ

一 南都精進屋用意之事

カハラケ大小 ホウロク タ、ミ ヲケ大小 ヒシヤク大小 カナワ ヒウチ イワウ 白タ イ タライ ウハシキ コンヤク ナカタナ シヤクシ キキヒツ キテウシ

一 御湯仕之事

添 上 郡

二十五日ノ夕部地下ノ御子ヲシヤウシテツカハスナリ
入目ノ事コノ時分的ヲ請取ヘシ

中紙一帖 白ソニカブ但分限者ハ一ワ也 斗ヲケ一 キテウシ一 ヒシヤク一 ウハシキ一枚 タル一カ又ハ一カモ
出スヲケニ入テモ出ス フセ一貫文或ハ五百文最下ハ三百文ナリ 湯カタヒラコレハフケン者ノサタナリツネノ願主
ハカタヒラ湯カマヲハミコノ方ヨリモタセテキタルナリ

一 御幣挿之事

二十六日ノ朝大宿所ヘ御師來テハサミ申候

御ヘイキヌノカハコヲ取出テカミキヌコカタクシカキイタ此二色ハ的ニ付テヲコスルナリ
斗桶三コレニ白米ヲ入テ出ス キテウシ三 ヒシヤク三 ウハムシロ三枚 タル三 九スエノ膳三セン 其外子キ三
人ニモスエテ酒ヲモルナリ スエサカナ ワリコ チマキ ニテフセ八十貫文或ハ五貫文或ハ三貫文最下ハ一貫五百
文又ワキネキニ此三分一ハカリ出ス同下部ニモ百文カ二百文トラスルナリ

一 御社ヘ進上物之事

二十六日早朝ニ御神樂錢懸物御院飯何レモノネンコロニ兼ヨリ其奉行ノニ仰付大宿所ノ庭
ニソロヘヲキテ惣奉行出給テ能々カスヲ色メテ可然中間ヲアマタ奉行ニ付テヨミワタスナリ彼
奉行ウケ取テ兩社ヘ渡申テ沙汰人ノ請取ヲトリテカヘルナリ同夕送狀之案料紙ニ
進上 若宮殿又ロクノ御カクラノ
ヲハ別紙ニツカハス

鳥目 御樽 鵠 白鳥 鴻 雁 鴨 烏 菟 鯉 鮓 鯛 鱈 鮓 破籠 折 蘇餅 粽

十一月二十六日

以上

長谷川名字大宿所奉行 在判

御拜殿沙汰人御中

同大宮殿送狀モ今ノコトクカキテ

大宮殿神人御中ヘトカク

一 楊隨兵并諸役者ヘ送狀事

御和 鵠 鴻 雁 鴨 金鳥 兎 鯉 鮓 鯛 鮓 破籠 折敷餅 粽 鳥目 以上 昔ハ料
番ニカク今ハツ 足ヲ一
クニカキ給フカ

月 日

長谷川名字大宿所奉行

名字御宿所

サテ如此次第ノニ送申テ願主田舎ヨリ御上リヲ待申 的御幣神馬ナント用意申テマチ申スヘ
シ

添 上 郡

一 願主人奈良入之事

二十六日ノ朝法貴寺天滿宮へ參り給フ楊張替コトク出立テ楊射手願主拜殿ニ座シ給へハ御神樂マイラセテミキヲ祝給フ侍モ悉打ヨリテ客坊ニテ一コンアリサカナハタウフ、ハス、大コンナントスエサカナノヤウニ用意シテマイラス余所ヨリ助成ニセラルレハ一貫文也然ハナラマテノ馬打ノ次第

一番射手 二番楊前打 三番張替三騎 四番楊三騎 五番二行前打 六番願主 七番御師 八

番侍 九番打コミ此ノ如クト、ノ

同大宿所ヨリ御社參ノ次第イッレモ用意シテ待申也

一番的 二番御幣 三番カケキヌ 四番神馬 五番楊之前打 六番張替三キ 七番楊三キ 八番

二行打 九番願主近來ハ前打ノ先ニウツ 十番御師 侍ウチコミ

如此ノ次第ヲ折紙ニシルシテ奉行ニ侍又又ワガサキモタセテ次第ノニ參り給テ二ノ鳥居ノ下ニテ下馬シ給フ禰宜待マウケ何ツモノ如クハラヒ申兩社へ參り給フ神前ニテノ作法他本ニ在之口傳多之サテ下向ニ流鏑馬アリ當方ニハ夜宮ニハ馬場アカリナシ

一 大宿所へ隨兵侍付給へキ事

馬場ヨリスクニ殿原へ侍ヲモツテ次第ノニ御ツキアルへキ由悉ク申也則付給へハ居着九居破

籠粽ヲスエテ酒ヲ申給フ又其後願主ノ器量ニヨツテ或ハマンヂウ或ハムシ麥數々ノサカナニテ別而酒ヲマキラセ給フモアリ此時ノシヤクハイセン人ハ是本吉一族侍ノサタ也若殿原方へハ同カシツキノサタナリ

一 中綱仕丁付事

是モ侍ノコトクニ九居ヲスエテ酒ヲモルヘシ乍去後ノケタミハスエス配膳人ハ仲間小者也彼兩座へ料足下行ハ願主一騎別ニ貳貫五百文宛下行在之此外別ノ志トテ往古ヨリ應仁年中ノ比マテハ願主ノ分限ニ仍テ二ノ三ノ下行ス分限アル方ニハ十貫二十貫文下行アリシ處ニ越智之彈正忠家榮之願主之時宮本一千貫マキラセ給フ彼特別ノ志百貫文下行アリシヲ今ハ例ニ引テ宮本積錢ノ十分一取也是レ無力ノ願主ノ太儀也云

一 二十七日ノフケウニ楊隨兵へ侍ヲ廻事

急キ御用意候テ給候へトテ一兩度モマハスヘシサヤウニサイソクナケレハ南大門へ遅クナリテ珍事ナルコトモアル也

一 南大門へ上次第

- 一番的 二番楊先打 三番着背 四番楊 五番ネリ童 六番カシツキカチ郎ト 七番前打 八番願主 九番御師 十番侍 打コミ

一番當之事 ヨキ折紙ニ

一番 名字ト受領トヲカク同ヨミ様他本ニ在

一 自南大門渡之次第

一番的 二番キセナカ次ニタウシキ次ニカチラウドウ 三番楊次ニ張替次ニ隨兵可被打也其次ニ當方之楊二騎隨兵十騎ヲタリテ其次ニ散在之願主一騎ノ楊隨兵渡ル又其次ニ當方ノ楊一騎渡ル又最下勺ニ散在ノ楊隨兵渡也同日流鏑馬モ今ノ次第ノ如ク射給フ也如此シルサストモ別會アリ願主ノ當番來ル也然ハ南大門ヨリ渡リ過ヌレハ二行先打願主侍次第ノニ打テ鷺原ニヒカヘテ楊隨兵ヲ待給也サレハ相構テ相構テサカリ松ノクワトウノ立給タル近邊ヘ馬ニ乘ナカラ行テ見物ナントアルヘカラスソノアキタヲハクタクヘダテタルカ吉也サテ御旅所ヲ過渡テ鷺原ヘ上リ給フ時楊隨兵ヘ願主ハ禮アルナリカクテ我楊隨兵ワタリスミ給テ則アトニ打テ歸リ給也又今朝ノ如ク侍ヲマハシテ皆々馬場ヘ御出候テ行候ヘト申也

一 馬場會ニ上ル次第

一番的 二番射手前打 三番射手 四番二行打 五番願主 六番御師 侍 然馬場本ヘ打テ上リ一番ヤフサメ射給間ハ馬ニノリナカラ待給フ彼流鏑馬過ヌレハ馬ヨリ下リ馬場ヲツクラセテ的ヲ殿原カシツキニ立サセ申バアカリ一ツカイニ五人ツ、行ツレ也三番ノヤフサメニ合十五

人用意アルヘシ又其時分衆徒馬場下シ給ハ願主出向ヒタカイニ禮ヲシ給フサテ流鏑馬ノ次第ハ前ニ注置シコトクナリ第三番射スマシテ馬場本ニ歸リ給ハ願主此日來ヨリノ念願今忽ニ合ニ成就ケレハ難有トモ中ノニ不及申然ハ一族與力皆々打ツレ大宿所ヘ歸リケレハ一同ニ成ニ喜悅之思給フコトソ目出カリケル

一 願主精進落淨衣ヌギノ事

馬場ヨリ歸リ付給ヘハ急九居ヲ取出シテ願主射手ヲ初申精進屋ニシコウノ侍等スエ酒ヲマイラスル也御師ノ禰宜申目出由ヲ申則願主ノ杯ヲサシ給テ淨衣ヲ下給フ分限者ハウハギノ小袖ナンドモヌキ給フ同禰宜ノ子ヲト、ナンニ或ハ小袖或ハ鳥目以下ヲ出シ給フ其後又時ノ肴ヲ用意シ一族一家ヲシャウシ申御酒マイラセ俎板ヲ出也カクテ數コンニナリスレハ亂酒ニナルサカモリスキヌレハ願主ハ小宿ニウツリ給テ一コンアリ

一 喜ヒ社參之事

二十八日ノ早朝ニ社參アリ御神樂錢ハ分限次第ニ涯分ホンソウアリ神馬ハ大略射馬又ハ乘馬ヲマイラセ給フ同御師一コンヲ申必振舞給者也如此令ニ満足ニ給ヒ我宿所ニ下向アレハ御子來テ御シメヲアケ奉ケリ抑奉勤仕彼頭役事ヲロソカナルタシナミニテハ難ニ成就ニ神力ヲ專トシ私ノ心ヲナケウチ大願ヲ發シ奉故ニ如此如意満足之砌也(畢)

ト。以テ中世ノ儀式ヲ見ルベシ。其ノ後筒井順慶當國ヲ領シ、大和武士悉ク其ノ麾下ニ屬スルニ及ビ尙六黨ノ願主人遞番之ニ勤仕シ、天正十三年筒井定次伊賀ニ移サレ豊臣秀長代リテ當國ヲ領スルヤ、散在・平田・葛上等ノ武士所領ヲ失ヒテ離散シ、長谷川・乾脇・長川ノ末流ノミ殘リシモ資力相給セズ、桑性儀仗ノ備進一タビ廢絶ニ屬シタリ。長谷川等之ヲ歎キ秀長ニ請ヒ僅ニ其ノ儀式ヲ再興セシガ、徳川氏天下ヲ一統スルニ至リ舊例ニ據リ國中ノ大名ニ命ジ、分ニ應ジ桑性儀仗ヲ供セシメ、且ツ祭資トシテ現米二百石ヲ與ヘ、半田・坂堂・小坂・今中長谷川黨等ヲ願主人ト定メ、以テ祭事ヲ舉行セシム。事亦今中氏所藏ノ記録ニ詳ナリ。

- 一 神護景雲二年常陸國鹿島明神下總國香取明神春日山に影向其より百二十歳以前ニ河内國平岡明神天津兒屋根命并妃御神南都へ影向其節隨從之藤原氏四人、大宅春日氏、城上志紀氏、山邊春日氏、葛上高宮氏、内兩人者官符衆徒ト稱シ、或ハ俗體、或ハ入道ニ而大和一國ノ政務ヲ主リ春日兩度御神事專支配只今ニ連綿、兩人ハ全俗體和州方居城仕後代ニ而者高市郡高取城主越智民部大輔家高知行一萬五千石十市郡十市城主十市兵部大輔遠忠知行六萬石山邊郡山田城主山田民部大輔順貞入道々安知行一萬石添下郡郡山小田切宮内少輔春次葛下郡萬財備前守友興高市郡布施左衛門尉春行平群郡坂堂大炊介式下郡長谷川内記平田南郷寺田唐院皆々大和武士願主人
- 一 保延二年春日若宮御祭禮初テ執行右之節大和武士願主關白近衛法性寺忠通公御許容を蒙り九月

十七日毎年執行天文之末郡山小田切宮内少輔願主之時九月十七日難相勤事出來夫故將軍家へ御窺申上候而十一月二十七日ニ相改候

- 一 天正年中秀吉公之御舍弟大納言秀長公大和國被領知願主衆徒之居城并領知悉以被致沒收候ニ付長谷川乾脇長川散在平田葛上之六黨皆々離散筒井侍從定次ニ隨伊賀へ參る御祭禮懸鳥之備進物茂無之隨兵人馬數鎗等も無之願主人之内長谷川乾脇長川之三黨許殘リ居候處大納言秀長公被召集願主之體を相立候様被申付掛鳥之備進物人馬數鎗等も被差出候事
- 一 御當家ニ被爲成候而御賄料賄方へ二百石被仰付其外裝束諸道具等御寄附被爲成并掛鳥之備進物人馬數鎗等者大和大名給人方々被出候ニ相成云云

〔備考〕

春日若宮祭禮式流鏑馬起元由緒書

○此書明治三年十月十九日神祇官ノ命ニヨリ大和武士數代ヨリ注進セシモノノ草案ニシテ、副本ハ水谷川家并奈良縣ニアリ。

春日若宮祭禮起元及懸物警衛等起元之事

- 一 春日若宮御祭禮起元者 崇徳天皇之御宇蒙御許容保延二年九月十七日國家安全之御祭禮流鏑馬之式禮始而執行仕候則私共高祖當國高取城主越智民部大輔十市城主十市兵部大輔山田城主山田

添上郡

民部大輔郡山城主小田切宮内大輔并萬財備前守布施左衛門尉著尾宮内少輔其外於國中所謂安堵之諸士多分有之何れも大和士ト唱國中ニ長谷川黨、長川黨、乾脇黨、平田黨、葛上黨、散在黨ノ六流有之此六流之者年々交代シテ春日若宮祭式之流鏑馬執行仕候右六流之内其順ニ當リ候者爲御祭禮獵ヲ催シ獲物之鳥獸鴻鴈鷓白鳥鴨雉子兎等神前ニ懸備且又海魚者鯛鱸鯉川魚者鯉鮒鮎其外折敷餅粽神酒供米鳥目等多分ニ調進仕候是則當今懸物之起元ニ御座候尤モ祭式流鏑馬之節右六黨之内ヨリ諸士多人數出張人馬數鑓ヲ以テ警衛仕候是則當今國中之諸藩諸士出張警衛之起元ニ御座候前文之通六黨之諸士年々交代シテ祭式之流鏑馬累年無怠勤仕罷在候處天文年中ニ至リ九月十七日祭式之流鏑馬執行難成次第有之依之十一月二十七日ニ相成リ以前之通六流交代シテ無怠執行仕候處天正年中ニ至リ羽柴大納言秀長當國郡山江入城ニ付而ハ大和國中一洗ニ相成リ其節私共之高祖六流之者他國江離散仕候ニ付者春日若宮祭式之流鏑馬執行可仕者無之候ニ付右六黨之内長谷川、長川、乾脇黨之三流被召集春日若宮祭式之流鏑馬可相勤様等之事ニ候處所領も無之候得者神前懸物之鳥獸并人馬數鑓等大和國中ハ被差出私共江受取候而從前トハ乍衰微古來之形ヲ以テ祭式之流鏑馬執行罷在候處其後之執政將軍任職ニ相成大和國中諸家各々之所領ニ相成候而も前同様鳥獸人馬數鑓等國中ハ割賦御布令ニ相成私共江受取候而從前之通り祭式之流鏑馬執行仕候則掛物人馬之惣員別記ニ申陳候尤國中ノ諸藩ハ諸士出張數鑓ヲ以テ警衛有之候尙又祭式

ニ付所用之器械裝束等も古來ハ時之執政將軍家ハ御修葺ニ相成申候則御修葺之品目別記ニ申陳候且又爲御賄料年々現米二百石も被下置候義ニ御座候前書之通り春日若宮祭式流鏑馬之起元ニ付去ル辰年御一新之折柄 王政御復古 神武天皇御創業之始ニ被爲基諸事 御一新之祭政一致之御制度之御回復先第一神祇官御再興御造立之上追々諸祭奠も可被興儀從京都被仰出候旨御布令ニ相成候ニ付私共儀者前文之通春日若宮祭式流鏑馬勤仕之者ニ付祭式モ往古ニ立歸リ私共ハ諸事調進可仕様ニ被爲興候ヘハ大儀之事柄不日ニ調進無覺束奉存候ニ付去ル辰年四月朔日由緒之次第口上書ヲ以テ大和國御在勤總督府御役所ヘ奉窺候處書面御預リ置ニ相成追而御沙汰之旨被仰出候處其後追日御祭禮之流鏑馬御聞届ニ相成且祭式之所用器械并裝束等御修葺之義モ御聞置ニ相成申候尙又神前之供物庖抹ニ不相成様且ハ國中人人々之手數ヲ省キ候方策ヲ以テ鳥獸惣員之内十ヶ一ハ正鳥獸殘九步通ハ供米ニ變換之義出願仕候處御聞届ニ相成リ其旨國中諸藩諸家ヘ御布令ニ相成從前之通鳥獸并代人馬共私共江受取候而祭式之流鏑馬執行仕候尤モ警備モ從前之通り國中諸藩ハ出張ニ相成申候尙又御賄料モ年々現米二百石從 朝廷被下置難有頂戴仕候祭式之流鏑馬無怠執行連綿仕候則從前之祭式并沿革之次第別記ニ申陳候

右御尋ニ付奉申上候以上

明治三年十月十九日

派 上 郡

坂堂 一平
小坂 八郎

別記 ○懸鳥及人數等ハ之ヲ略ス

從前之祭式并沿革之事

一 六月朔日春日若宮御祭禮流鏑馬始トシテ同國式下郡法貴寺村天滿宮江大和士之内長谷川黨麻上下着用社參奏神樂神拜式仕一獻祝シ候事

附往古者於同所社頭流鏑馬執行仕候而同日方御祭禮迄別火之事

一 同日新神司之内元衆徒於新坊御祭禮始之會合在之ニ付大和士方使ヲ以テ一獻差出候事

一 八月中旬之比御祭禮御假殿御用材爲伐木杣人足十人ツ、連日四日斗差出候事

一 十月十一日春日祭式流鏑馬定トシテ大和士於自宅一統會合致シ春日之御神ヲ祭リ拜禮之式仕一獻祝シ候事

附往古者於自分境内流鏑馬之次第相試候事

一 同月二十九日方大和士之内射手兒一人願主三人御師三人外ニ附屬之者召連大宿所江參勤祭式諸事調進ニ取懸リ候事

附往古者役員多人數ニ而元興福寺成身院ヲ宿坊トシテ參勤之事

一 同月晦日大宿所ニ參勤之大和士同國平群郡龍田川江罷越身ヲ清メ候式禮仕候事

附往古者五月晦日大紋風折烏帽子馬上ニ而攝州住吉浦江罷越身ヲ清メ候六月朔日ヨリ別火仕候事

一 同日方御祭禮當日迄日々大宿所江神女ヲ招キ清祓爲致候事

一 十一月朔日方大宿所ニ參勤之大和士御祭禮當日迄日々清浴シテ春日御神祭リ神前ニ八ツ足机八ツ足卓香爐燈籠ヲ備ヘ神拜シテ諸事調進仕候事

一 同日大宿所ニ參勤大和士之内射手兒一人御師兩人ハ同國式下郡法貴寺村天滿宮江長谷川黨之願主當役之古例ヲ以隔年參向奏神樂神拜式仕候事

附往古者大和士六流之内交代シテ長谷川黨之願主當役ニハ社參致シ候事

一 同日大宿所ニ參勤之大和士射手兒ハ小結烏帽子雪染薄上下願主御師者大紋風折烏帽子着春日仕丁召連社參神人兩人二ノ鳥居迄出迎兩社共壇上ニ昇進仕捧幣之式禮仕候事

一 同月十一日大宿所ニ參勤之大和士春日社參仕候事

一 同月十六日大宿所ニ參勤之大和士春日社參春日仕丁召連神人出迎壇上ニ昇進捧幣之次第都而朔日同様之事

附往古者直樸社頭菊之屋江參着同十八日迄參籠仕候事

添上郡

- 一 同日々同十八日迄社頭菊之屋參籠之古例ヲ以テ大宿所におゐて參籠仕諸事格別清淨ニ改神前之疊十疊新調荒菰ヲ敷神前ニ新繪馬ヲ懸事
 - 一 同十七日大宿所ニ參籠之大和士社頭菊之屋參籠之古例ヲ以テ丑ノ刻ニ社參致候事
 - 一 同月十八日大宿所ニ參籠ノ大和士菊之屋參籠上リ之古例ヲ以テ春日社參仕候事
 - 一 同月二十日々大和士一統大宿所江參着仕候事
 - 一 同月二十一日々尙又大宿所諸事格別清淨ニ改而大和國中諸藩諸家々懸物之魚獸并供米人馬等受取其外幣串折ッド芝小路家江贈る尙又御旅所假殿ニ付繩釘錄安田板并屋根責人足其外御旅所諸人足多分ニ差出シ諸事調進ニ係リ候事
 - 一 同月二十四日新神司之内元衆徒於新坊御祭禮之會合有之ニ付大和士々使ヲ以一献差出シ候事
 - 一 同日古例ヲ以兒之餅大宿所神前江備進仕候事
- 附往古者折數餅ト唱多分之餅神獻致シ候事
- 一 同二十五日大宿所ニ八杭門ヲ建尙又清淨ニ改廣庭ニ假リ屋ヲ建テ鳥獸海魚ヲ懸備へ且供物之見菓子大折小折鳥麩等備ヲ致シ春日神人ヲ招キ大幣調則清祓爲致於廣前神女御湯神樂ヲ奏し大和士一統麻上下着用ニ而神拜仕候事
 - 一 同二十六日早朝春日兩社江爲神樂料神酒五十荷雉子四十四羽兎六疋鯛八十枚供米三十二石六斗

五升目錄相濟使ヲ以贈リ候尙又手向山八幡江も神酒三荷雉子四羽鯛五枚兎一疋供米二石九斗四升目錄相添贈リ候事

附往古者鴻鴈白鳥鴨雉子兎鯛鱈鯉鮒鮎折數餅神酒供米鳥目等之品ヲ多分ニ贈リ候事

同日大和士一統御祭禮宵之參社致シ候事
社參順列之次第

- 警固人足
- 野太刀 二十振 壹振壹人持也
- 長刀 十振 壹振壹人持也
- 小太刀 五十腰 壹振壹人持也
- 春日仕丁 壹人
- 神馬 十疋
- 大幣 七束 年々七五三ト變ル 壹束壹人持也當色烏帽子着用
- 矢捨鞭 壹人 當色エボシ着用
- 的 七束 年々七五三ト變ル當色烏帽子着用
- 大和士之内

添上郡

御師役 壹騎

白無垢直垂士烏帽子帶刀也

同

射手兒 壹騎

白無垢水干弓小手雪染袴履ヲ負綾
蘭笠被也尙從者ニ弓ヲ持セ候也

同

楊兒 六人

年々七五三之都合ニ而六四二ト替ル
白無垢水干袴尙從者ニ弓矢尻籠葛籠笠ヲ爲持候事

附往古者七五三ニ不拘多員之事

大和士之内

御師役 壹騎

白無垢直垂士烏帽子帶刀也

同

願主役 三騎

白無垢白直垂士烏帽子帶刀也

同

御師役 壹騎

白無垢直垂烏帽子帶刀也

同

隨兵役 五騎

前同斷

附往古者五十騎も有之候事

同

馬場役 八騎

前同斷

附往古者多員有之候事

右順列馬上ニ而社頭車宿リ迄進ミ神人兩人出迎春日兩社共壇上ニ昇進仕神人ヲ以捧幣奉神馬捧
神樂畢而御旅所迄退參於同所流鏑馬執行仕候事

一 同二十七日御祭禮當日乗出シ之祝トシテ於大宿所ニ一獻酌替セ候時茶師々意轉坊菓子差出候事

一 同日御祭禮渡リ式ニ付南大門江進ミ乍馬上諸渡リ式校合いたし候事

一 同刻於南大門ニ大和士江係リ候分

細男 六騎

白無垢淨衣立烏帽子也

同幣 貳本

壹本壹人持也

乘込馬 九十五騎

麻上下烏帽子也

附往古者無限多員之事

一 同日松之下渡リ式大和士ニ係リ分

大和士之内

射手兒 壹騎

裝束弓矢的ハ宵之社參同シ

添 上 郡

同

楊兒

六人

前同斷

同

隨兵

五騎

甲冑尻籠ヲ負太刀ヲ帶弓ヲ持ツ也

附往古者五十騎許有之候事

乘込馬

九十五騎

南大門ニ同シ

野太刀

二十振

宵之社參ニ同シ

長刀

十振

前同斷

小太刀

五十振

前同斷

大和士之内

御師役

三騎

前同斷

同

馬場役

八騎

前同斷

附往古者多員有之候事

細男

六騎

裝東南大門ニ同シ尤松ノ下ニ而笛鼓ヲ以禮式有之候事

一 同日於御旅所細男笛鼓ヲ以舞ヲ奏シ候事

一 同夜於御旅所神前大篝火炷大和士流鎗馬執行仕候尤馬場兩側國中諸藩諸家出張數鐘ヲ以警固有之候事

附往古者大和士之内數鐘ヲ以警固致シ候事

一 同二十八日夜於御旅所猿樂有之候ニ付大篝火貳ヶ所爲炷候事
右一點書者從前之祭式附言者往古之次第概略之事

佛 寺

東大寺 奈良ノ雜司ニ在リ。天平十七年聖武天皇ノ御創始ニシテ金銅毘盧遮那佛ノ大像ヲ本尊トナス。平城七大寺

七大寺ハ當寺及ビ興福・大安・西大・藥師・元興・法隆ノ七寺ヲ謂フ。尋尊僧正應仁二年十一月記ニハ西大寺ヲ除キ招提寺ヲ加ヘ、又興福寺文明年中行事ニハ法隆寺ヲ除キ亦招提寺ヲ加ヘテ七大寺トナセリ。伽藍ノ消長ニヨリ加除アリシナラン。ノ其ノ一ニシテ華嚴宗ノ一本山タリ。

寺 地

東大寺要錄ニ「天平十七年乙酉八月廿三日……於大和國添上郡山金里……創同盧遮那佛像」トアレバ、古、此地ハ山金里ト稱セシナリ。後世之ヲ山上里ト謂フハ蓋シ訛レルナリ。南都七大寺巡禮記ニ「東大寺大和國添上郡 平城左京一條二條八九坊」ト見ユ。乃チ知ル寺地ハ左京ノ一二條八九坊ニ互レルヲ。四至ノ結界ハ天平勝寶八歲ノ勅定ニ奉 勅依此圖定山堺

四 至

北一堺菁川川上高峯 二堺梅本橫峯 三堺鳴川北橫峯并梅谷

東四堺馬勝坂又外政所東峯 五堺内合井津谷

南六堺仙房并御笠山口 七堺寺園

西八堺興福寺乾角 九堺野馬道并富羽北坂谷

右圖堺 勅定如件

天平勝寶八歲六月九日

右少辨從五位下小野朝臣田守
治部大輔正五位下 王
大僧都良弁
造寺司長官正五位下佐伯宿禰

大倭國介從五位下播美朝臣

トアリ。諸寺緣起集東京善羽護國寺藏ニ引ケル東大寺緣起文ニハ

寺家一區在四至境 自寺西北角東至染谷以山足爲限 自染谷至飯盛峰以道爲限 自此至佐保古寺以道爲限 自此至馬庭坂本以佐保川爲限 自此至香山東谷上以佐保川原爲限 自此至香山東南角以道爲限 自此至御笠山東谷口以能登川爲境 自此北至氷室谷上以道爲堺 自此至興福寺地東北角以山足爲限 自此至寺西南角以寺以下蟲食

添 上 郡

二五五

天平十五年冬十月辛巳詔曰朕以薄德恭承大位、志存兼濟、勤撫人物、雖率土之濱已霑仁恩、而普天之下未洽法恩、誠欲賴三寶之威靈、乾坤相泰、修萬代之福業、動植咸榮、粵以天平十五年歲次癸未十月十五日發菩薩大願奉造盧舍那佛金銅像一軀、盡國銅而鎔象、削大山以構堂、廣及法界、爲朕知識、遂使同蒙利益、共致菩提、夫有天下之富者、朕也有天下之勢者、朕也以此富勢造此尊像、事也易成、心也難至、但恐徒有勞人、無能感聖、或生誹謗、反墮罪辜、是故預知識者、懇發至誓、各招介福、宜每日三拜盧舍那佛、自當存念、各造盧舍那佛、也如更有人情願持一花草一把土、助造像者、悉聽之國郡等司、莫因此事、侵擾百姓、強令收斂、布告遐邇、知朕意矣

ト見ユ。尋テ東海・東山・北陸三道ニ詔シ、調庸ヲ近江ノ信樂宮ニ輸サシメ、車駕亦彼ニ幸シ、大ニ計畫スル所アリ。先ヅ其ノ寺地ヲ開ク。甲賀寺即チ是ナリ。

又曰 同年同月壬午東海東山北陸三道二十五國調庸等物皆令貢於紫香樂宮、乙西皇帝御紫香樂宮爲奉造盧舍那佛像、始開寺地、於是行基法師率弟子等勸誘衆庶、

十六年十一月甲賀寺ニ於テ始メテ佛像ノ體骨柱ヲ立テラレシモ、其ノ事ヲ停メ、更ニ之ヲ奈良ノ地ニ移スコトナリス。十七年八月車駕平城ニ還御シ、添上郡山金里ヲ點ジ寺地ト定メ、親ラ土ヲ裏ミコレニ加ヘ以テ臣民ヲ獎勵シ、且ツ佛像ヲ創造シ給フ。

又曰 天平十六年十一月壬申甲賀寺始建。盧舍那佛像體骨柱。天皇親臨手引其繩。于時種々樂其作。四大寺衆僧僉集。灑施各。有差。

東大寺要錄曰 天平十七年乙酉八月廿三日天皇自信樂宮車駕廻平城宮於大和國添上郡山金里。更移彼事。創同盧舍那佛像。天皇以御袖入土持運加御座。公主夫人命婦采女文武官人等運土築堅御座。

大佛殿碑文曰 以天平十七年歲次乙酉八月廿三日於大和國添上郡奉創同像。天皇專以御袖入土持運加於御座。……○全文下

此時造ル所ノ盧舍那佛像ハ、大佛最初ノモノニシテ即チ所謂樣像ナルベシ。是ヨリ先、天平五年僧良辨金鐘寺一名金光明寺ヲ創始セシガ、十三年諸國ニ國分ニ寺ヲ置カルルニ及ビ金光明寺ヲ僧寺ニ、法華寺ヲ尼寺ニ定メラル。此時未ダ東大寺ナケレバ彼ノ盧舍那佛ノ樣像ハ金鐘寺ニ安置セシナラン。續日本紀ニ「天平十八年十月甲寅。天皇。太上天皇。皇后行幸金鐘寺。燃燈供養盧舍那佛。佛前後燈一萬五千七百餘炬。夜至一更。」ト。以テ證スベシ。然ルニ坊目遺考ニ天平十七年ノ遺佛ヲ以テ後ノ大佛トスルハ蓋シ非ナリ。

天平十九年九月二十九日ヨリ大佛鑄造ニ着手セシガ塗金足ラズ。會々陸奥國ヨリ黃金ヲ貢ス。

天皇以テ佛德ノ致ス所トナシ、皇后・太子・群臣ヲ率キテ禮拜シ給フ。萬乘ノ尊ヲ屈シテ親ラ三寶

奴ト稱シ給ヘルハ實ニ此時ノ事蹟ニ係レリ。續日本紀ニ之ヲ記シテ曰ク「天平二十一年夏四月甲午朔。天皇幸東大寺。見ユル之ヲ始メトス。御盧舍那佛像前殿。北面對像。皇后太子並侍焉。群臣百寮及士庶分頭。行列殿後。勅遣左大臣橘宿禰諸兄。白佛。三寶乃奴止仕奉。流天皇羅我。命盧舍那佛能大前七奏。賜部止奏。久。此大倭國者天地開闢以來。爾黃金波人國用。獻言波有登毛斯地者無物止念部。流仁開看食國。中能東方陸奥國守從五位上百濟王。敬福伊部。内少田郡仁黃金。四。奏。此邊開食驚。伎悅。備貴。備念。久波。盧舍那佛乃慈。賜比。福波。賜物。爾有止念。爾受賜。里。戴持。百官乃人等率。天。禮。拜。仕奉。事。遣。挂。畏。三寶乃大前爾恐。美恐。美毛奏。賜波。久止。奏。……」是ニ於テ改元シテ天平勝寶ト號ス。此年四月八日挾士二菩薩先ヅ成リ、十月二十四日ニ至リ大佛鑄造ノ功全ク成レリ。歲ヲ閱スル三年ニシテ鑄鑄凡ソ八回ニ及ビタリト云フ。

大佛殿碑文曰 以天平十九年歲次丁亥九月二十九日始奉鑄鑄。以勝寶元年歲次己丑十月二十四日奉鑄已畢。三ヶ年八箇度奉鑄御體……

東大寺要錄曰 天平廿一年冬十月廿四日奉鑄大佛。畢三箇年八箇度……、又曰金色脇士菩薩二體……右天平勝寶元年四月八日始造挾士二菩薩像東方觀音、尼信勝、西方虛空藏、尼善光

然リト雖モ塗金ハ未ダ全ク畢ヘザリシモ、一方ノ大佛殿ノ大殿堂建築ハ天平勝寶三年中ニ竣功セシヲ以テ、翌四年四月九日ニ至リ開眼供養ヲ行ヘリ。此日天皇東大寺ニ行幸アリテ文武ノ百官コレニ

從フ、其ノ儀式ノ盛ナル佛法東漸以來未ダ嘗テコレ無カリシトナリ。但シ塗金ノ功畢ヘシハ天平勝寶九年ニアリシナラント云フ。

東大寺要錄曰 天平勝寶三年建造大佛殿畢

扶桑略記曰 天平勝寶四年四月九日乙酉東大寺塗金未畢間設於大會共養以元興寺隆尊法師爲其講師

大佛殿碑文曰 以天平勝寶四年歲次壬辰三月十四日始奉塗金未畢之間以同年四月九日儲於大會奉開眼也同日奉入灌頂二十六旋吳樂散樂高麗樂珍寶等

續日本紀曰 天平勝寶四年夏四月乙酉盧舍那大佛像成始開眼是日行幸東大寺天皇親率文武百官設齋大會其儀一同元日五位已上者着禮服六位已下者當色請僧一萬既而雅樂寮及諸寺種々音樂並成來集復有王臣諸氏五節久米儺桶伏踏歌袍袴等哥儺東西發聲分庭而奏所作奇偉不可勝記佛法東歸齋會之儀未嘗有如此之盛也

東大寺文書曰 沙金貳仟壹拾陸兩右依御製奉塗大佛像料下充造寺司天平勝寶九年二月一日主典美努連造寺司長官佐伯宿禰判官紀朝臣暨子巨萬朝臣萬木宿禰戶主

佛像堂塔略完全セシヲ以テ碑ヲ建テ其ノ事ヲ勅シ之ヲ不朽ニ傳フ碑今亡ビタリト雖モ其ノ文東大寺雜集錄ニ存ス曰ク

大佛殿碑文

勅朕以薄德忝承大位志存兼濟動撫人物雖率土之濱已霑仁恕而普天之下未洽法恩誠欲賴三寶之威靈乾坤相泰修萬代之福業動植咸榮粵以天平十五年歲次癸未十月十五日發菩薩大願奉造盧舍那佛金銅像一軀盡國銅而鑄像削大山以構堂廣及法界爲朕知識遂使同蒙利益共到菩提夫有天下之富者朕也有天下之勢者朕也以此富勢造彼尊像事也易成心也難至但恐徒有勞人預無能感諸知識者發至誠令人招福宜每日三拜盧舍那佛自當存念各造盧舍那佛像如更有入願持一花草一合土造像者勿禁勿障同進百姓携令加造太政官奉勅普告天下牽知識以天平十五年歲次癸未十月十五日於近江國信樂京奉創佛像其處已止更以天平十七年歲次乙酉八月二十三日於大倭國添上郡奉創同像天皇專以御袖入土持運加於御座然後召集氏々人等運土築堅御座以天平十九年歲次丁亥九月二十九日始奉鑄鎔以勝寶元年歲次己丑十月廿四日奉鑄已畢三年八箇度奉鑄御體以天平勝寶四年歲次壬辰三月十四日始奉塗金未畢之間以同年四月九日儲於大會奉開眼也同日奉入大小灌頂二十六旋吳樂散樂高麗樂珍寶等金銅盧舍那佛像一軀結跏趺坐高五丈三尺五寸面長一丈六尺廣九尺五寸完髻高三尺眉長五尺四寸五分目長三尺九寸自鼻前徑二尺九寸四分高一尺六寸人中長八寸五分口長三尺七寸頤長一尺六

寸、耳長八尺五寸、頸長二尺六寸五分、肩長二丈八尺七寸、胸長一丈八尺、腹長一丈三尺、臂長一丈九尺、肱至腕長一丈五尺、掌長五尺六寸、中指長五尺、脛長二丈三尺八寸五分、膝前徑三丈九尺、膝厚七尺、足下一丈二尺、螺髮九百六十六箇、高各一尺二寸、徑各六寸、銅座高一丈、徑六丈八尺、上周廿一丈四尺、基周廿三丈九尺、石座高八尺、上周三十四丈七尺、基周卅九丈五尺、用熟銅七十三萬九千五百六十斤、白鐵一萬二千六百十八斤、鍊金一萬四百卅六兩、水銀五萬八千六百廿兩、炭廿萬六千六百五十六斛、圓光一基、高十一丈四尺、廣九丈六尺、挾侍菩薩像二體、並壘光、高各三丈、面長六尺、廣五尺、口長二尺一寸、耳長五尺九寸、眉長五尺九寸、目長二尺二寸、鼻下徑一尺八寸、繡觀自在菩薩像二鋪、高各五丈四尺、廣各三丈八尺四寸、四天王像四柱、高各四丈、大佛殿一字、二重十一間、高十五丈六尺、東西長廿九丈、廣十七丈、基砌高七尺、東西砌長卅二丈七尺、南北砌長二十一丈六尺、柱八十四枝、殿戶十六間、天蓋三千百二十二蓋、步廊一廻戶二十間、東西徑五十四丈六尺二寸、南北徑六十五丈、塔二基、並七重、東塔高卅三丈八尺七寸、西塔高卅三丈六尺七寸、露盤高各八丈八尺二寸、用熟銅七萬五千五百二斤五兩、白鐵四百九斤十兩、鍊金一千五百十兩二分

鐘一口高一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三分、口厚八寸、用熟銅五萬二千六百八十斤、白鐵二千三百斤、大佛師、從四位下國公慶、大鑄師、從五位下高市大國、從五位下高市眞麻呂、從五位下柿

本男玉

大工從五位下猪名部百世從五位下益田細手、

トアリ。其ノ工事ノ偉大ナル實ニ空前絶後ト謂フベシ。而シテ所謂挾侍菩薩二體ハ東觀音、西虚空藏ニシテ天平勝寶元年ニ成リ、四天王ハ天平寶字二年ヲ以テ成レリ。其ノ繡觀自在菩薩像二鋪ハ銘文ニ據ルニ天平勝寶六年ヨリ同九年マデノ間ニ成リ、即チ孝謙天皇ノ先帝聖武天皇及ビ皇太后光明皇后ノ奉爲ニ織ラシメタルモノニ係ル。事東大寺要錄ニ詳ナリ。曰ク

一 大佛殿納物

金銅大毘盧舍那佛像一軀 金色脇土菩薩像二軀

綵色四天王像四體 繡曼荼羅二鋪

右天平勝寶元年四月八日始造挾士二菩薩像東觀音、尼信勝、西方虚空藏、尼善光造

天平寶字二年戊戌五月廿七日造四天王像、大曼荼羅、別有銘文

大佛殿東曼荼羅左右緣銘文

左緣文 以黃白二色絲ハシ相間一字ハシ織此文也

竊以至道無形緣神通而利萬域實相非測託方便而濟四流是以疑神極樂之區降迹補陀之岫慈悲在念獨傳無畏之稱解脫為功長銷有結之累隨緣社法幽顯而無差應願祥同影響而斯驗或現梵王帝釋善權所以逾深或示居士宰官方便於焉難極故能開普門而廣納仁被群生灑甘露而遍施化覃庶品大浣欲墮還致變池之慈巨海將淪即蒙得涉之助威神之力其大者乎伏惟太上天皇赫元御極則天披圖至衛動於蒼渥惠衍於赤縣瀛表輸重譯之貢寰中求再生之恩軼百王以騰芬超千古而垂化粵以天平勝寶六歲夕次甲午暮春三月十五日誠乎無之道發誓乎之輪擬造織成觀自在菩薩像祈彼祐此為期非背湖揚唯句林駐

右緣文

由雖規摹擬成而夫功未畢弟子皇帝威嚴顯之日遺痛業之中休更添神巧積成光緒泊千九歲中旬五月二日周忌之辰裝飾云裁金疊縷分百形而圖真貫珠綵絲合千光而寫妙三十三變隨成開引導之容百千衆念力解脫之命固以賽先之之啓之福廻饒薰之孝也所冀藉茲願力奉聖靈揚號仙庭驅軒惠術天花散馥迎玉軼而飛空妙樂流音送金輪而成道然後神八正陪舍那之蓮臺契福三舒普光之法座又願皇帝及皇太后長生寶位尊位北極之尊永援瑤圖化驗東戶之化馨恆沙而作算盡切石而為年

次願殃邊寮慶養中花兆人歎瀆遊國栖之文匪列動含其林跡稠林成啓因覺路

已上所々破損文字失落或雖有字槩不見之故着輪之○木○今換

大佛殿西曼荼羅左右緣銘文

東緣文以青白二色絲相交織此文也

遍周法界能化形質博愛群生必濟諸願者其唯觀自在菩薩乎觀自在菩薩者往古正法明如來也以其本願化形菩薩拔濟一切世間之苦其住也在西方極樂世界奉侍阿彌陀佛其神也隨无量無數生品布延大慈大悲或現一十一面或現千手千眼乃名觀自在乃名觀世音又稱馬頭又稱不空羼索所以有至願則无所不感有至信則无所不應隨緣雖異其實一也維不空羼索觀自在菩薩大織像者我日本國皇帝陛下奉為欲令平安皇太后所造也皇太后故太政大臣藤原公之女也稟性貞潔柔芬凌蘭桂信心淳厚潔若冰玉美母儀彰訓屢行檀那常好菩提唯聞川易往驚電難住恐二鼠侵害四蛇來纏故皇帝陛下晨昏畏懼奉為皇太后敬造維不空羼索觀自在菩薩像

西緣文

像高三十五尺其闊二十五尺光容圓備不異神功信如瞻仰真儀天下更復无二以此清淨真實功德伏願皇太后萬善庄嚴百靈擁衛灾咎頓滅福祉恒生等日月而貞明同天地

而長久、立則如來加被、坐則并扶持、又用此功德、十方世界一切生品、未得安樂者願令早得安樂、未得離苦者、願令早得離苦、未發菩提心者願令早發菩提心、未成道者願令早成道、又願國土安寧、寮庶和樂同受長年、共乘佛日、冬盡春至、物壯則衰、若不表功德之田、何以開悟歸禮者、爰因翰墨、遂作偈曰、大悲觀音、不空羅索、神通自在、救濟苦厄、皇帝道重孝順壯、美織口功德、天下無比、願皇太后、因茲妙力、身安心泰壽及萬億、十方園界、一切群生、同蒙此善、盡得清平、天長地久時遷、物舊敢以短章、著像左右、

已上兩鋪銘文、或所々破損文字失落、或雖有字跡、儘不見其文、仍着輪書之、今本〇寛

朝僧正之任永延元年聖海人按人上恐勸十方施主、修補曼荼羅、繪師元興寺玄朝法師畫地神

之形、宮僧都深觀之任永承三年八月朝緣聖人修補曼荼羅、長元七年歲次申戌大佛殿曼荼羅大風相損也

要スルニ大佛ノ鑄造ハ天平十九年九月ヨリ着手シ、二十一年即チ天平勝實元年十月ニ至リ功ヲ畢ヘ、挾侍二菩薩ハ是ヨリ先、其ノ四月ニ先ヅ成リ、殿宇ハ天平勝實三年ニ竣功シ、繙帳ハ其ノ九年ニ成レルモノニシテ、四天王ハ天平寶字二年ノ作ニ係レリ。而シテ立碑ノ年月詳ナラズト雖モ、既ニ四天王ヲ記スルモ、講堂及ビ神護景雲ノ小塔院ヲ載セザレバ、此等ノ建物未ダ竣功セザリシ以前ノ建設ニ係ルコト自ラ明ナリ。碑文朝野群載ニモ收メタリ。亦以テ近世ノ物ニアラザルヲ知ルベシ。

大佛竣功ヨリ凡七十餘年ノ後、即チ天長四年ニ至リ、佛體傾欹ヲ呈セルヲ以テ之ヲ固メラレシコト、治承五年中原師尙ノ勘文ニ見ユ。齊衡二年五月大佛ノ頭自ラ落ツ。朝廷參議藤原氏宗ヲ遣ハシ、其ノ狀ヲ檢セシメ、良工ニ命ジ之ヲ修メシメ、貞觀三年三月十四日其ノ開眼供養ヲ行ハレタリ。事國史ニ詳ナリ。降テ治承四年十二月二十八日平重衡ノ兵火ニ罹リ、伽藍大抵烏有トナル。此時大佛ノ頭及ビ左手鎔失シ、挾士四天王繙帳モ亦其ノ災ニ罹レリ。是ニ於テ朝廷左少辨藤原行隆ヲ遣寺司長官ニ拜シ、之ヲ修造セシム。行隆鑄師十餘輩ヲ率キ來リ、其ノ事ニ當ラシムト雖モ、工等皆辭スルニ人力ノ能ク及ブベキ所ニアラザルヲ以テス。時ニ僧重源ナルモノアリ。嘗テ入宋シ經論ヲ修メ歸朝シテ醍醐ニアリ。之ヲ聞キ行隆ヲ訪ヒ、必成ノ策ヲ進ム。行隆爲ニ奏シ宣旨ヲ重源ニ賜ヒ勸進聖トナス。重源銳意成功ヲ期シ、一條ノ杖一蓋ノ笠ニ仗リ千里山川ヲ跋涉シ、十方ノ施捨ヲ勸進スルコト、二閱年ニシテ修造ノ資料已ニ備ハリシモ、未ダ匠工ノ其ノ技ニ堪ユルモノナカリキ。會、宋朝ノ鑄工陳和卿事ヲ以テ我ニ在リ。重源コレト相計リ養和元年ヨリ起工シ、治鑄スル凡十四度ニシテ壽永二年六月ニ至リ竣功ス。文治元年八月二十七日後白河法皇東大寺ニ行幸シ、開眼ノ式ニ臨ミ給フ。建久五年南中門ノ二天ヲ造リ、同六年三月十二日大佛供養ヲ行フ。源賴朝コレニ與リ、米一萬石、黃金一千兩、上絹一千匹ヲ施入セラル。事東鑑ニ詳ナリ。建久八年挾士二菩薩ヲ造ル。是ニ至テ大佛修造ノ事全ク畢レリ。治承四年兵火ニ罹リシヨリココニ至ルマデノ事蹟ハ諸書ニ散見シ、

既ニ人口ニ膾炙スル所ナレドモ、其ノ記事ノ精覈ナル東大寺續要錄ノ造佛篇ニ若クハナシ。今其ノ一篇ヲ左ニ抄出シ參考ニ供ス。

一 當寺燒失事

右一院皇子^{仁王ナリ}向^{高倉宮以}于蘭城寺^{彼寺憐}皇子欲^令扶持之間乞^{與力於興福寺}遂欲^逃下南都之刻興福牒^{于當寺}共行^向木津邊^{皇子於}道頭^誅之間衆徒空^{以歸}寺其後興福寺大衆僉議云皇子東國現存申^{最勝太子}則行^{除目}且補^{東國々司}其上觸^前兵衛佐賴朝^{伊豆前司源仲綱}等興福寺大衆若令^{蜂起}者同心合力可^誅大相國清盛入道^{之旨有}其沙汰云々大衆張本所^{搆出}無實也于時彼寺正權別當共^{以逝去}無^{今制禁}沒^{收和州平家領}塞^{南北上下之路}欲^令發向之間相國禪門聞^{此事}治承四年十二月廿六日下^{數百騎}官兵大衆行向隔^{木津河}合戰翌日廿八日官兵入^{來南都}處々追捕遂^{以放火}大佛殿四面迴廊講堂^{三面僧房}食堂^{八幡宮東塔戒壇院大湯屋上院}閻伽井屋^{白銀堂}東南院尊勝院其外僧坊民屋悉^{以燒失}暴風吹自^西猛火熾^{于中}滅亡時瓔^{嗚咽不}休所^殘法花堂^{二月堂}同食堂^{三昧堂}僧正堂^{鐘堂}唐禪院堂^{上司倉下司倉}正倉院^{國分門}中御門^{砧礎門南院門等也}

一 燒失已後沙汰事

右朝家驚歎之餘召^{諸道之勘文}欲^勸作治之功^{彼勘文}內師尙^{勘狀}云

勘申 東大寺燒亡間事

右東大寺者聖武天皇天平十五年十月懇^誠寂^念發^{清淨願}同十七年八月始鑄^{佛像}孝謙天皇天平勝寶元年十月佛像終^功同四年四月行^幸寺家^{太上}天皇聖武同^{以臨幸}開眼供養^{其儀}一如^{元會}幅^{僧正}菩提法師^爲開眼師^請僧一萬人^{其後}淳和天皇天長四年八月奉^固大佛傾^破文德天皇齊衡二年五月大佛頭自落^{清和}天皇貞觀三年三月修^補佛頭^儲無遮大會^{醍醐}天皇延喜十七年十二月講堂并^{三面}僧坊燒亡^{朱雀院}承平四年十月西塔爲^{雷火}燒亡^同五年五月供^養講堂^開眼新佛^{村上}天皇應和二年八月南大門爲^{大風}顛倒^{彼寺有}事之例^{大概如}斯但^{大佛殿}燒亡^{既無}先例^方今齊衡^者紺頂雖^落金容無^變延喜者講堂雖^燒本寺猶全^{至于}今度^者堂宇佛像共逢^{回祿}驚遽之思既超^{曩時}先遣^{辨使}已下^被加^{實檢}早作^{假佛殿}可^禦雨露^又燒損^{金銀銅}鐵之類^{若無}守護之輩^者徒爲^{行人}之資^歎慥仰^{寺家}且牢固四壁且收^集一所^可被^宛作治^事又奉^幣字佐石清水宮^可被^告佐保山陵^就中^{二階}十二丈之梵字層^菴高五丈三尺餘之尊容^{金銅}粧嚴^訪之異域^{猶無}比類^{今有}火災^若被^行廢朝^{如何}依^{佛事}火事^廢朝之例雖^不分明^於此寺^者何^拘常禮^准山陵之例^{可有}沙汰^歎且詢^群卿有識^可被^計仍勘申

治承五年二月五日

添 上 郡

大炊頭兼大解記主計權助備後權介中原朝臣師尙勘申

一 造營事

安德天皇御宇治承五年庚子春禪定法皇殊發_三歡願_三被_三令_三作治計_三即治承五年六月廿六日任_三造寺_三官

長官藏人左少辨正五位下藤原朝臣行隆 次官三善爲信 判官中原基康
主典三善行政 造佛長官藤行隆 次官小槻隆職

養和元年三月十七日癸巳長官藏人左小辨正五位下藤原朝臣行隆爲_三勅使_三相_三具鑄師十餘人_三下向_三可_三奉_三鑄_三修御佛_三之由有_三其沙汰_三鑄師等申云此事非_三人力之所_三及_三設雖_三蒙_三勅勸_三爭勵_三微力_三行事_三官仰云所_三申有_三謂_三而勅命有_三限_三只可_三企_三其功_三冥助不_三空_三何願_三私力_三乎

養和元年四月九日有_三聖人_三號_三重源_三行_三向行隆_三亭_三觸_三云東大寺事度々感_三靈夢_三仍去_三二月下旬行_三向_三彼寺_三拜_三燒失之跡_三烏瑟之首落而在_三後_三定惠_三手折_三又橫_三前_三灰燼殘而如_三大山_三餘燼揚而似_三黑雲_三目_三暗心_三消愁_三淚難_三抑遇_三一_三兩者老_三述_三心緒_三之處爲_三勅使_三下向_三之由承_三之仍所_三參_三也_三行隆云天平_三行基_三并興_三歡願_三而致_三勸進_三齊衡_三眞如親王_三題_三丹誠_三而唱_三知識_三聖人發心_三感應不_三空_三早可_三令_三舍_三繪旨_三

勸中衆庶之由且以談話

養和元年秋八月重源上人賜_三宣旨_三造_三一輪車六兩_三令_三勸_三進_三七道諸國_三……

東大寺勸進上人重源敬白

請_三特_三蒙_三十方檀那助成_三任_三絲綸旨_三終_三土木功_三修_三補佛像_三營_三作堂宇_三狀

右當伽藍者_三輒_三雲雨於_三天半_三有_三棟莖之_三棟擢_三佛法恢弘之_三精舍_三神明保護之_三靈地也_三原夫聖武天皇_三發_三作治之_三歡願_三行_三基菩薩表_三知識之_三懇誠_三加之_三天照太神出_三兩國之_三黃金_三採_三之奉_三塗_三尊像_三菩提僧_三正渡_三萬里之_三蒼海_三嘯_三之令_三開_三佛眼_三彼_三北天竺_三八十尺_三彌勒菩薩現_三光明於_三每月之_三齋日_三此東大寺十六_三丈盧遮那佛施_三利益於_三數代之_三聖朝_三以_三彼此_三此_三猶卓然_三是以_三代々_三國王_三尊崇_三無_三他_三蠢々_三土俗_三歸敬_三匪_三懈然_三間_三去_三季窮冬_三下旬_三八日_三不_三圖_三有_三火_三延_三及_三此寺_三堂宇_三成_三灰_三佛像化_三燼_三燄_三提河之_三春浪_三哀聲_三再聞_三沙羅林之_三曉雲_三憂色_三重_三登_三戴_三眼仰_三天_三則_三白霧_三塞_三胸_三而不_三散_三傾_三首_三俯_三地亦_三紅塵_三滿_三面_三而_三忽_三昏_三天下_三誰_三不_三歎_三歎_三之_三海內_三誰_三不_三悲_三歎_三之_三與_三從_三摧_三底_三露_三不_三若_三企_三成_三風_三因_三茲_三遠_三訪_三真_三觀_三延_三喜_三之_三舊_三規_三近_三任_三今_三上_三宣_三下_三之_三勅_三命_三須_三令_三都_三鄙_三以_三遂_三營_三作_三伏_三乞_三十方_三一切_三同_三心_三合_三力_三莫_三謂_三家_三々_三之_三清_三虛_三只_三可_三任_三力_三之_三所_三能_三雖_三尺_三布_三寸_三鐵_三雖_三一_三木_三半_三錢_三必_三答_三勸_三進_三之_三詞_三各_三抽_三奉_三加_三之_三志_三然_三則_三與_三善_三之_三輩_三結_三緣_三之_三人_三現_三世_三指_三松_三柏_三之_三樹_三號_三比_三算_三當_三來_三坐_三美_三蓮_三之_三華_三身_三結_三迦_三其_三福_三無_三量_三不_三可_三得_三記_三者_三乎_三敬_三白

養和元年八月 日

別當法務大僧正大和尚位在判

勸進上人重源敬白

壽永元年壬寅聖人勸進有。由金銅多施而巧手無。仁歎而送。日之處。大宋國鑄師陳和卿爲。商沽。而渡。日域。上人悅。感應令。然相。語彼宋人。而下向。同七月廿三日於。大佛御前。上人宋人共議。其營。養和元年十月六日被。鑄。始大佛御頭羅髮。之時戒師授。戒於鑄工等。次踏。多々良。即奉。鑄。羅髮三流。鑄工持。參長官前。置。八足。上。之間主典取。祿。……

壽永二年二月十一日大佛右御手奉。鑄。之

同年癸卯四月十九日始奉。鑄。御首。鑄物師大工宋朝陳和卿也。都宋朝工。舍弟陳佛壽等七人日本鑄物師草部是助已下十四人也。重源上人與。宋朝和卿。俱廻。秘計。作。大鑪三口。以。佛後山。爲。其便。置。佛上之東西。口弘。一丈高一丈餘也。涌銅或時。一萬餘斤。或時。七八千斤也。炭或六十石或五十石。連々加。副之。錫湯入。鑪內。如。大河流。于江海。飛焰上。空中。似。猛火燒。于泰山。其聲如。雷電。聞者。悉驚動。……

宋朝工七人 大工陳和卿 舍弟陳佛壽 從五人

日本鑄物師工十四人 大工散位草部是助 長二人 草部是弘 同助延 小工十一人 是末

助吉 爲直 助友 貞永 延行 助時 助友 助包 是則 宗直

○案ズルニ般若寺笠塔婆銘ニ「先考宋人行末者吳朝明州住人也而來。日域。經。歲月。即大佛殿石壇四面廻廊諸堂垣塌荒□□□悉□孤爲□□□□□吾朝□陳和卿爲鑄金銅大燈□明州伊行末與□□□石壇……」宋人伊行吉蓋シ石工ナラン大佛ノ工事ニ與カルコト、要録・東鑑共ニ之ヲ逸セリ。壽永二年五月十八日戊酉奉。鑄。滿。畢。首尾經。卅九日。治鑄終。十四箇度。于時別當前法務大僧正禎喜

龍蹄一疋 美絹十疋 給。于大工陳和卿。畢

同年六月一日經。奏聞。其後漸加。礪磨。奉。彰。相好。如。開。重霧。忽。嗚。金山。上。妙相。照。融。神姿。晃。昱。歡喜之淚不。覺。而降矣。

熟銅都合八萬三千九百五十斤、御身所。塗黃金一千兩、并所押金薄十萬枚、抑雖。有。黃金。若無。水銀。則佛身難。成。而伊勢國住人大中臣以。水銀。二萬兩。貢。上。法皇。是則自。彼。仁之舊宅。所。掘出。也。以。一萬兩。被。獻。大佛。

建久五年十二月二十六日南中門二天造。始。之。

東方 多聞天 西方 持國天

添 上 郡

二躰共木像往古二丈也今度増三三尺仍二丈三尺也

東方天大佛師快慶 小佛師十四人……

西方天大佛師定覺 小佛師十三人……

全八年六月十八日始奉造左右脇十觀音虛空藏像

觀音像坐像二臂如意輪坐下有八天像

願主左衛門尉藤原朝綱入道宇都宮

大佛師法橋定覺 丹波講師快慶 各作半身後合一躰

虛空藏像同坐像

願主掃部頭藤原親能造之

大佛師法橋康慶 同運慶 是父子也各作半身合爲一躰

文治元年八月二十八日東大寺大佛開眼供養

開眼師僧正定遍 咒願師權僧正信圓 導師權大僧都覺憲

爾後小修繕アリシナランモ記録ノ微スベキモノナシ。治承四年ヨリ凡三百餘年ノ後、即チ永祿十年十月十日ニ至リ、松永・三好ノ兵火ニ罹レリ。松永久秀ハ三好氏ノ臣ナリ。嘗テ多門城ヲ築キコ

レニ據リ、大和ノ豪族ヲ服從シ、勢力頗ル旺ンニ主家ヲ凌グノ志アリ、三好氏之ヲ惡ミ、細川某ヲシテ久通久秀ノ子ガ守レル信貴城ヲ押ヘシメ、更ニ兵ヲ分チ、南都ニ入り大佛殿ノ回廊ニ屯シ、將ニ多門城ヲ攻メントス。久秀夜半襲撃シ、火ヲ放チテ伽藍ヲ燬キ大ニ之ヲ破ル。此時大佛ノ頭復タ燒ケ落チ堂塔多ク燒失シ、僅ニ南大門・手蓋門・鐘堂・正倉院・二月堂・法華堂及ビ上司倉・下司倉ノミ其ノ災ヲ免レタリト云フ。

寛文七年和州寺社記曰 永祿十年十月十日松永彈正燒失して戰場とす、初聖武天皇造立し給兩度の

兵火に残りしは、南大門手蓋之門、鐘つき堂三倉二月堂法花堂今に有。

寶曆二年奈良奉行所記録南都一覽ト題ス曰

永祿十年十月十日夜三好左京大夫軍勢廻廊宿陳、臣松永彈正少弼久秀夜打中門堂辰巳ノ角ヨリ火附移廻廊一時燒失。

佛頭墜落スルモ之ヲ接グベキ治工ナカリシガ、此時ニ當リ山邊郡福住ノ住人山田民部少輔宗重入道道安ナルモノアリ。博學ニシテ衆藝ヲ綜ベ機工ニ巧ナリ。道安匠工ヲ指導シ之ヲ接ガシム。案ズルニ東大寺雜集錄南都樂師院氏藏第十一卷ニ「永祿十二年八月十五日於八幡宮大佛の羅髮を被鑄福住院貞清本願ス、永祿十三年七月八日大佛殿御本尊様損所鑄始ム、上人清玉下向ス、同十六日大佛本尊鑄」ト見ユ。所謂福住院貞清ハ山田道安ノ法號ナランカ。之ニ據レバ、大佛修理ハ永祿ノ十二・十

三ノ兩年ニ互リ、勸進聖ハ京師ノ僧清玉上人ニシテ、道安ハ唯ニ修理接續ノ技術ヲ教フルノミナラズ、亦自ラ其ノ本願トナリシコトヲモ知ルベシ。是ニ至テ佛體ハ舊ノ如ク成功セシモ未ダ殿宇ヲ造營スルニ及バズ。徒ニ雨露ニ暴サレシコト、其ノ間殆ド百四十餘年ナリキ。

舊跡幽考曰 永祿十年十月十日當國信貴の城主松永彈正忠の兵火にかゝりて、大殿けふりとぞなりける、舍那佛の御ぐしおち給ひしが、その世につぎ奉るべきたくみもなくして月をかさねけるが、こゝにやまとの國に山田道安といふあり、弓馬の家にして繪に妙あり、いとたくみやふかゝりけん、御ぐしを鑄奉るべき料にとて、籠の術をとゝのへ、良匠治工等にをしへてつぎ奉らしめて、佛は猶もとのごとく、成就し給ひつれども大殿は造營あらずしていしすへのみのこれり。

貞享元年ニ至リ、當時龍松院ノ公慶勅許台命ヲ以テ大佛殿勸進聖トナリ、諸國ヲ勸化シ、工事ニ着手シ、寶永五年六月二十六日ニ至リ功ヲ畢フ。即チ今ノ大佛殿是ナリ。

奈良奉行所記録曰 永祿十一年勸化給旨十一通、勸進上人京清玉上人被仰付有勸進狀再建不_レ相調願、雨露覆筒井家并一乘院尊清大僧正寄進之事。寛永十九年十一月廿七日未刻ヨリ、從_レ西坂_レ出火、町方并東大興福少々寺院燒失其御興福ハ一乘院北院勸學院四五軒燒失、東大寺新禪院東南院樂師堂眞言院堂舍燒失餘火飛、八幡宮御社一具安居屋燒失、夫々關東へ御普請所々先例ヲ以テ御修理相願候へとも訴訟不相叶貞享元年八幡宮御訴訟大喜院□□爲使節下向、八幡宮訴訟不相叶、

大佛殿再建之儀モ被相願、日本勸化被仰出、其上造功遲滯ニ付日本國中高百石ニ付地頭金子百匹百姓方へも金子百匹勸化高百石ニ付地頭以下奉納也寶永五年子六月迄造立。

明年三月供養ノ儀アリ。鹿島藩主島津吉貴爲ニ曼陀羅臺舍利塔ヲ納ム。事大佛殿柱ノ懸板ノ記文ニ見ユ。

東大寺大佛寶殿者天平勝寶四年聖武天皇勅願成就之伽藍也爾後四百三十二年高倉院治承四年十二月二十八日爲_レ平重衡所_レ焚、安徳天皇養和元年醍醐俊乘坊重源始發_レ大勸進之願、至_レ後鳥羽院文治三年四月、後白河法皇命_レ鎌倉右幕下源賴朝卿、再造之、仍令_レ重源掌_レ其事、建久六年其功全就、三月十二日主上行幸賴朝參詣_{先之}上洛、以_レ慶_レ之、自_レ是而又三百七十三年正親町院永祿十年十月十日再罹_レ松永久秀之兵燹、爾來百四十餘年貞享之初東大寺龍松院上人奉_レ勅許台命_レ以張_レ勸進之勢、遂終_レ修復之功、寶永五年九月廿六日也明年三月有_レ供養之儀、今之上人公盛修_レ之云、吉貴辱_レ右幕下之後裔、領薩隅日之三州、祖先之志、不可_レ不_レ繼、子孫之福不可_レ不_レ祈、追_レ遺計_レ久思而不措、於是命_レ匠新搆_レ曼荼羅臺一基、製_レ什器一部、別鑿_レ舍利塔_レ以納_レ殿內_レ以表_レ心裏、上則助_レ祖先之冥業、下則期_レ子孫之永福、云、寶永六年三月十四日鎌倉右幕下二十二代苗裔薩隅日三州主兼領琉球國從四位下行左近衛權少將兼薩摩守源朝臣吉貴識。

○金銅燈爐一基大佛殿前ニアリ

八角製ニシテ、四面ニ佛像、四面ニハ獸形ヲ鑄出シ、銘文ハ銅柱ニアリ。世ニ陳和卿ノ作ト云フ。般若寺笠塔婆銘ニ「吾朝□陳和卿爲鑄金銅大燈□……」トアルハ、此銅爐ヲ謂ヘルナラン。然ルニ寺僧佐保山晋圓氏ノ説ニ「宋人陳和卿文治年間盧舍那佛修治ノ際鑄造スト云フコト近代ノ記録及縁起等ニ見ユルモ確タル傳説ニアラズ。如何トナレバ要録第七雜事章大佛殿納物狀即チ永觀二年ノ記録ニ大燈爐一基在庭中ト、案ズルニ永觀二年文治ヲ距ルコト二百年前ナリ、又鑲三具トアリ、鑲座痕迹實地現物ニ就テ調査スルニ、燈籠屋根妻殿手ノ上ニ四處鑲付ノ痕迹アリ、鑲三具トアルハ全ク其ノ一ヲ缺失セルナラン。然ルニ該寶珠ニ銘ヲ發見セリ、康和三年歲次辛巳十一月二日己未別當前權律師永觀修造畢トアリ、康和三年件ノ寶珠修治造作ト見エタリ。文治ヲ距ル九十年前ナリ。前後參考スルニ全ク天平創立ノ品物ニシテ、陳和卿造作ト云フハ、文治年間燈籠扉二枚修覆セルヲ陳和卿ノ鑄造ナリト認リ傳タル事分明ナリ」ト云ヘリ。姑ク記シテ後考ヲ俟ツ。

講堂

轉法輪勝義殿トモ稱ス。即チ法輪ヲ轉ジテ眞理ヲ講説スル處ナリ。故ニ講堂ト名ヅク。天平勝寶中ノ創立ニシテ高十八丈、廣九丈六尺、千手觀音ヲ本尊トス。挾侍ニ虚空藏・地藏ノ二菩薩アリ。軒廊長六丈三面僧坊コレニ附帶セリ。延喜十七年十二月一日夜西室ノ第二房火ヲ失ヒ、講堂・三面僧坊延燒ス。承平五年五月再興ノ功成リ供養開眼ヲ行フ。治承四年兵火ノ際三面僧坊ト共ニ燒ス。後、

建仁三年十一月建立ノ供養アリ。永祿十年燒失以後復タ建立ナシ。址大佛殿ノ後ニアリ。

東大寺要録曰

講堂在三面僧坊

講堂二字 長十八丈二尺 廣九丈六尺

軒廊一字 長六丈 廣三丈八尺

僧房四字……

已上堂舎延曆元年新檢記帳所注載也第一卷

鑲千手菩薩一軀 立高二丈五尺 金色在講堂

右 天朝御願 以天平勝寶七年十一月廿一日始作

虚空藏菩薩像一軀 立高一丈 體彩色壞 在講堂

地藏芥像一軀 立高一丈

右皇后御願以天平十九年二月十五日始作

已上同新檢記帳第一卷所注也……

日本感靈錄曰

從五位下臣三嶋々繼者倭州添上縣佐保邑之人也奈良太上天皇之世大同年中島繼自進奉仕東大寺

講堂之堂童子……延喜十七年丁丑十二月一日夜自西室二室失火講堂三面僧房燒亡午時別當權律師觀有檢按觀賢僧正、件講堂千手觀音并挾侍虛空藏地藏各一體○案ズルニコレ延喜燒失後即チ承平再興ノ佛體ナルベシ佛師會理阿闍梨任律師小佛師五十餘人也……

治承五年中原師尙大佛勘文曰 延喜十七年十二月講堂并三面僧房燒亡朱雀院……承平五年五月供養講堂開眼新佛。

七大寺巡禮記曰 講堂 □□□五月○承平五年五月ナラン九日壬寅講堂供養并□□律師仁顯從儀師玄延、本寺別當寛教、左大夫坂上經行等爲會行事 供養一千僧開眼權律師令辰講師權律師仁嚴咒願師權律師思訓聖武建立之講堂延喜十七年十二月一日三面僧房等炎上之時燒失其後承平五年供養又治承四年炎上建仁三年十一月供養也導師大乘院前大僧正信圓咒願東大寺別當延果上皇御幸本尊者丈六千手觀音淨名文珠也。

舊跡幽考曰 講堂は天平勝寶年中の造建本尊は五丈の千手觀音也……延喜十七年十二月……此堂三面の僧坊炎上其後承平五年に再興あり……治承四年に炎上其後嘉禎三年四月十九日棟上……再興あり永祿年中炎上それより結果て大佛のうしろに石すへのこれり。

塔 婆

卒都婆一ニ金剛舍利塔ト稱ス。其ノ舍利ヲ安置スルニ因ルナリ。東西二塔アリ。其ニ天平勝寶ノ

創建ニ係リ、東塔ハ高二十三丈八寸、舍利十顆ト四方四佛ヲ安置ス。西塔ハ高二十三丈六尺七寸、並ニ七重ノ高塔ナリ。

大佛殿碑文曰 塔ニ基並七重東塔高廿三丈八寸西塔高廿三丈六尺七寸露盤高各八丈八尺二寸用熟銅七萬五千五百二斤五兩白鐵四百九斤十兩……

東大寺要錄曰 東塔院 七重寶塔一基 高廿三丈八寸 塔内安三方淨土……天平勝寶五年三月三日建立西塔院 高廿三丈六尺七寸 天平勝寶五年閏二月廿三日建

七大寺巡禮記曰 東塔一基 高廿三丈八尺古傳如此、或三十六丈、云七重 五間在大佛殿東南天平勝寶四年三月三日豎、擦天平寶字八年三月三日置露帳○盤ノ誤寫カ云云即安佛舍利十粒金字最勝王經一部云云其後及度々燒失當時無之 西塔一基 在大佛殿西南炎上之間當時無之承平四年十月廿九日雷火云々

東塔ハ治承四年ノ兵火ニ罹リ、後再建ノ年代詳ナラズ。坊目考ニ天福ノ再建トスルモ據ヲ見ズ 康安二年雷火ノ爲ニ再ビ燒失セリ。爾後造立ナカリシハ七大寺巡禮記ニ「當時無之」ノ字面ニテ明ナリ。

法隆寺別當記曰 康安二年壬寅正月十三日、東大寺七重東塔雷火付テ次日午時終マテ燒失畢人々二十人ハカリ死去眞言院同燒失了弘法大師建立之堂也。

然ルニ坊目遺考ニ康安ノ燒失ヲ漏ラシ「永祿六年雷火燒亡」ト記スルハ何ニ據ルヲ知ラズ。西塔ハ

承平四年雷火燒失ノ後再建セシモ年代詳ナラズ。長保二年再ビ燒ケ萬壽三年之ヲ再興ス。爾後興廢ノ事歴詳ナラズ。但シ東塔址ハ八幡池ノ東南ニアリテ、西塔址ハ水門ノ北側ニアリ。

中原師尙勸文曰 承平四年十月西塔爲雷火燒亡。

東大寺要錄曰 長保二年十月十九日西塔三重并正法院燒亡興福寺喜多院燒亡火移也。

異本年代記坊日遺考所引曰 萬壽三丙寅年東大寺塔供養治承四年十二月二十八日東西七重大塔兵火。

○西塔門址 水門南北石橋ノ北ニアリ。七大寺巡禮記ニ「南御門在_二南大門西方西塔門_一云云依無_二塔建立_一自然不開」トアリ。

小塔院

天平寶字八年九月勅シテ一百萬小塔ヲ造リ、各無垢淨光隨羅尼ノ榻本ヲ納メ之ヲ十大寺ニ分配ス。所謂十大寺ハ大安・元興・弘福・藥師・四天王・興福・法隆・崇福・江_近東大・西大寺ナリ。神護景雲元年實忠爲ニ東西小塔院ヲ建立シ之ヲ納ム。

東大寺要錄曰 東西小塔院、神護景雲元年丁未造_二東西小塔堂_一實忠和尙之所_レ建也天平寶字八年甲辰秋九月十一日孝謙天皇造_二一百萬小塔_一分配十大寺各籠_二無垢淨光隨羅尼榻本_一塔院已廢シ址亦詳ナラズ。但シ此時分配セラレタル小塔或ハ燒失シ、或ハ破壞シ、其ノ今日ニ存スルモノハ獨リ法隆寺アルノミ。所謂百萬塔ト稱スル者即チ是ナリ。

食堂

七大寺巡禮記ニ「食堂南向、件堂在大佛殿_二良方去_一町餘_二炎上以後_一」ト。案ズルニ治承ノ兵火ニ食堂其ノ災ヲ免レタリ。所謂炎上何レノ時ニ在ルヲ知ラズ。後考ヲ俟ツ。

大湯屋

創立詳ナラズ。治承ノ兵火大湯屋亦其ノ災ヲ被レリ。七大寺巡禮記ニ「大湯屋南向、差鍋一口、足口二口、十五石納_二云々_一件屋在大佛殿東北方」ト。再建ノ時代詳ナラズ。

三面僧房

創始詳ナラズ。治承ノ兵火講堂ト共ニ燒失セリ。講堂ノ再興ハ建仁三年ニアリ。僧房モ同時ニ再興セラレシナラン。七大寺巡禮記ニ、
三面僧房 在_二講堂之東西北方_一東室一圓聖寶僧正坊也自_二其南妻_一北行者第二房也……仍彼室聖寶僧正之門弟相承子_レ今不_レ退者也……
ト。即チ是。永祿火災後建立ナシ。

鐘樓

大佛殿碑文ニ「鐘一口高一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三分、口厚八寸用熟銅五萬二千六百八十斤白鐵二千三百斤」トアリ。坊目遺考ニ「治承四年十二月二十八日、兵火ニ鎔缺シ、延應二年鑄造セ

シナラン」ト云ヘドモ、治承ノ兵火ニ鐘堂其ノ災ヲ免レシコト既ニ東大寺續要録ニ明文アリ。案ズルニ七寺巡禮記ニ「鐘樓一宇、鐘一口高一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三分、口厚八寸件鐘者天平勝寶二年五月始作、同三年十二月鑄之不成、同四年正月八日又作下形以同年閏三月七日鑄成、同四月八日天皇行幸寺家始掛、鐘鐘樓者永祚元年八月十三日大風顛倒之後造之口傳云鐘所懸之梁者榑木云々」ト。之ニ據レバ、天平創始ノ鐘樓ハ永祚元年ノ大風ニ顛倒シ、コレト同時ニ梵鐘多少ノ毀損ヲ呈セシナラン。後鐘樓再建スルニ及ビ、梵鐘ハ其ノママ懸ラレシヲ幸ニ治承ノ兵火ヲ免レシカ、爾後歲月ヲ閱スルニ隨ヒ、或ハ用ニ適セザル所アリテ今ノ鐘ヲ更鑄セシモノナルベシ。現今ノ鐘ハ實ニ延應元年九月ノ鑄造ニ係リ、永正中ノ修理スル所ニシテ高徑厚舊式ニ依ル。

南都奉行所寶歷二年記録曰 鐘樓 四間四面 鈞鐘高一丈三尺六寸差渡九尺一寸餘厚八寸、重目四萬八千九百貫目銘云 延應元年鑄之 永正中修理奉行大法師英憲龍圖書付之

東大寺記南都藥師院氏所藏曰 鐘高一丈三尺六寸口徑九尺一寸三分厚八寸三分銅五萬二千六百八十斤白鐵二千三百斤重目五百六十石、貫目四萬八千九百貫目、此鐘銘有正應元年己亥年九月晦日也大勸進法印行勇大鑄師佐兵衛尉延時。

正倉院

正倉院ハ諸倉ノ中ノ主タルモノノ名稱ニシテ、古ハ官衙及ビ寺家皆之アリ。三代實錄ニ「貞觀八

年七月十三日……大鳥集、大藏省正藏院結樂倉上」ト。是、大藏省ノ正倉院ニシテ、古今日録抄ニ「自今寶光院至于東門北脇廿九藏在之顛倒跡、故名寶光院正倉院、惣昔卅三藏也今者殘三綱封藏許在之」ト。又西大寺資財流記帳ニ「正倉院南、一瓦葺甲倉……三瓦板倉……」ナド見ユ。法隆寺ニシテ猶且ツ二十二棟ヲ有セリ。況ンヤ東大寺ニ於テオヤ。昔時數十ノ倉庫莖ヲ並ベ軒ヲ連ネシナラン。東大寺要録ニ「長元四年正倉院動用御藏什」ト。動用御藏ハ常用ノ什器ヲ納ムル藏ニシテ正倉院ニ附屬セル建物ナリ。此等ノ諸倉ハ年代ノ久シキ、或ハ顛倒シ、或ハ寺家ノ盛衰ニヨリ廢絶スルニ至リシモ、獨リ正倉院ノミ今日ニ存スルハ、其ノ内ニ御物ヲ納置シ歷代厚ク保護ヲ加ヘラレシニ因ルナリ。

正倉院ハ間口十八間八寸四分、奥行五間一尺二寸ニシテ高五間、一棟三口ノ校倉ニシテ、三稜ノ木材ヲ井桁ノ如ク組建テ、瓦ヲ以テ屋根ヲ葺キ、床下ハ九尺ノ高サアリ。充分濕氣ヲ排除スルニ足ル。古人建築ノ用意亦到レリト謂フベシ。俗ニ之ヲ三藏ト稱スルハ其ノ三口ヲ有スルヲ以テナリ。正倉院創始ノ年代詳ナラズ。黒川氏ノ説ニ天平勝寶八年六月廿二日孝謙天皇先帝ノ忌辰ヲ以テ、其ノ遺物ヲ盧舍那佛ニ獻ジ冥福ヲ祈リ給フ。乃チ之ヲ納メンガ爲造ラレタルモノナリト云フモ蓋シ非ナリ。如何トナレバ、彼ノ西大寺ハ天平神護元年ニ成レル伽藍ナルニ尙正倉院ノ在ルアリ。東大寺大佛殿ハ天平勝寶四年ニ成リ、僧徒既ニ住シ什器亦稍々備ハリシナランニ、何ゾ正倉院ヲ設ケズシ

テ止マンヤ。果シテ正倉院ト稱スルモノアレバ隨ツテ幾個ノ諸倉アリシコト疑ナシ。孝謙大皇ノ先帝御器玩ヲ正倉院ニ納メ給ヘルハ、是其ノ御遺愛ヲ永ク後世ニ傳ヘントスルニ出デラレシモノニシテ、御遺物ヲ納ムル爲ニ殊ニ新築シ給ヒシニハアラザルベシ。本願聖武天皇ハ天平勝寶八年五月二日崩ジ給ヒ、同年六月二十二日ハ正ニ七々ノ忌辰ニ相當スルヲ以テ、孝謙天皇皇太后相共ニ先帝ノ冥福ヲ祈リ奉ルベク、御遺愛ノ珍器ヲ大佛ニ獻ジ給フ。其ノ願文獻物帳ハ東大寺要錄ニ載ス。曰ク
一勅封藏追施入帳

奉爲 太上天皇 捨 國家珍寶等 入 東大寺 願文 皇太后御製

妾聞悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯、所以自在大雄天人師佛垂法鈞、而利物開智鏡而濟世、遂使擾々群生入寂滅之域、蠢々品類赴常樂之蓮、故有歸依則滅罪无量、供養則獲福无上、伏惟先帝陛下德合乾坤、明並日月、崇三寶而過慈、統四攝而揚休聲、籠天竺、菩提僧正涉流沙而遠到、化及振且、鑒眞和上、凌滄海而遙來、加以天惟薦福、神祇呈祥、地不惜珍人、民稱聖恒、謂千秋萬歲合歡相保、誰期幽塗有阻、聞水悲涼、靈壽无增、毅林搖落、陳驪難駐、七々俄來、茶襟轉積、酷意彌深、披后土而无微訴、皇天而不子將欲、爰託勝業、式資聖靈、故今奉爲先帝陛下捨國家珍寶種々、既好及御帶牙笏弓箭刀劍兼書法樂器等、入東大寺、供養盧舍那佛及諸佛菩薩一切賢聖、伏願持茲妙福、奉翼仙儀、永馭法輪、速到花藏之寶刹、恒受妙樂、

終遇舍那之法、遂將普賢而宣遊共、文珠而展化、仁壽百億被三千、又願今帝陛下壽同法界、福類虛空、劫石盡而不盡、海水竭而无竭、身心永奉、動息常安、復乃天成地平時、康俗阜、萬姓奉无爲之化、百工遵有道之風、十方三界六道四生、同霑此福、咸登妙果、
獻盧舍那佛

御袈裟合致領

九條刺納樹皮色袈裟一領 碧綾裏包紺緣

七條褐色袖袈裟一領 金剛智三藏袈裟

七條織成樹皮色袈裟一領 紺綾裏包紺緣

七條刺納樹皮色袈裟六領 二領碧綾裏包紺緣 二領紺綾裏包紺緣 一領紺綾裏包紺緣 一領紺綾裏包紺緣

右納漆皮箱三合、箱別納以碧綾裏拾裏三領、箱亦納有綠藤緋袋、惣納漆櫃一合、着鏤

厨子壹口赤漆文槻木古縁作 合銅作鈎具

右件厨子是飛鳥淨御原宮御宇天武天皇

天皇傳賜藤原宮御宇

太上天皇天皇傳賜平城宮御宇

太上天皇天皇傳賜藤原宮御宇

添 上 耶

中太上天皇 天皇七月七日傳賜平城宮御宇

後太上天皇 天皇傳賜

今上 今上護獻盧舍那佛

納物

雜集一卷 白麻紙 紫檀軸 紫羅縹 綺帶

右平城宮御宇 後太上天皇御書

孝經一卷 麻紙 瑪瑙軸 減紫紙縹 綺帶

右平城宮御宇 中太上天皇御書

頭陀寺碑文並樂毅論杜家立成一卷 麻紙 紫檀軸 紫羅縹 綺帶

樂毅論一卷 白麻紙 瑪瑙軸 紫紙縹 綺帶

右二卷 皇太后御書

以前四卷 裏衣香二袋 一重六兩二分 一重十一兩二分 並納白葛箱

書法廿卷 並王右軍之書跡也

裏衣香三袋 一袋小一斤七兩一分 一袋小一斤十三兩

右並納銀平脫箱々亦納高麗錦袋

小刀 斑犀 偃鼠皮御帶一條 御刀子 牙笏 雙六具 琴 琵琶 篳 吳竹笙 石八 太刀

子 御弓壹佰張 御箭壹佰具 御甲玖拾玖領 御鏡廿面 御屏風壹佰疊等……註 小刀以下ハ

品目ノミ大要抄出

右件皆是

先帝翫弄之珍、內司供擬之物、追感嗚昔、觸目崩摧、謹以奉獻盧舍那佛、伏願用此善因、奉資冥助、早遊十聖、普濟三途、然後鳴鑾花藏之宮、住躡涅槃之岸。

天平勝寶八歲六月廿一日

爾後歷世ノ君臣亦之ニ倣ヒ獻納セシモノモアリシナラン。斯ク貴重ノ物品ヲ藏メタリシヲ以テ朝廷厚ク之ヲ保護シ、其ノ開閉スルニ當リテハ特ニ勅使ヲ遣ハシ、寺家ヲシテ濫リニ開閉スルヲ許サズ。故ニ正倉院ノ一名ヲ勅封藏ト稱シ、普通ノ管鑰ハ當寺ノ三綱職之ヲ掌ルモ、勅封藏ハ常ニ官府ニ格納セラル。

東大寺要錄曰 正藏院 鑑七具 倉坊二具 勅封鑑在官二具 網封一具 北隔一具 東三倉一具

西行南一倉

正倉院開閉ノ例ヲ案ズルニ、當初ノ事跡ハ記錄ノ微スベキナキモ、中世以降ニ係ルモノハ舊三綱樂師院ノ記錄ニ詳ナリ。今之ニ據リ其ノ大要ヲ述ベシ。建久四年八月廿五日修繕ノ故ヲ以テ開封シ、

寶物ヲ網封倉ニ移ス。明年三月ニ至リ功竣フ。此時倉中ノ錫杖ヲ以テ大佛勸進聖重源ニ賜フト云フ。

○此時開封ノ事ハ東大寺雜集錄第五藥師院藏ニ「建久四年八月廿五日正倉院開封□西北綱所□在同

西南次各着座勅使左少辨藤原朝臣ト見エタリ。

寛喜二年十月、僧顯識等倉扉ヲ燒キ寶器ヲ盜ム。所司之ヲ逮捕シ奈良坂ニ梟ス。寶器ヲ京師ニ獲テ倉中ニ納ム。明年十二月勅使參向シテ寶器ヲ點檢シ、嘉禎三年六月勅使寶器ヲ點檢ス。此時ニ於ケルモノハ唯現在ノ櫃數ヲ計ルノミ。正應元年十一月前攝政藤原道家東大寺ニ詣シ、戒ヲ受ケ且ツ寶器ノ拜覽ヲ請フ。朝廷殊ニ使ヲ遣ハシ爲ニ封ヲ開ク。仁治三年二月倉中ノ玉冠及ビ諸臣ノ禮服ヲ出サル。即位ノ大禮ニ用キンガ爲ナリ。是ヨリ先、庫綸紛失ス。是ニ至テ勅使鍛冶ヲシテ鑿櫃ヲ打破セシメ、之ヲ開ク。禮畢リ寶器ヲ返納ス。建長六年雷東面ノ北扉ト柱ニ震ス。七月勅使寶器ヲ檢シ修繕ヲ加フ。正嘉二年正月攝政藤原兼經東大寺ニ受戒シ寶器拜覽ヲ請フ。開封例ノ如シ。寶治二年九月後嵯峨上皇南都ニ行幸シ寶器ノ觀覽アリ。弘長二年先帝倉中ノ袈裟ヲ出シ給ヒシガ後返納シ給フ。元中二年八月足利義滿春日社ニ詣テ正倉院ノ寶物ヲ拜覽ス。永享元年九月足利義教亦春日ニ詣テ寶物ヲ拜覽ス。寛正六年九月足利義政亦寶器ヲ拜覽シ初メテ蘭奢待紅沈香ヲ截ル。天正二年三月織田信長拜覽シ請フテ蘭奢待ヲ截ル。蓋シ足利氏ノ故事ニ遵フナリ。慶長七年六月十一日修繕ニヨリ開

封、明年又修繕ヲ以テ開封アリ。此時辛櫃三十合ヲ寄附セラレタリ。

近代御開封年譜藥師院藏曰 慶長七年壬寅六月十一日破損爲御内見御開封

勅使廣橋右中辨 同勸修寺右中辨 奉行本田上野之介

同八年癸卯年二月二十五日爲御修理御開符

勅使前之御兩方 奉行大久保石見守本田上野之助

開符之時モ同兩奉行 長櫃三十新調

十七年賊寶庫ヲ穿テ寶器ヲ盜ム。京師所司代板倉周防守々護大久保氏賊ヲ捕ヘ奈良坂ニ磔ス。依テ開封シ寶物ヲ點檢ス。

同年譜曰 慶長十七年壬子年御倉へ盜人入御寶物御改

御開符勅使柳原右中辨 奉行永井彌右衛門

同年十一月十一日開符

寛文六年三月四日修繕ニヨリ開封ス。

同年譜曰 寛文六年丙午三月四日破損爲内見 七日開符

勅使日野左少辨資茂朝臣 上使河口源兵衛重正

奉行土屋忠次郎勝重

添 上 郡

元祿六年五月十六日修繕ヲ以テ開封アリ。

同年譜曰 元祿癸酉五月十六日爲御修繕御開符

勅使日野左少辨輝茂朝臣 御別當勸修寺宮二品濟深法親王

上使南郡奉行神尾飛彈守元知

當時一薦 寶嚴院實賢法印 同二 惣持院英秀法印

執行 藥師院維那祐惣 神主 從五位上修理權亮紀延親
從五位下左近將監近方

佛師 淨雲 宗貞 小綱 宗貞 玄賀

六堂 清長 清貞 秀行 正眞 寺公人 十人

大工 八幡坐新坐本坐 鍛冶 芦田與兵衛宗道

□理奉行御代官 竹村八郎兵衛殿

御倉之番 修理之間戸津川
郷人五人宛勤番

此時鴨毛屏風等ヲ修覆セシメ、且ツ蘭奢待紅沈香ノ辛櫃ヲ寄附セラレ、天保四年十月東大寺ノ請ニヨリ、修繕ノ爲開封アリシト云フ。以上ハ建久以後徳川氏ニ至ルマデ開閉ノ例ヲ略記スルモノナリ。而シテ明治五年八月ニ至リ宮内大丞ヲ勅使トシ寶器ヲ點檢セシム。町田文部大丞内田文部六等出仕コレニ隨フ。是、大和國社寺寶物檢査ヲ文都省ニ託セラレシヲ以テナリ。同八年三月博覽會ヲ奈良

ニ設開セララルヤ、倉中ノ寶器ハ考古ニ裨益アルヲ以テ請フテ之ニ陳列セリ。香川宮内大丞勅使トシテ開封ス。會終リ勅使山岡宮内大丞開封。同九年又奈良博覽會ニ陳列ス。開閉例ノ如シ。同十年聖上奈良ニ行幸シ寶器ヲ觀覽シ因テ蘭奢待ヲ截ラセ給フ。是ヨリ先、勅使櫻井宮内少丞町田内務大書記官ト共ニ來寧シ、寶器ヲ點檢シ、其ノ破損セルモノハ修補シ、且ツ寶庫ヲ修繕シ、避雷柱消防器械ヲ設ケ非常ニ備フ。十一年三月兒玉宮内權大書記官修繕開封。同年又奈良博覽會ニ寶器ヲ貸出ス。楳村京都府知事請フテ畫工ヲシテ之ヲ模寫セシメ京都博物館ニ備フ。十二年得能大藏大書記官請フテ寶器ヲ拜覽ス。是其ノ器物古文書ヲ印刷セントスルニ依ルナリ。勅使岡宮内權少書記官之ヲ開閉シ、町田内務大書記官出納ヲ掌ル。十三年一月伊藤内務卿請フテ、庫中ニ棚架シ寶器ヲ安排ス。同年又々奈良博覽會ニ陳列セラル。其ノ五月寶庫ノ敷地ヲ廣メ八段八畝八步餘トス。十四年四月博覽會ヲ農商務省ノ所管トナスニ及ビ寶器ハ農商務省ニ、圖書ハ内務省ニ屬セシメ、其ノ開閉ハ宮内省ヲシテ掌ラシム。十五年八月外門塀牆成リ十月棚架成ル。黒川農商務御用掛ヲシテ寶器ノ目錄ヲ整調セシム。十六年六月岩倉右府井上參議拜覽ヲ請フ。會々徳大寺宮内卿京都ニ在リ。勅使トシテ之ヲ開閉ス。七月宮内・農商務・内務三卿ノ請ニヨリ秋期ヲ以テ倉内ヲ曝涼ス。此月特ニ巡查ヲ附シ非常ヲ警メシム。十七年四月宮内省ノ所轄トナル。五月三條相國寶器ヲ拜覽ス。勅使宮内大書記官之ヲ開閉ス。十九年三月寶庫修繕勅使井上圖書頭開閉。此時火除地トシテ東大寺塔中會所坊及ビ

金珠院址并ニ民有地合計二千五百八十三坪一合ヲ買上ダ、更ニ外門塀牆ノ修築アリ。廿年五月井上外務大臣寶器ヲ拜覽ス。八月九鬼圖書頭ノ一行拜覽ヲ許サル。爾後毎年夏期ヲ以テ曝涼シ、奏任待遇以上及ビ美術篤志者ニ限り特ニ之ヲ拜覽セシムルコトナレリ。

諸門

南大門 創立ノ年代詳ナラズ。應和二年大風ノ爲顛倒ス。再建ノ年月詳ナラズ。

中原師尙勘文曰 村上天皇應和二年八月南大門爲大風顛倒

東大寺要錄ニ、治承ノ火災ニ罹リシ建物ノ名稱ヲ擧ゲタルニ南大門ナシ。然レドモ寶曆中ノ奉行所記録ニ「南大門東西十四間、南北五間餘、正治元年建立五百年餘ニナル」トアリ。之ニ據レバ南大門亦治承ノ兵火ニ燒亡シ、正治元年ニ至リ之ヲ再建セシ者ナラン。後考ヲ俟ツ。爾後南大門ニ係ル沿革ハ記録ノ微スベキナシ。七大寺巡禮記ニ「南大門、二蓋五間瓦堂東西長六丈一尺、南北廣二丈四尺、安金剛力士高各二丈餘、同内方在獅子像以石作之者也」ト。永祿ノ火災ヲ免レ今ニ存在ス。所謂金剛力士ハ世ニ運慶・湛慶ノ作ト云ヒ、石狛犬ハ年代作者詳ナラズ。坊目遺考ニ、モト中門ニアリシヲ永祿ノ火災後之ヲ南大門ニ移置セシナラント云ヘドモ、永祿以前南大門ニ石獅子アリシコト七大寺巡禮記ニ明文アレバ今之ヲ取ラズ。註 金剛力士像ハ運慶・快慶ノ作ナリ。

中門 創始詳ナラズ。東大寺要錄遺傳ニ「建久五年十二月廿六日南中門二天造始之 東方多開天 西

方持國天 二體共木像往古一丈也今度増三尺仍二丈三尺也 東方天大佛師快慶……西方天大佛師定覺……ト。是、治承兵火

後再建セラレシナリ。七大寺巡禮記ニ「中間安二天像、此内東方毘沙門不可思議也同、西大寺中門

像、也内在鐘臺號、行事鼓也華嚴會始行之時打之歟左右廻廊在大鼓、同時用之歟細々不用者

也」ト記シタルハ、即チ建久再建ノ物ナラン。永祿ノ兵火ニ燒亡シ、今ノ建物ハ大佛殿ト共ニ成ル

モノニシテ、其ノ二天ハ享保中大佛師順慶ノ作ナリト云フ。

西大門 天平勝寶八年勅定ノ東大寺圖ニ之ヲ記スレバ、最初ノ大佛殿ト共ニ成レルモノナルベシ。是

ヨリ先、天平十三年諸國ニ國分寺ヲ置カルルヤ、其ノ僧寺ヲ題シテ金光明四天王護國之寺ト稱ス。

此時大和ノ國分寺ニ充テラシレモノハ今ノ東大寺ニアラズシテ、彼ノ金勝寺一名金光明寺ナリシコ

ト下ニ述ブルガ如シ。

天平勝寶二年東大寺成ルニ及ビ、更ニ當寺ヲ以テ國分寺ニ充テ、上皇宸翰ノ金光明四天王護國之

寺ノ扁額ヲ西大門ニ揚グ。因テ之ヲ國分門トモ稱ス。

諸寺緣起集曰 東大寺緣起文云東大寺是平城御宇勝寶威實眞聖武皇帝諡稱天地國押開豐櫻彥命所

建矣、天皇叡哲内報欽明外照、廣濟如天、厚養似地、遠顧四生、遂崇三寶、以天平十三年辛

巳二月十四日勅命邦國每置二寺所謂金光明四天王護國之寺法華滅罪之寺今斯寺斯其一也獨

峙城故曰東大寺天平十五年癸未十月十五日天皇御信樂宮發大願造金銅廬舍那佛像便課

妙工創圖尊體以天平十七年乙酉八月廿三日車駕廻歸於平城宮更移彼事就于茲寺夷東山之下積四海之銅始自天平十九年丁亥九月廿九日至于天平勝寶元年己丑十月廿四日惣三ヶ年鑄以八箇度座身五十三尺爰天皇辭帝位而落飾披法服而趨眞勝寶二年庚寅二月二十日太上天皇皇帝皇后共變風輿親臨伽藍於是割五千戶而封之分奴婢二百口而入乃定其額以爲金光明四天王護國之寺。

七大寺巡禮記曰 國分門 養老二年造諸國々分寺其一大和國之國分寺是也但此門者天平十三年三月十四日勅諸國被造者也又十字二行額文在之……其額左右之縁在八天像不可思議也天平勝寶二年二月廿二日聖武法皇及大臣百官參東大寺拜大佛殿定十字二行之額云云有王城東故云東大寺者……又此額者弘法大師筆跡云云聖武以後重而被書之……

天慶中平將門嘗于野田白銀堂後谷ニ住ス。因テ山上君ト字セシガ其ノ志ヲ得ザルニ及ビ一族ヲ率キ此門ヲ過ギ關東ニ走り途ニ天下ヲ亂ル。爾後以テ凶事トナシ常ニ門ヲ開カズ。故ニ不開御門トモ稱セリ。

七大寺巡禮記曰 國分門……又天慶將門自此門出間其以後閉戸不開仍不開御門云……坊目考曰 古記云白銀堂者行基并開基而後平親王將門蓋名山住居此谷……

永正五年三月十八日燒失シ址雲井坂ニアリ。扁額ハ今尙存シ。博覽會社ニ出品シ世人ノ普ク知ル所

ナリ。七大寺巡禮記ニ據ルニ、最初ノ額ハ聖武天皇ノ宸翰ナリシヲ後、空海ヲシテ改メ書セシメタリト云フ。果シテ然ラバ今存スル物ハ最初ノ物ニシテ、空海ノ書セシハ永正ノ火災ニ門ト共ニ燒失セルナランカ。後考ヲ俟ツ。字治拾遺物語ニ天平勝寶年中國分寺の額は一魚養書之ナドトモアリ

碾磑門 天平勝寶八年東大寺圖ニ佐保路門ト見ユルモノ即チ是。其ノ位置佐保ノ大路即チ一條大路ノ衝ニ當ルヲ以テナリ。碾磑一ニ轉害・轉磑・天貝・手搔等ニ作ル。共ニ借字ナリ。碾磑ハ唐白ナリ。春時此門ノ東ニ唐白亭アリ。故ニ碾磑門ノ名ヲ得タリ。

七大寺巡禮記曰 轉磑門 西向自南第三門也號碾磑御門堂此門之東有唐白亭故云轉磑門云云此門與法華東御門同達也云云號一條大路也

碾磑亭 七間瓦屋置碾磑、件亭在講堂東金堂北、其亭內置石唐白是云碾磑、以瑪瑙造之其石白也

治承永祿ノ火災ヲ免レ今ニ存在ス。俗ニ景清門ト呼ブ。

中御門 東大寺圖ニ中門トアル是ナリ。亦大佛殿同時ノ建物ナルベシ。爾後沿革詳ナラズ。七大寺巡禮記ニ中御門ハ、「西方自南第二門也通戒壇院門也」ト見ユ。其ノ國分門ト碾磑門トノ中間ニアルヲ以テ中御門ト稱ス。坊目遺考ニ據ルニ慶長十年二月晦日燒亡スト云フ。

法華堂

添上郡

古、金鐘寺一ニ金勝ニ作ルト稱シ後、金光明寺ト改ム。俗ニ之ヲ三月堂ト呼ブ。不空羅索觀音ヲ本尊トナスニヨリ或ハ羅索院ト號ス。天平五年朝廷僧正良辨ノ爲ニ草創セララルル所ニシテ、其ノ等身執金剛神ハ即チ僧正ノ本尊ナリ。製作絶好ト稱セラル。

東大寺要錄曰 天平五年歲次癸酉公家爲良辨創立羅索院號古金鐘寺是也。

又曰 根本僧正良辨僧正者相模人漆部氏持統天皇治天下己丑誕生義淵僧正弟子金爲菩薩是也天平五年建金鐘寺

又曰 羅索院名金勝寺 又改號金光明寺 亦云禪院

堂一字 五間一面在禮堂

天平五年歲次癸酉創建立也良辨僧正安置不空羅索觀音并像、當像後有等身執金剛神是僧正本尊也云云。

天平十三年諸國ニ國分ニ寺ヲ置キ、其ノ僧寺ヲ金光明四天王護國寺ト稱シ、尼寺ヲ法華滅罪寺ト稱ス。此時金勝寺ヲ以テ大和ノ國分寺ニ充テラレタリ。是ニ於テ金鐘寺ヲ一ニ金光明寺ト稱ス。

諸寺緣起集曰 金光明寺本名金鐘 今案件金勝寺者不被立大佛殿以前謂索院之名也

天平十四年七月太政官符ヲ以テ當時ノ安居ヲ以テ恒例ト定メラル。

東大寺要錄曰 金鐘寺安居 官旨事

雜格中卷云

太政官符 治部大藏宮内等省

稱金光明寺 本名金鐘寺

右奉 皇后去四月三日 令旨 稱上件之寺預八箇寺例 令爲安居 自今以後永爲恒例、天平十四年七月十四日

是ヨリ先、聖武天皇金銅盧舍那佛大像鑄造ノ勸願ヲ發シ給ヒ、天平十五年十月近江ノ信樂宮ニ幸シ其ノ雛形ヲ造ラシメ、先ヅ體骨柱ヲ造ラレシガ故アリテ其ノ事ヲ止メ、十七年八月車駕平城ニ還御シ、再ビコレヲ計畫シテ其ノ雛形ヲ造リ給フ。續日本紀ニ「天平十八年十月甲寅天皇、太上天皇、皇后行幸金鐘寺燃燈供養盧舍那佛、佛前後燈一萬五千七百餘炬夜至三更」ト見エ、此時大佛ノ鑄造未ダ成ラズ。其ノ供養スル盧舍那ハ何ノ佛像ナルヲ知ラズト雖モ、是、大佛ノ模即チ雛形ニシテ、假ニ金鐘寺ニ安置セシモノナルベシ。天平勝寶元年大佛成リ、其ノ二年太上天皇・皇太后東大寺ニ行幸アリ。大佛ヲ拜禮シ之ヲ金光明四天王護國之寺ト稱シ、我國ノ惣國分寺トナシ給フニ及ビ、金光明ノ稱ハ自ラ東大寺ニ移轉セルモノナラン。

東大寺要錄曰 羅索院……堂一字五間一面 在禮堂……

又曰 羅索院 五間檜皮葺禮堂一字

添 上 郡

三間二面庇瓦葺二月堂一字

七間檜皮葺會房一字

廿一間二面檜皮葺僧房一字

一間檜皮葺僧坊一字

右件僧房等爲大風所々吹落云云

應和二年八月卅日大風顛倒破損堂塔雜舍等南大門等也。

羅索院雙倉 納物尤多

右前帳云 阿彌陀堂藥師堂雜物依去延喜廿年十二月十四日宣旨文皆移納於羅索院雙倉以爲

網封而不開勘者件倉朽損前別當大法師任中蓋瓦材木悉頽落仍解文言上之日依天曆四年六月綱牒旨威儀師從儀師勸茂爲使件所納之雜物實併移納正藏三小藏南端藏網封云々

羅索院正堂寶物等

金鼓一口一尺鏡四十七面卅六在天井八面在柱自餘寶物等略之永觀二年分付帳

七大寺巡禮記曰

羅索院 南向三間四面號三月堂本尊金色不空羅索四天王像同像足下鬼形等神妙也件堂在大佛殿東山後戸北面安執金剛神立像此像金驚行者良辨僧正之本尊也不可思議靈像也右手持金剛

杵左手作拳下天慶將門亂于時公家御祈禱本尊也口傳在之……此堂號法花堂歟以法華堂二月堂兩堂爲一院內號羅索院也。

和州寺社記曰 法華堂ハ八ツ棟作也。天平五年癸酉造立世に三月堂といふ。本尊は一面八臂の羅索菩薩御座す、其ノ故羅索院とも又金鐘寺ともいへり……

以上ノ記録ニ據リ、當堂ニ於ケル古今ノ沿革ヲ概知シ、併セテ古ハ法花堂・二月堂ヲ以テ一院トナシ、之ヲ羅索院ト號セシコトヲモ微スベシ。治承・永祿ノ二災ヲ免レ今ニ存在セリ。

二月堂

二月堂亦羅索院ト號ス。嘗テ法花堂ト一院タリシヲ以テナリ。十一面觀音菩薩ヲ本尊トナス。故ニ南無觀寺トモ云フ。天平勝寶四年良辨ノ弟子實忠勅ヲ奉ジテ創始スル所ナリ。實忠國家ノ爲ニ、始メテ十一面悔過會ヲココニ行フ。毎年二月朔月ヨリ二七ノ間之ヲ修ス。爾後恒例トナリ今日ニ至ル。二月堂ノ稱實ニココニ起ル。

東大寺要錄曰

二月堂 今此堂者實忠和尚之草創也凡利益不空、効驗無滯之仁祠矣觀音大士普施靈德現當悉地、莫不稱遂、是以道俗男女、頓首恭敬、尊卑老少、竭誠歸依、可謂諸佛垂應之所、菩薩遊化之地者乎天平勝寶四年壬辰和尚始行十一面悔過至于大同四年合七十年每年始自二月

朔日二七日夜修_ニ毎日六時行法_ニ……始_ニ自天平勝寶五年辛丑二月十五日_ニ至于弘仁六年_ニ合六十二年奉_ニ供涅槃會_ニ矣……

七大寺巡禮記曰

件堂號二月堂_ニ歟又南無觀寺歟此堂修二月行法事_ニ口傳云每年二月朔日開_ニ當堂寶藏_ニ昇_ニ出小厨子_ニ置_ニ本佛前之壇上_ニ其厨子之内十一面觀音像云云堂衆十五六人自二月朔日_ニ籠_ニ堂中_ニ二七日間白地不出_ニ住_ニ坊所_ニ勤行也_ニ至十四日夜_ニ堂衆等皆執_ニ金剛鈴_ニ又以_ニ炬火_ニ逆挾_ニ腋_ニ火炎出_ニ後相列唱_ニ南無觀_ニ廻_ニ佛壇_ニ仍云_ニ南無觀寺_ニ云云此行于_ニ今不_ニ退轉_ニ者也_ニ

舊跡幽考曰

羅索院俗に二月堂とよぶ。天平勝寶年のはじめ勅定によりての造營なり、小観音菩薩これは良辨僧正の御弟子に實忠和尚といふあり、ある時夢見給ふに兜卒の内宮、常念観音院に法事ありたふとかりければ、聖衆にこひて法事のやうをならひえたり、さめて後それよりかの法を修せんともひ給ひしかども尊像なし、常に之をもとめんといのられけり、あるころほひ攝州難波の津にさまよひ給ひしに、閻迦器の波にうかてきたるありけり、岸によりぬるを見れば、十一面大悲の像器のうちにあります、そのたけ七寸の銅像にしてあたかなる事人のはだへのごとし、頂戴禮拜してぞかへられける、釋それより、山城國笠置山の洞にしてをこなひる給ひけるが縁これをきこ

しめさせ給ひて、勅をくだし、東大寺にして、羅索院をたてて、和尚をすへ給ひしなり、和尚年ごとの二月朔日にかの法事をはじめ、十四日の明かたにことをはり、十五日に後堂にて涅槃會あり、二月の行ひは、天平勝寶四年にはじまり、延寶七年迄凡九百廿九年、涅槃會は天平寶字五年にはじまりて凡九百十九年がほど共に闕事なし……大観音は實忠和尚補陀洛山の観音を勧請してすへ奉り、懺悔の法を行ひ給ふよし、佛法傳通記に見えたり。

治承ノ兵火延テ堂ノ南端ニ及ビタリシモ、忽チ風變リ幸ニ其ノ災ヲ免レ、正嘉二年二月九日内陣ヨリ出火シ、佛壇既ニ燒落タルモ亦本尊ノ厨子并作花ハ恙ナキヲ得タリ。世皆以テ観音ノ靈驗ナリト云フ。

舊跡幽考曰 正嘉二年二月九日おもひあへぬ瓦の隙より、煙の立のぼりし程に大衆いかなればにやと、扉をひらくに煙火内陣にみち／＼佛壇やけおちながら、観音の厨子ならびにつくり花などはけふりもかゝらず……又治承年の兵火に此堂の南のはし夥しうもえかゝりけれども俄に風變りをのづからに消けるとぞ縁起

永祿ノ兵火亦其ノ災ヲ免レシガ、寛文七年二月十四日○舊跡幽考ニハ十五日トアリ内陣ヨリ出火シ、閻堂燒失セリ。當時ノ實況、寛文和州寺社記ニ詳ナリ。

寛文七年丁未二月十四日卯之下刻東大寺羅索院二月堂炎上本陣内陣より令出火燒失殘物之覺。

- 一 開基實忠和尚攝州難波ノ浦にして拾ひ給ひしは、生身十一面觀音御長七寸の銅像是を本堂の本尊として、厨子に安置し給ひしが、今度既に出火之砌寶嚴院といひし寺僧黒烟の中に飛入彼生身の觀音を負奉て出る、則法花堂へ移して假に安置す。
- 一 實忠和尚彼生身の佛像を安置せん爲、自ら長八尺の十一面觀音の像を鑄させて、本堂建立の最初大觀音と信じ、秘法を修して實忠五十八年の間、毎月二日朔日より二七日の間動行し給へる立像の佛、火中に猶直にして立給ひしが、玉のやうらく合掌の御手無恙殘居し給ひ……
- 一 聖武皇帝宸筆紺紙銀泥の花嚴經并光明皇后自筆の書寫し給ひし、涅槃經都而一百二十卷黒塗の箱共燒失して、御經七十餘卷殘れり、此御經は中興征夷大將軍尊氏當寺の觀音を尊崇し給ひ、古昔聖武宸筆の御經を求出し、疑なしとの自筆の書札を加へ、觀音の本座に安置し給ひしかと、今度尊氏書札共に殘れり。
- 一 觀音の座し給ひし蓮花座九重の木座共に彩色少も變らずして殘れり。
- 一 實忠絹索院建立之最初天竺より香水を渡して、壺に入納置給ひしが恙なく殘れり。
- 一 佛舍利十五粒百濟國より渡して、木座の上に安置し給ひしが無恙残り給ふ。
- 一 佛前に有し牛王の板木並末枚庄の牛王の板木弘法大師修給ひし尊勝隨羅尼梵字の板木悉く脇裏は燒而表の文字は一點も不損殘れり。

ト見エ、今ノ堂宇ハ寛文九年ノ遺營ニ係レリ。

○若狹井

二月堂の閻伽井ナリ。遠敷神祠ハ堂ノ北ニアリ。舊跡幽考ニ

閻伽水は俗に若狹の水といふ當初二月堂の行ひの初夜に諸神の名帳をよみ、供養せらるゝに、若狹の國遠敷明神此會にましゝてねがはくはわれ閻伽水を奉らん實忠和尚ことうけし給ふにたち所に黒白の鶴二羽飛來り地をうがつかと見しに、甘泉わきながれ、和尚石をたゞみ、閻伽井とし給へり一年てりつゞきて井の水ある事なし、修中のあか水はなにをかせんや、衆僧さらばとて井のほとりにあつまり、若狹のかたにむかひていのられしかば見るがうちに水盈滿せり、二月十二日の夜なり、そのときわかさの國の神祠の前のみたらし川なかれを絶て音なし、その後國の人此事をきゝて、河水あか水に通せし事をしれり、それよりかの川を音無川とぞ銘づけき、又やまひあるもの、此あか水のみぬればおほくは平愈しけるとなん釋書

此等ノ傳説ニ依リテ若狹井ト名ヅケタルナリ。今ニ至ルマデ毎年二月十二日夜井水ヲ汲取ルノ儀アリ。之ヲ水取ト稱シ其ノ式頗ル盛ナリ。

三 味 堂

添 上 郡

三昧堂一ニ四月堂ト稱ス。治安元年仁仙法師助慶上人ト共ニ創建スル所ナリ。別ニ僧房ヲ造リ、六口ノ僧ヲ住セシメ法花三昧ヲ修メシム。故ニ三昧堂ト稱ス。東大寺要録曰

三昧堂治安元年仁仙大法師與助慶聖人同心所創建也同造僧坊令住六口三昧僧修法華三昧之行又毎年夏中修百箇日講并始自八月十五日三箇日不斷念佛于今無絶云云
モト普賢佛ヲ本尊トナス。因テ普賢堂トモ云フ。阿彌陀佛ヲ本佛トナセリ。
寛文寺社記曰 三昧堂世に四月堂といへり、本尊は普賢三昧御坐す故に三昧堂とも又は普賢堂ともいへり。

治承ノ兵火ニ其ノ災ヲ免レシモ今ハ僧坊既ニ破壊シ、僅ニ一字ノ堂ヲ存スルノミ。

註 四月堂ハ現今千手觀音ヲ本尊トナス。

開山堂

良辨僧正ノ影像ヲ安置ス。寛仁三年十一月十六日之ヲ造リ、堂宇ヲ建立ス。爾後興廢ナシ。

俊乗堂

創立ノ年月詳ナラズ。俊乗坊重源ハ俗姓秦氏武藤左衛門ト稱ス。剃髮シテ俊乗坊ト號ス。大佛修造ノ大勸進タリ。事上ニ詳ナリ。元久二年六月五日寂ス。

南都高僧傳樂師院藏曰 俊乗坊重源秦氏武藤左衛門發心後號俊乗坊元久二年乙丑年六月五日卒歲八

十六大佛再造之願人。

舊跡幽考曰 重源上人遺像堂、俊乗坊重源上人は黒谷源空上人の御弟子なり、仁安二年もろこしにわたり台山にのぼりて、阿羅漢を拜し、明州にして舍利の瑞光を見給ふ、三年を経て歸朝あり、其後東大寺再興の勸進し給ひしなり、釋かの上人の杖ばかり笠など當堂にあり、……

今ノ堂ハ元祿中公慶ノ再建スル所ナリト云フモ、延寶七年ノ著書ニ其ノ堂宇ヲ載セ、其ノ燒失ヲ記セザレバ當時コレアリシナリ。公慶ノ再建何ノ爲ナルヲ詳ニセズ。

公慶堂

公慶ハ當寺龍松院主ニシテ大佛殿再建ノ勸進聖タリ。事上ニ詳ナリ。寶永三年五月五日弟子公盛之ヲ創立ス。

阿彌陀堂

東大寺要録ニ「阿彌陀院流記在印藏、水田六十町 從五位上石田女王建立延曆十七年八月廿六日」ト見ユ。同書ニ「……南阿彌陀堂大風仆障子彌勒淨土一枚、盧舍那淨土三枚、白檀觀音像一枚、高一尺白觀厨子一基、水精玉塔二基、大般若經一部銅梵字心經一枚、阿彌陀佛一體并脇士見永觀二年分付帳」ナドアレドモ、果シテ今ノ阿彌陀堂ヲ謂ヘルカ否ヲ知ラズ。今ノ阿彌陀堂ハ元祿年中大勸進公慶ノ創立スル所ニシテ、俊乗將來ノ五劫思惟阿彌陀佛ヲ本尊トス。

念佛堂

地藏菩薩ヲ本尊トナス。體內ノ小佛ハ攝津國人いと遊ナル者ノ念持佛ナリト云ヒ、又寺傳ニ建久年中攝津ノ人渡邊權頭ノ建立ナリト云フモ、記録ノ微スベキナシ。案ズルニ七大寺巡禮記ニ淨土堂東大寺別所東向三間四面堂號念佛堂、安五智如來等也在佛舍利十六粒、每日午尅奉出之令拜見甲乙人也件舍利者菩提僧正自天竺持來奉聖武天皇、舍利也始者一粒云云後分散二粒仍以一粒奉納大佛眉間云云今一粒東大寺之東塔之寶物也彼塔婆燒失以後奉納當堂者也以後之分散合十六粒云云治承以後此堂者重源上人自阿波國渡之本尊十體、内一體者六條禪尼建立、殘九體自彼國渡之舍利十三粒、内一粒者聖武天皇御持也……ト見ユ。疑ラクハ當堂ノ事ヲ記セルナラン。果シテ然ラバ淨土堂、東大寺別所ハ異名同處ニシテ、古、五智如來ヲ本尊トセシヲ重源不斷念佛ヲココニ修セラレシヨリ、念佛堂ト稱セシナランカ。舊跡幽考ニ左ノゴトクアリ。

念佛堂は又淨土院と號す舍利塔銘本尊地藏菩薩是は重源上人上の醍醐にして不斷念佛を興せられしより其外七ヶ所におかれしなり、まづ東大寺の念佛堂高野山新別所等なり、…此堂に重源上人のゐはあり、おもてに大勸進上人阿彌陀佛其のうらに俊乗坊重源元久二年六月五日入滅春秋八十六……とかけまくもかたじけなき土御門院の宸筆をそめさせ給ひ、宋の陳和桂えりつけけると

かや、毎六月五日位牌臨息等を出さるゝ人群をなしてぞおがみ侍る……

戒壇院

戒壇院ハ聖武天皇ノ本願ニ依リ、鑿眞和尚ノ創始スル所ナリ。鑿眞ハ唐土揚州ノ人龍興寺ノ傳戒師タリ。天平勝寶六年二月我大使藤原清河等ニ隨ヒ、弟子二十四人ヲ率キ、佛舍利三千粒・佛像・經・論・律・疏・戒壇圖經等ヲ齎ラシテ來朝ス。此時天皇方ニ佛法ヲ尊崇シ、盛ニ之ヲ獎勵シ給ヒ、定惠ノ聲既ニ海内ニ傳フト雖モ未ダ戒律ノ法ヲ説ク者ナカリキ。天皇其ノ碩德ヲ欽シ、之ヲ唐禪院ニ置キ、吉備眞備ヲ遣ハシ命ズルニ戒壇ヲ作ルベキヲ以テシ給フ。鑿眞詔ヲ奉ジ齎ラス所ノ彼ノ國五臺山ノ土ヲ以テ之ヲ大佛殿ノ前ニ築ク。時ニ天平勝寶七年九月ナリ。天皇・皇后・太子及ビ百官就テ菩薩戒ヲ受ケ給フ。是、我國ニ戒壇ヲ設ケ授戒ヲ行フノ始ナリ。後、其ノ土ヲ大佛殿ノ西ニ移シテ戒壇ヲ築ク。即チ今ノ戒壇院是ナリ。天平勝寶八歳ノ東大寺圖ヲ按ズルニ、大佛殿ノ西ニ當院ヲ記スレバ、其ノ之ヲ此所ニ移セルハ七八年ノ交ナルベシ。戒壇院ニ二字アリ。一ハ即チ戒壇ニシテ南ニアリ、一ハ北講堂ニシテ不審堂ト字ス。

東大寺要錄曰

戒壇院堂二字 南戒壇 北講堂

本願聖武皇帝之所建也時雖定惠之聲傳自漢土而戒律之法未流此地、□像三衣而受大戒

穿鑿四角而結壇場、邪正亂端、輕重紊條、於是聖朝深崇佛道、重譯求法、便有入唐學僧榮
觀普照、與大使藤原清河副使大伴古滿等詣龍興寺拜請鑿真和尚仍唱白塔寺法進律師十
餘人遠渡鯨波歸朝風闕、天皇敬其德安置東大寺唐禪院、因茲本朝立戒壇始行授戒而
已。

南都高僧傳曰

僧正鑿真、天平勝寶七年乙未此年四月以鑿真持來五臺山之土、東大寺立戒壇院以鑿真爲戒
師以賢曠爲戒者被行授戒本朝受戒以之爲初……去六年二月隨大使藤原清河等自大
唐國來朝、大唐龍興寺傳戒師也、揚州人、同寺智滿禪師并布泉寺弘景律師弟子也相具法進如教等
名德弟子二十四人及佛舍利三千粒佛像經論律疏戒壇圖經等三十餘部、來朝去七年始本朝授戒於
東大寺盧舍那殿前立戒壇、天皇初受戒、次皇后太子同登壇受戒、凡上下沙彌四百餘人、或捨
舊戒重受、又後於大佛殿西別構戒壇院……

治承ノ火ニ戒壇院燒亡ス。再興ノ年月詳ナラズ。七大寺巡禮記ニ

戒壇院 南向五間四面在大佛殿西南、安六重金銅塔高一丈五尺許、置壇上中心、是受戒會之本
尊也、又壇上之未申角在禮盤三號三井座、件壇下埋聖武天皇御骨云云、天竺祇園精舍之内戒壇塔
下埋釋迦佛鬚爪與也、此塔埋聖武天皇御骨若准彼例抑三井座者不安佛像、又僧徒不登雖

不安佛像、皆是葺料所列置也、其井一名豆田郡一名撫至、三名馬郡園郡皆比丘形井云云、天平勝寶
七年唐鑿真持五臺山上建立戒壇、天皇及右大臣百官等受戒、始者在大佛殿前、後移今所云々
同院不審堂、件堂者在戒壇院北、號講堂云云、口傳云受戒之後、戒者始自其日限百日、此
所修行也

トアリ。蓋シ是、治承燒失後ノ再建セシモノナラン。永祿中松永ノ兵災ニ罹リ烏有ニ屬セシカ。天
正年大和大納言秀長卿之室後室慈雲院戒ヲ受ケ、之ヲ再興シ三間四面ノ堂宇外塀等ヲ建設シ、釋迦
多寶ノ二像ヲ土階上ニ安置シテ本尊トナス。享保十年武藏國靈雲寺惠光比丘入院シ、戒壇堂ヲ再興
シ、十八年本堂二階樓御拜付悉ク竣功シ、五重小塔釋迦多寶佛四天王ヲ安置シ、内陣土階高檻寶蓋
ニ莊嚴ヲ加ヘ、同年二月二十日供養ヲ行フ。

眞言院

眞言院ハ大佛殿ノ南ニアリ。故ニ南院トモ稱ス。弘仁十二年冬雷アリ。廷議以テ水害疾疫ノ兆ト
爲シ、翌年二月十一日空海ニ詔シテ東大寺ニ於テ灌頂ノ道場ヲ建テ、夏中并ニ三長ノ齋月ニ息災
増益ノ法ヲ修シ、國家ヲ鎮護セシム。是當院ノ濫觴ニシテ、承和二年五月詔シテ常ニ二十一口ノ僧
ヲ置キ、永ク定額トナシ以テ之ヲ修セシム。東大寺要錄曰

南院亦名眞言院 弘法大師之建立

貞觀格文云

太政官符

應_レ東大寺真言院置_二廿一僧_一令_レ修行事

右檢_二案內_一太政官去弘仁十三年二月十一日下_二治部省_一符傳_二右大臣宣奉_一勅_二去年冬雷恐有_二疫
水_一宜_レ令_二空海法師_一於_二東大寺_一爲_二國家_一建_二立灌頂道場_一夏中及三長齋月修_二息災增益之法_一以
鎮_二國家_一者今被_二從二位行大納言兼皇太子傳藤原朝臣三守宣_一稱_二自今已後宜_レ件院置_二廿一僧_一永
爲_二定額_一不向_二食堂_一令_レ修行_二別當之僧專當_一其事_二但住僧交名專當_一法師等_二若僧有_レ關_一隨_レ以
補_レ之

爾後興廢詳ナラズ。寛永十九年十一月二十七日燒亡セシガ、正保中之ヲ再建シ、享保十八年戒壇院
ノ靈雲律師新ニ大日如來四天王像ヲ安置ス。即チ今ノ佛體ナリ。

東南院

貞觀十七年聖實僧正檜皮葺ノ僧房ヲ造立シ 如意藥師佛ヲ安置ス。即チ是其ノ創始ナリ。然ルニ
延喜四年東大寺別當道義律師大安寺ノ香積院 佐伯氏ノ 香花寺ヲ壞チ、之ヲ當南大門ノ東脇ニ移シ建テ、更
ニ之ヲ聖實ニ附屬シ、又悲田院ヲ壞チココニ移シ、惣テ之ヲ東南院ト號シ、以テ代々別當ノ房室ト
ナセリ。治承ノ兵火當院亦延燒シ、纔ニ院主ノ房室經藏ヲ殘スノミ。建久元年十月十九日後白河法

皇大佛殿ノ上棟式ニ臨幸セラレントスルヤ、豫メ當院ヲ以テ行在ト定メ、期ニ先ダチ院家ヲ再建ス
ベキノ宜旨ヲ賜ハル。院主勝賢僧正土功ヲ督シ、之ヲ竣功ス。源賴朝大佛ヲ慶スルニ當リ、亦之ヲ
以テ宿坊トナス。嘉祿元年官符ヲ以テ末寺莊園二十八處ヲ定メラル。其ノ大和ニ於ケルモノハ虚空
藏・安隆ノ二寺及ビ角・和邇・白土・別府・楡垣・會喜・樺・中門・大槻ノ諸莊ナリ。
東大寺要錄曰

東南院 貞觀十七年乙未聖實僧正造_二東南院_一檜皮葺僧房內安_二如意藥師堂_一在_二東南院內_一延喜四年
甲子東大寺別當律師道義佐伯氏人也大安寺丑寅角在_二佐伯院_一本名_二香積院_一仍_二東大寺南大門東脇_一件
院移_レ朝運作_二一日一夜內_一云々

同續要錄曰

東南院 當院家者當寺別當道義律師延喜四年七月二日夜發_二三百餘人夫工等_一壞_二渡香積寺_一字佐伯院
所_二建_二于當寺南大門東脇_一也其後律師延喜四年於_二大衆中_一付_二屬于聖實_一爲_二備_二後代之龜鏡_一即請_二
寺司之署判_一但道義律師壞_二取香積寺_一之條、理不盡之沙汰歟、然而氏人庭弱不_レ陳_二子細_一隨又氏人
故參議正三位大宰帥佐伯宿禰今毛人曾孫等深案_二由來_一所_二壞渡堂并佐伯院敷地永付_一屬于聖實、仍
得_二兩方之讓_一爲_二萬代之證_一五間檜皮葺藥師堂一字、安_二置金色丈六藥師像一體_一同日月光像各軀
檀相十一面觀音像一軀等也次乞_二請當寺_一破_二壞悲田院屋一字_一以爲_二代々院主房塾_一御門御脇此處

添 上 郡

號東南院、永傳于門跡。云云治承四年十二月二十八日爲平家逆臣被燒、失大佛以下諸堂等之刻東南院同成、灰燼畢所、殘纒院主房經藏等是也而、建久元年十月十九日大佛殿上棟兼被宣下、即後白河法皇可有御幸、任先例以東南院可爲御所、仍期日以前可建立之由、被仰下第十三代院主勝賢僧正、畢仍首尾五十箇日之間令造營一院家、畢八月二十五日擬上棟、十月十七日御幸速疾營作萬人之所、感也寢殿一字五間四面檜皮葺公卿座、中門廊殿上廊、中門隨身所、車宿對屋等房宇並檐庄嚴盡美云々

嘉祿元年 官符宣 被書載分

末寺庄園貳拾捌箇處

山城國三箇處……

大和國十一箇處

虛空藏寺 安隆寺 角庄 和邇庄 白土庄 別府庄

檜垣庄 倉喜庄 樺庄 中門庄 大槻庄

攝津國…… 伊賀國…… 伊勢國……

元弘三年後醍醐天皇關東ノ凶儀ヲ避ケ南都ニ潛幸シ給フヤ、當院ニ御シ更ニ笠置ニ行幸シ給ヘル

ハ、史乘ニ明文アリテ普ク世人ノ知ル所ナレドモ、當時武家ノ耳目ヲ憚リ爲ニ之ヲ秘密ニセラレシヲ以テ、其ノ事蹟殆ンド不明ニ屬セシニ、今樂師院氏ノ記錄ニ引ケル元弘日記全本傳ヲ讀ミ、始メテ之ヲ知ルヲ得タリ。所謂元弘日記ハ當時聖駕ニ供奉セシ寬實法眼ノ手錄ニ成リ、最モ信ズベキモノナリ。左ニ抄出シ史ノ缺文ヲ補ハン。東大寺雜集樂師院氏藏第十二曰

元弘日記 寬實法眼記云元年七月二十五日主上東南院御所可有御幸旨兼日御密詔云々

今度御密慮之御書ニヨリテ、八月下旬異御計謀ヲ以當門跡江竊ニ御幸之旨也院務聖尋僧正御頼

ニ叙慮殊勝之義也西室院門主關東縁□也因テ於寺謀略難叶之間御密宣中納言殿其御密計云云院主

大僧正聖尋 坊官所寬實法眼實祐法眼 院勾當 琳禪大僧都 院官侍 四品兼雅 丑刻南殿東ノ妻ニ集會

見實實錄同氏藏曰

元亨日記ニ云元弘三年八月二十五日於南都御幸事密院務聖兼○兼ハ尋ノ僧正子時被仰下、○字ノ草體カ、然ラザレハ義通セズ 憚武家難、關寺内悲涙之折爲使節、執行實祐法眼寬實法眼木津石地藏奉迎前、寬實法眼手勢指下百五十人、後陣執行實祐上座法眼二百人都合三百五十人前後圍テ般若野ヲ經テ國分御門通り○字體分明ナラズ、築地若クハ佛地院ノ草體ト見 之北を適當門跡明音院御所ニ入御密ニ御幸事供奉人々寅刻ニ入御、辰刻密ニ加勢參向之事評定西室東室 講堂集會西室門衆皆悉背候間供奉之評定及延引之間、當門跡門下決定也、西室院家他寺門主ニ爲相觸之間他寺又異變、仍主

上近江美濃山城之勢續テ發向、叡慮也。□□便宜可計、皇居之旨、勅定也。執行法眼鷲峰令臨還二十
 六日夜ニ入紛レ、院務已下五百人寺家執行中將法眼三位寺主兵三百人前後奉供畢中川加茂、る中
 國民□人相堅メ候間執行中將法眼三位法眼手勢切拂御與ヲ奉移鷲峰無異無事也。彼山徒三百人餘山
 門閉奉、護皇居之間七ヶ日山深ク便路峻岨也。仍而水ク、城廓寺境可奉遷、皇居之旨勅定執行
 寬實法眼實祐仍末寺笠寺○笠ノ下、置ノ字別當貞禪僧都ノ許ニ令牒狀、別當領掌山徒二百人奉迎、
 御寶輿、畢路次勳功主上御威執行寬實法眼鼓、法印、實祐法橋被、鼓、法眼、殊、簾、印、菊花御紋被、下永
 不可有闕意之條宜房卿ヲ以於御前蒙勅許、畢仍寺官綱所永爲家例也。當寺三綱中爲綱所
 本寺之間袍服純色朱紫甲袈裟紫指貫水晶念珠着用常例當寺之先驅、御前御調度參向之式一段東
 大寺大慶也。

寺官執行職者兼小別當 權上座兼修理目代 右元亨日記寬實法印記寫

東大寺雜集錄曰

元弘日記云三年七月二十五日 主上東南院聖尋僧正御所可有御幸、兼而宣下八月二十四日深夜
 御幸之沙汰已刻執行法眼寬實奉行實祐法眼、家從三百騎并御門從內衆三十人引率而於泉河、參向
 主上御威、路次可爲守護有勅定、經般若寺出御北御門、經轉轄御門、分御門南、築地東へ
 至、南大寺、從御所四足門南宸殿、入御、御□□先陣奉行實祐法眼、後陣寬實法眼、普御後直鼓、

法印勅許、二十五日寺門一統聖尋僧正披披露之處西室尊勝院兩院家不和之聖尋僧正供奉、鷲峰
 入御、丑刻寬實法印藥師院實祐法眼正法院爲供奉、路次凶賊遮道、寬實法印實祐法印手勢三百騎三
 手分而追散之間凶賊退散無事、鷲峰入御、當下別當東大西南院信覺大僧都坊室入御有御滯留諸臣
 馳奉之不宜□之間於笠置寺可移御座○以下欠

ト見ユ。所謂實祐法眼ハ、後、藥師院主タリシ人ニテ、即チ今ノ藥師院氏ノ先人ナリ。寬實、實祐
 二人聖駕ニ供奉シ、王事ニ勤勞セシコトハ久シク湮滅シテ世ニ見ハレズ。今ヤ有載ノ下偶、此記錄
 ヲ發見シ、以テ詳ニ其事歷ヲ知ルヲ得タリ。願フニ建武中興ノ鴻業ハモト皇運ノ然ラシムル所ナ
 リト雖モ、此輩モ亦與リテ力アリ。其ノ功事口滅スベカラズ。故ニココニ表出シ以テ之ヲ不朽ニ傳
 フ。永祿十年松永ノ兵火ニ燒失ス。七大寺巡禮記ニ

東南院 南向堂安藥師像、件院家者聖寶僧正坊也聖寶御影堂在藥師堂北、又聖寶所持之如意在
 當院、號五師子如意也師子五正與五結、以銀顯之也素獅子者顯宗五結者表密宗、爲顯宗本
 故號五師子如意也、件如意者與福寺維摩會禁裏金光明會藥師寺最勝會此會講師所持此如意也
 法會以後送東南院藥師堂……

トアリ。以テ燒失前ノ概況ヲ見ルベシ。元祿十五年大佛殿勸進聖公慶之ヲ再建ス。寶曆十二年燒失、
 元治元年大勸進公延再興、明治八年舊ニ仍リ東大寺ノ本坊ト定メラル。

西南院

西南院一ニ新堂ト號ス。釋迦・藥師・觀音ヲ本尊トナス。天平神護中藤原氏諱貞子國家ノ爲ニ創立スル所ナリシモ已廢ニ屬ス。

東大寺要錄曰 西南院 右件院新堂者如意寺本願女親王藤原貞子鎮護國家於東大寺西南院以天平神護年中爲一院所草創也則奉安丈六金色釋迦如來像藥師如來像千手觀音像等也云云

知足院

寬平二年高尾ノ昇嚴十禪師ノ創立ナリ。爾後荒廢シ久シク俗人ノ住居トナリシガ、建長二年當寺別當定親之ヲ再興シ傳ヘテ今ニ至レリ。

東大寺續要錄曰 知足院 當院者寬平二年高雄昇嚴十禪師建立也而星霜屢遷、院家皆荒、仍監僧多以住、俗人又卜居、爰別當法印定親建長第一、一向以此砌被定清淨之地、淨行寺僧可造房舍、且又營作之間可有助成之由被相觸畢、本住監僧等宛給余敷地、移遣他所畢、隆圓得業且爲重代之居所、且爲堂舍之敷地、於女人者不可入居、枉可被許居住之由雖歎申、恐後代之相監更無有許容、仍堂舍坊宇同破出畢、其後或學徒、或禪衆僧行輩以寺務之資助各移造房舍、遂寄附田園被定置院僧……

現在ノ堂舍ハ、天保三年燒失後文久三年ヲ以テ造營セル所ニシテ、地藏菩薩ヲ本尊トナス。

尊勝院

天德四年當寺ノ別當光智國家ノ爲ニ創始スル所ニシテ、毘盧遮那佛・尊勝佛等ヲ本尊佛トナス。故ニ尊勝院ト號ス。當時五間四面ノ堂并十三間ノ僧房二字アリ、應和元年官符ヲ下シテ東大寺ノ院トナシ、淨僧十口ヲ置キ、御願ヲ修セシム。其ノ三年常燈佛供料五千束ヲ加ヘラレ、康保四年七月本願光智大和ニ於テ莊園二十九處ヲ寄進セリ。

東大寺續要錄曰

太政官符大和國司

應以新造尊勝院爲東大寺一院置知行僧十口令修御願事

建立五間四面檜皮葺堂一字在禮堂

十三間僧房二字

奉造金色毘盧遮那佛像一軀

金色釋迦如來像一軀

金色佛頂尊勝如來像一軀

金色藥師如來像二軀

金色十一面觀世音菩薩像一軀

添上郡

金色延命菩薩像一軀

梵天帝釋四王像各一軀

右得彼寺別當律師法橋上人位光智者去。天德四年十一月廿八日奏狀。傳件堂舍佛像爲奉誓護公家殊致忠誠所建立也。謹檢案內。東大寺者感神聖武皇帝發菩薩之大願。爲鎮護國家利益。法界被建立也。光智幸蒙天恩拜別當職之後殊竭身力勤仕寺務之間。更廻私計寺內擇地建立堂舍刻造尊像結爲一處號尊勝院。是專選期永代爲奉祈。聖朝之寶祚及攘除天下之災變也。因茲以十口僧於件堂舍可勤仕御願之由。經上奏。畢即撰定智行僧。始自十月廿八日勤修其事。晝則轉讀仁王般若。夜則轉念尊勝大日藥師觀音延命不動真言。精勤無私冥助何空乎望。請特蒙天裁。被賜官符以件尊勝院爲寺家一院。置十口僧將爲期永代殊令勤仕。聖朝安穩國家豐樂之御願。但其院司撰智行之者。師資相傳令勤行件事。抑以華嚴宗爲院住僧者。華嚴教者抽大日如來之肝心。聚普賢薩埵之行願也。圓融之理甚深難測。利生之誓廣大無際。仍爲立第一之宗。興廣大之教也。者左大臣宣奉。勅依請者。國宜承知依宣行之符到奉行。

從四位上行左中辨兼內藏頭美作權守藤原朝臣云々 正六位上行左少史笠朝臣云々 應和元年三月四日

奉行同年八月十八日

守高階真人

權大掾佐伯

介橘

大掾巨勢

權大掾文

權少掾藤原

中

日景

丹比

當國牒 東大寺尊勝院衙

衙牒一帙

被載欲被任三省符早加。舉常燈佛供料稻伍任束狀。

牒去月廿三日衙牒傳件佛供常燈祈加舉省符以先日副寺牒進送了乞衙察狀早欲被加舉者依省符并衙牒旨加舉已了乞衙察狀今勒狀以牒。

應和三年四月廿三日

權少目紀良種

守藤原朝臣安格

權大掾大藏

添上郡

權介伴朝臣
介 藤原

追捕使大掾巨勢

權大掾 文

權少掾 日 置

大 目 丹 比

權大目 忍 海

權少目 大中 臣

少 目 佐 伯

尊勝院根本所領員數

大和國

添上郡

平城左京三四條等田島有之 具如留記

長井庄 筥川庄 和邇庄 櫛北庄 多富庄 大岡庄

添下郡

深溝庄

山邊郡

新富庄 橫路庄 隱岐庄 長屋庄

城上郡

椿富庄 薦堤燈油園

城下郡

內田家一處 遠南庄

十市郡

杜本庄

高市郡

長富庄 宮富庄 田倍庄 山本庄 近坂庄 八多庄

葛下郡

田邊庄

宇智郡

家地一處

添上郡

宇陀郡

草藥園 竹田庄 橘庄 萩原庄○以下之ヲ略ス

右件田地限日月奉施入於東大寺尊勝院如件以其年輸地利宛用大佛殿常燈一備并當院常燈……

康保四年七月三日

願主大僧都法眼和尚位光智

寛弘五年堂閣燒失シ、佛像ハ其ノ災ヲ免レシモ、治承四年ノ兵火ニ堂塔僧院ト共ニ悉ク烏有ニ屬ス。正治二年院主辨曉之ヲ再興ス。爾後ノ沿革徴スベキモノナシ。

東大寺續要録曰

治承四年十二月廿八日爲平家逆臣清盛入道大佛殿以下東大興福兩寺諸堂諸院悉爲灰燼之魁尊勝院內堂閣僧院同交炎火畢而當院家第十三代院主辨曉僧都發再興之願樂企一院之土木即建久年中始造功正治二年終營作正治元年補寺務職同二年令遂拜堂期日以前勵造營即臨拜堂之期中門一字、中門廊九間、渡廊二間、二棟廊三間四面、侍廊三間、釣殿二間三面、東面平門等至正治二年十月廿二日拜堂之當日令造畢

藥師堂本尊厨子内記録云

天曆御宇當院草創之日從公家所被安置之佛像盧舍那佛一軀、尊勝佛一軀、已上釋迦一軀、

藥師一軀、十一面延命、梵王帝釋、四大天王各一軀、已上惣是十三軀也寛弘五年六月四日堂閣雖燒失、佛像免燬、今度治承四年十二月廿八日一軀不殘併爲灰燼、公家尋舊跡、雖被造立當于大佛殿營作之時、奏聞有憚但付十三軀内、藥師像靈驗揭焉宛如生身、仍此一佛先可被急造、歎之由、院家經、天奏之處忝有勅許、即募内舍人一人功、今之佛像并厨子等被造送已畢、自余佛像猶伺便宜可申成功也、後代爲用意記録如件

建久七年五月十三日

院主權大僧都法眼和尚位辨曉記之

○尊勝院經藏 尊勝院址ノ東ニアリ。方二間構造正倉院ノ如シ。古ハ二字アリテ二倉ト稱ス。今其ノ一字ヲ存ス。七大寺巡禮記ニ「經藏二字號二倉件藏者在尊勝院之東」ト。即チ是。創立ノ年代詳ナラズト雖モ數度ノ火災ヲ免レテ現存ス。庫中ニ古寫經數千卷ヲ藏ム。

新禪院

新禪院一ニ新院ト稱ス。モト念佛院ト名ヅク。天慶元年明珍僧都ノ創始スル所ナリ。治承火災ノ後、仁治二年東大寺別當定親僧正コレヲ再建シテ三論ノ道場トナセシガ、幾ナラズシテ、建長八年興福寺西金堂衆ノ爲ニ破壞セラレ談義廢絶ス。定親再興ヲ企テシモ果サズシテ入寂ス。文永四年聖守上人ノ再興シ、弘安四年仙洞ノ御祈願所トナル。

東大寺要録曰 念佛院在兩院門東臨今新院是也天慶元年戊戌明珍僧都之所建也。

添 上 郡

同續要錄曰

新院 斯所者天慶元年戊戌明珍僧都所建立也本名念佛院號新院而當寺別當僧正于時法印定親仁治三年六月之比忽立去俗舍新拓僧院永為一院家令崇三論宗而建久八年五月八日為興福寺西金堂衆被切拂畢其後雖有再興之企未遂營作之功僧正空入滅定濟僧正相傳之後聖守相傳西南院之敷地即文永四年十一月日自西南院移渡房舍等令建立今此地殿殿一字五間四面三間中門廊部屋町一字四間屋後造繼三間畢庫院一字五間四面雜屋一字五間……同十年夏比（文永ナリ）建二間四面禪場以一方為經藏以一方為禪室

院廳

可早任沙門聖守寄附以東大寺內新禪院為御祈願所奉祈天長地久事
 右去四月日彼聖守解狀稱請特蒙院廳裁以東大寺內新禪院永被定置仙洞御祈願所安長齊梵行淨侶可致長日不退御祈禱由下賜御下狀建立堂舍經藏僧房安置佛像聖教影像建立一間四面檜皮普堂一字南北兩面在廊安置多寶塔一基奉納佛舍利同安四天王像同安極樂曼陀羅一幅圖寫當麻曼陀羅槌鐘一口建立五間四面僧房一字安置釋迦如來像一軀摸嵯峨像同安十大弟子像同安金剛胎藏兩部曼陀羅各一鋪同安金色三尺阿彌陀如來像一軀同安三

論宗祖師自馬鳴并至聖寶僧正已上十八鋪建立三間五拜經藏一字安置一切經律論并顯密聖教內外典籍等目錄在別同安四天王三尺像同安佛并明王天等并十六羅漢祖師等像六十餘鋪同安眞言道具等目錄在別建立七間僧房一字談議所住侶寮建立一間四面小庵一字安置如法造立金色阿彌陀如來像一軀在厨子三方立扉正面當寺大佛并脇士四天等像圖之……左方聖德太子聖武天皇菩提僧正靈眞和尚良辨僧正行基并等御影圖之右方龍樹并羅什三藏嘉詳大師善導和尚弘法大師聖寶僧正等影圖之同安金色阿彌陀如來觀音勢至像摸善光寺像同安三尺地藏并一鉢同安尊勝曼陀羅一鋪同安不動明王像同安等身弘法大師御影一鋪起立寶篋印石塔一基其中奉納卅二粒佛舍利等建立五間四面庫院一字浴室造加之建立僧侶齋粥所三間僧房庫院之中間造之建立雜屋二字資財帳在別樂器等一張琵琶一面羯鼓一鉦鼓一面長日修舍利講之時適恰人來而奏管絃有調供養為彼講令施入之三寶通用田地等一處合參町肆段在大和國山邊郡田井庄內券契寄附狀等在之一處合參段在山城國相樂庄內寄進狀等在之一處合玖段在大和國添上郡東大寺領河上并伴寺領內累代券契等在之右謹考舊貫當院家者本願聖武皇帝御宇為鎮護國家被建十二堂之砌也即弘法大師依嵯峨明主之勅請移住當寺之日來入此所號南院是也而星霜多積堂舍皆破至天慶元年明珍僧都再拓道場奉祈國家之處從治承年中以降聖跡埋礎俗舍並薨而去仁治二年定親僧正買取一所敷地

建立三輪之道場、即修長日之勤行奉祈一天之安寧而去建長八年院家忽破壞談論空廢意定濟僧正讓得彼舊跡欲建立禪房之剋聖守永立替西南院令傳領斯靈地相傳狀明白也券契等相副之僧正已營作西南院申成舊院御願畢是又訪三代之芳躅爲祈百王之聖運去文永之寶曆建立堂舍僧房安置經論章疏即專三時之妙行敬祈萬歲之寶祚……早任沙門聖守寄附以東大寺內新禪院永爲御祈願所可奉祈天長地久狀如件

弘安四年後七月 日

爾後沿革詳ナラズ。寛永十九年燒失シ、正保中淨慶之ヲ再興セシガ維新後廢院トナル。

千手堂

千手堂一ニ銀堂ト稱ス。天平勝寶八年東大寺地圖ニ一字ノ堂ヲ畫キ、千手堂ト記スルモノ即チ是ナリ。行基菩薩ノ創立ニシテ千手觀音ヲ本尊トナス。故ニ名ヅク。之ヲ銀堂ト稱スルハ、銀盧舍那佛ヲ安置スルヲ以テナリ。然ルニ坊目遺考ニ千手堂ト銀堂ト異處トスルハ甚ダ非ナリ。東大寺要錄ニ

千手堂 銀堂

五間四面庇瓦葺堂一字

千手觀音一體 塔百八十基 種々玉註

屏風佛像三枚

銀盧舍那佛一體 等身 金銅座一具 華葉八十六枚

湛照僧都分帳云前々帳云件佛像御身爲盜人被割取天曆七年七月五日時別當光智而於被補綴之所々薄覆銀子華數十五枚無實但五枚納政所東南端倉者……

又東大寺緣記坊日誌曰 山上白銀堂者開基行基菩薩也安銀丈六尺迦像故名銀堂

ト見ユ。以テ之ヲ證スベシ。治承ノ兵火當堂亦燒火シ、後、再興詳ナラズ。七大寺巡禮記ニ

銀堂 五間四面堂西向、大佛殿東去五六町許在山上之本尊丈六舍那佛、口傳云依安銀佛名銀堂前大相國去治安三年十月十七日御修行記云此佛爲盜人破取之仍召威儀師鴻助云此堂可修理至材木及料物者隨申請可充給又勸人々各可加銀一兩由被定如元被修造之……

トアリ。永祿火災後再建ナク、元祿中千手觀音ヲ法華堂乾角ニ移安ス。若草山西麓千手谷ハ即チ其ノ址ナリト云フ。

天地院

天地院、法蓮寺ト稱ス。行基ノ創立ナリ。東大寺要錄ニ

天地院法蓮寺緣起文云是文珠化身行基并建立也……爲十方施主建立諸國堂舍四十九箇處并

添 上 郡

植_ニ藥木_一爲_ニ末世衆生_一也今大和國造 基寺第二添上郡求_ニ諸山根_一今御笠上安部氏社之北高山半中
始造和銅元年二月十日戊寅山峰一伽藍即天地院名_ニ法蓮寺_一同二年三月五日辛卯供養請僧十人導師
經淵法師 大安寺云云

ト見ユ。岩淵寺ト共ニ廢絶ス。事彼ノ寺ノ下ニ述ブベシ。若草山ノ後、天神山是其ノ址ナリト云フ。
舊跡幽考ニ「天地院此院絶果て後は俗に天神山といふ、又曰……天地院の跡は東大寺のうしとら若
草山のひかしにあり。」ト。又八重櫻ニハ「手向山……是山のうしろに天神祠あり……此近邊に天地
院とて和銅元年ニ建立有し三輪宗の寺跡有。」ト見ユ。

寺 領

天平十九年九月金光明寺ニ食封一千戸ヲ寄セララル。其ノ勅旨東大寺要錄ニ載ス。

勅旨

金光明寺宛ニ食封一千戸

- 伊勢國員辨郡五十戸
- 駿河國百戸 益頭郡五十戸 富士郡五十戸
- 下總國印旛郡五十戸
- 近江國百五十戸 坂田郡五十戸 愛智郡五十戸 高島郡五十戸
- 遠江國磐田郡五十戸
- 相模國鎌倉郡五十戸
- 常陸國筑波郡五十戸

- 信濃國小縣郡五十戸
- 武藏國兒玉郡五十戸
- 越前國丹生郡五十戸
- 但馬國百戸 氣多郡五十戸 朝來郡五十戸
- 播磨國赤穂郡五十戸
- 上野國新田郡五十戸
- 下野國芳賀郡五十戸
- 丹波國天田郡五十戸
- 因幡國八上郡五十戸

奉_ニ今月廿一日 勅_一 傳_ニ件封宛_一 金光明寺 其收停期更待_ニ後_一 勅_者

天平十九年九月二十六日

按ズルニ大佛鑄造ニ着手セシハ天平十九年九月二十九日ニアリテ、此時未ダ東大寺ナシ。其ノ所
謂金光明寺ハ今ノ東大寺ニアラズシテ、彼ノ良辨ガ創立セシ金勝寺ノ金光明寺ニシテ、即チ最初ノ
國分寺ナルコト自ラ明ナリ。後、東大寺成リ、其ノ名稱ヲ移シ用ユルニ及ビ、其ノ封戸ヲモココニ
并セ充テラレ、遂ニ根本ノ所領トナセシナラン。天平勝寶元年五千戸ヲ寄ス。是、今ノ東大寺ニ封
戸ヲ寄スル初ナリ。勅旨亦同書ニ見ユ。
御筆勅書云

勅旨

封戸伍仟戸

添 上 郡

右奉入造東大寺新其造寺事畢之後壹仟戶者用修理破壞新、四仟戶者用供養十方三寶新、永年莫動以為福田、伏願以此無盡之財寶、因施無相之如來、普度無邊之有情、欲證無餘之極果、

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

藤原皇太后法名

今帝法名隆基

ト。之ニ據レバ、此時施入セラレシハ造寺料ニシテ、土功畢ルノ後、一千戸ハ修理料ニ、四千戸ハ三寶供養料トシテ永ク寺家ニ寄セラレタルモノナリ。翌二年二月天皇皇后ト共ニ東大寺ニ幸シ大佛ヲ禮拜シ給フ。因テ食封五千戸奴婢二百口ヲ施入ス。東大寺要錄曰 以天平勝寶二年二月廿二日天皇并太后專行幸於東大寺割食封伍仟烟施入人封之分奴二百口而入言

一 願天神地祇共相和順恆將福慶永護國家

一 願開闢以降先帝尊靈長幸珠林同遊寶刹

一 願太上天皇皇太夫人藤原及皇后藤原氏皇帝子已上親王及正一位左大臣橘諸兄等同資此福俱遊彼岸

一 願後代有惡邪臣破損此願者必得破辱三世佛并一切賢聖之罪長生无佛法家、常落大地獄、無數劫中永不出離、復十方一切諸天梵天帝釋、四天王、天龍八部、金剛密跡、護法護塔、大善神王、及普天率土、有勢威力、天神地祇、七廟尊靈并悉脫佐字、命立功大神將軍之靈等共起太禍、永滅子孫、若不犯破、共出塵域、早登覺岸。

天平勝寶元年閏四月廿日奉勅

正一位左大臣橘宿禰諸兄

右大臣從二位藤原豐成

天平寶字四年七月ニ至リ、太師押勝勅ヲ奉ジテ曩ニ施入セシ造寺料五千戸ノ用度分割ヲ定ム。

勅 東大寺封伍仟戶

右平城宮御宇後太上天皇皇帝皇后以天平勝寶二年二月廿二日專自參向於東大寺永用件封入寺家請而造寺畢後種々用事未宣分明因茲令追議定如左、

營造修理塔寺精舍分一千戸

供養三寶并常住僧分二千戸

官定修行諸佛事分二千戸

天平寶字四年七月廿三日



太師從一位藤原惠美朝臣以上

但シ是ヨリ先、天平勝寶四年十月一千戸ヲ加封セラレシコトアリ。東大寺要錄ニ

造寺司 牒三綱所

合奉宛封一千戸

下野國貳百伍拾戸

若狹國伍拾戸

越後國二百戸

丹波國五十戸

阿波國一百戸

讃岐國一百五十戸

伊豫國一百戸

土佐國一百戸

芳賀郡石田郷五十戸
葉田郡深川郷五十戸
鹽屋郡月岡郷五十戸

足利郡土師郷五十戸
都賀郡高栗郷五十戸

遠敷郡玉置郷

頸城郡讀君郷五十戸
磐船郡山家郷五十戸

賀茂郡殖栗郷五十戸
雜太郡播多郷五十戸

竹野郡網野郷五十戸

板野郡高野郷五十戸

美馬郡御津郷五十戸

山田郡宮庭郷五十戸
鶴足郡川津郷五十戸

香川郡中間郷五十戸

風早郡栗井郷五十戸

温泉郡檜樹郷五十戸

土左郡鴨部郷五十戸

吾川郡大野郷五十戸

以前前寺家雜用新永配封當年所輸之物爲始奉宛如件今以狀牒々到准狀故牒

天平勝寶四年十月廿五日

次官正五位上兼行下總員外介佐伯宿禰全毛人

主典從七位上阿刀連滿主

判官正六位上大藏伊美兵萬里

判官正六位上石川朝臣豐麿

判官正六位下上毛野君使

判官從六位下安部朝臣直道

主典從七位下美努連

主典從七位下紀朝臣

トアリ、此等寺家雜用料トシテ宛テラレタルモノナレバ本封ニ加入セザリシナラン。

新抄格勅符抄曰

東大寺五千戸二千戸東西各千戸施入
桓武供給施入云云

天平勝寶二年勅施 女帝御代 修理塔舍分千戸 供養三井當住僧分二千戸 官家修行諸佛事分二千戸 伊賀百戸
尾張百五十戸 遠江五十戸 駿河百五十戸 伊豆五十戸 甲斐五十戸 相模百五十戸 上總百五十戸 下總五十戸
常陸五十戸 近江百五十戸 美濃百戸 信濃二百五十戸 上乃四五百五十戸 武藏四百五十戸 下野二百五十戸 若
狹五十戸 越前五十戸 越中二百戸 越後百戸 佐渡百戸 丹波百五十戸 丹後五十戸 但馬百五十戸 因幡五十
戸 石見百戸 播磨百五十戸 美作百戸 備前二百戸 備中百五十戸 備後百五十戸
安藝五十戸 周防百戸 紀伊五十戸 阿波百戸 讃岐百五十戸 伊豫百戸 土佐百戸

トアリ、是、大同中現在ノ封額ニシテ、其ノ分割天平寶字中ニ定ムル所ニ從ヘルモノナリ。其ノ他
寺家ノ買得スルモノ、王臣ノ寄附セシモノ數多アリト雖モ、此等ハ東大寺文書及ビ正倉院文書ノ摸

添 上 郡

本ニ詳ナレバ之ヲ略ス。

寺家ノ富裕ナルニ隨ヒ、本封ノ外新ニ莊園ヲ立ツルモノ亦少ナカラズ。故ニ其ノ時ニ當リ數百ノ莊園ヲ有シテ富盛ヲ極メ、其ノ弊ヤ僧徒驕傲ニシテ干戈ヲ弄ビ、朝廷復タ之ヲ制スル能ハザルニ至ル。事國史ニ詳ナリ。東大寺要錄ニ其ノ寺領ヲ記シテ曰ク

一、諸國諸庄田地 長徳四年注文定

新開發田并治開田

藥園宮内田地十三町四段九十五步 在大和國添下郡

陵田治開田三町四段 右平城京左一條二坊佐保里

佐保院田四町三段六十步

水成瀬庄田八町七段七十八步 在攝津國嶋上郡

平城田村地二町四段二百四十八步

四條二坊十二坪一町二段百廿四步

五條二坊九坪一町二段百廿四步

同京四條五坊墳穴田一町二段百廿四步

同京八條市庄田一町二段百廿四步

大和國添上郡春日庄田六町二段六十四步

同郡樺本庄田卅町三段八十步

山邊郡長屋庄田地三町 田二町八段 島八段

城上郡杜屋庄田五町九段百步

高市郡飛驒庄地三町九段九十步

添下郡清澄庄田廿七町二段

十市郡十市庄田地三町五段十步

宇智郡地四町

攝津國

西成郡安曇江庄地六段

河邊郡猪名田八十五町一段三百四十三步

山城國

相樂郡出水庄六段

同郡甕原蘭地三町四段

綴喜郡玉井庄本地卅六町

添上郡

伊賀國

阿拜郡柏野庄田廿町八段十九步

笠間庄四十二町二百步

薦生庄合四町二百八十步

伊勢國

三重郡田地四百卅町

尾張國

海部郡十町

中嶋郡二百九十六町三段

春日部郡五十町

愛智郡七十町

葉栗郡卅六町七段

山田郡卅六町

丹波郡百八十町八段

近江國

愛智郡大國庄七町一段二百廿步

犬上郡霸流庄田百十三町七段四十六步

神崎郡因芳庄田百廿一町廿六步

坂田郡庄田七十六町二段

同郡杉市庄四町九段百六步

美濃國

安八郡大井庄田五十町

越前國

丹生郡檜原庄田五十町

足羽郡道守庄田三百廿六町二段五步

同郡鉦庄田百町九段二百八十八步

同郡土異置庄田十五町八段二百六十步

坂井郡國富大庄田卅七町七段四十步

同郡國富小庄田卅七町一段百八十步

同郡鯖田庄十七町四段二百九十步

添上郡

同郡小椿庄田四十七町四段四十步

同郡澹江庄田百町

加賀國

幡生庄田二百五十町

越中國

礪波郡埴城庄田百町

同郡石栗庄田百廿町

同郡揆田庄卅町八段百九十二步

同郡廢田卅一町一段卅四步

新河郡大苧庄田百五十町

同郡大部庄田九十町八段百十六步

越後國

頸城郡石井庄田六十五町一段七十三步

同郡眞沼庄田廿六町八段八十一步

同郡吉田庄田十一町九段百八十步

丹波國

多紀郡後河庄田廿八町三段二百五十六步

氷上郡布佐比庄

播磨國

多河郡栗生庄田廿九町七段百四十四步

因幡國

高蓮庄田十二町一段百八十六步

周防國

吉敷郡樸野庄田九十一町六段六十九步

阿波國

名東郡新嶋庄田地八十四町七段七十五步

伊豫國

新居郡庄田地九十六町六段百步

鹽山五百六十町

別功德分庄

紀伊國

那賀名草兩郡十二町九段廿步

那賀郡三毛庄田七町八段二百十六步

同郡名陵村田三町七段八十步

同郡土崎村田十二町九段十四步

伊賀國

阿拜郡柏野庄田廿町八段八十九步

近江國

坂田郡息長庄田十九町二段三百廿步

同郡田七町五段百五十步

犬上郡水口庄田七町八段二百五十三步

越中國

礪波郡井山庄田四十町

美濃國

厚見庄田二百十七町三百步

加賀國

横江庄田百八十六町六段二百步

大和國

添上郡滿登庄田地十五町三百十九步

山邊郡長屋庄田八町

越前國

坂井郡田宮庄田五十三町七段三百廿六步

越後國

古志郡土井庄田二百町卅步

播磨國

印南郡水田廿四町七段四十二步

右諸國庄家田地目錄如件

湛照僧正分付帳云

(省略)

大和國 雜役免

合參百陸拾五町
百四十二町九段百四十步
二百十七町三段七十步

神社佛寺諸司要劇
公領田畠

添上郡和邇庄廿町七段永當負

不輸租田三町三段

傳法供三段 春日神戸二町 一品御位田一町

公田島十九町四段

田中庄十町五段三百步

不輸租田三町一段

一品御位田一町八段 勸學院田八段 傳法供田五段

公田島七町四段三百步

横田庄十六町九段三百步

不輸租田十二町一段六十步

念佛院田八段 勸學院田六段 不退寺八町二段六步

觀音寺二町一段

公田島四町八段二百四十步

大宅庄十一町三段北當富

不輸租田四町八段百八十步

勸學院田一町五段 大宅寺一町三段百八十步

一品御位田二町

公田島六町四段百八十步

櫛比庄六町七段

檜垣庄九町八段百八十步東稻吉

不輸租田七町一段

慈恩寺田二町九段 神戸田六段

勸學院田二町七段 法花寺九段

公田二町七段半

山村庄四町皆公田

添下郡松本庄十町二百四十步多米當富

添上郡

山邊郡池上庄十町五段八十歩久米稻吉

石名庄四町一段二百歩

今井庄五町 不輸一町

角庄十九町九段多米永富

春日神戸一町五段

兵庫庄十五町百六十歩福丸

城下郡中西庄八町八段二百歩南市安

不輸租田六町二百四十歩

東大寺念佛院田八段 木寺三町一段 神戸田八段

左京職一町三段三百歩

公田二町七段三百廿歩

建保二年寺領注進狀云

大佛御供聖白米免卅六町所★散在

標庄三町 大宅庄四町……長屋庄一町五段……化田庄四町

燈油庄田六十六町之内

高殿庄廿五町 西喜殿五町 東喜殿十町 城戸庄十三町八段 波多庄十二町二段

ト見ユ。以上載スル所ヲ計上スルニ、尙庄園一百餘處ニシテ二十餘國ニ跨レリ。其ノ他ニシテ洩ルル者亦多カルベシ。此等ハ特ニ莊官ヲ派遣シ、若クハ地方ノ武士ニ委託シテ之ヲ治メシム。所謂給主下司公文是ナリ。故ニ平素ハ其ノ收入ヲ徴シ、以テ寺務ヲ辨ジ、一旦事アレバ庄内ノ武士ヲ驅リ兵事ニ從ハシメ、遂ニ僧徒屈強ノ端ヲ啓ケリ。彼ノ國史ニ有名ナル奈良法師ハ主トシテ東大・興福ノ二寺ヲ指スノミ。爾後時勢ノ變遷ニ依リ曾テ寺家ノ奴僕視セシ給主下司等ノ勢強大トナリ、却テ寺領ヲ押領スルモノ顔々輩出セシハ、左ノ古文書ニヨリ當時ノ形勢ヲ推知スベシ。

東大寺領大和國散在田地并抑留交名事

一八幡宮長日大般若料所、大佛供庄ガイブツク、土民等コレヲサウ○「ヲサウ」ハ抑留スルノ義、以下倣之

一大佛殿悔過田井戸堂下野公コレヲサウ 一大佛殿般若會料四町蘇我コレ 一大佛殿梵網會田一反イソノ

カミ左近入道ヲサウ 一反メヤヌヲサウ 一反ハトリ 一反タカタ 一受戒會料所、一所十市郡豐田庄、十市八郎

コレヲサウ 一所松尾庄、白石大進ヲサウ 一所安倍庄、地下土民ヲサウ……

文和二年十月六日

降ツテ足利氏ノ晩世ニ寺領漸ク減少シ、二十餘處ニ過ギザリキ。永享十一年東大寺執行日記ニ據ル

添 上 郡

ニ
 櫻庄 清澄庄 藥園庄 長屋庄 雜役庄 飛驒庄 黒田庄 賀茂庄 北伊賀庄 笠間薦生庄 大和庄 御油庄 大井庄 長洲庄 玉井庄 頼田庄 玉瀧庄 湯船庄 内保庄 玉瀧寺
 等ニシテ、就中雜役庄ハ永享四年同庄所納記○調ニ據レバ、「ミタ」大江・南田・北田中・南横田・中西・ヒセン・白土・十市ノ諸庄ヲ汎稱セリ。爾後沿革詳ナラズ。徳川氏ニ至リ寺領二千二百一石四斗餘ヲ寄附シ、一山ヲ維持セシム。

興福寺 一ニ山階寺・厩坂寺ト稱ス。厩坂ハ高市郡ノ地名ニシテ、山階ハ山城國宇治郡ニアリ。舒明天皇ノ御宇蘇我入鹿權ヲ專ニスルヤ、藤原鎌足公慨然トシテ匡正スルノ志アリ、而モ事ノ成ラザランコトヲ慮リ、丈六釋迦像并挾侍四天王ヲ敬造スルヲ誓願ス。國家既ニ定マルニ及ビ、其ノ佛像ヲ造リ之ヲ山階ニ安置セシモ、未ダ堂塔ヲ營ムニ及バザリキ。天智天皇ノ八年公ノ病甚ダ篤シ。夫人鏡女王爲ニ堂塔ヲ起シ、之ヲ名ヅケテ山階寺ト云フ。天武天皇都ヲ飛鳥淨御原ニ遷シ給フヤ、山階寺ヲ高市郡ノ厩坂ニ移シ京城ニ密遷セシム。之ヲ厩坂寺ト稱ス。元明天皇和銅三年都ヲ平城ニ遷シ給フニ及ビ、藤原不比等先志ヲ承ケ勝地ヲ春日ニ相シ、大伽藍ヲ造營シ更ニ興福寺ト名ヅク。興福寺流記ニ

氏寺興福寺於高市郡而名厩坂寺於山城國宇治郡而云山科寺於此地者號興福寺

寶字記 山階流記所引者天平寶字勅錄之法記手 曰

興福寺舊名厩坂寺亦云山階寺此寺之興也創于飛鳥板蓋宮御宇天豐財重日足姬天皇之代焉至于天皇四年歲次乙之隆時屬世季運逢此難王綱弛典刑失序于時蘇我入鹿不顧廷命之資讚懷跋扈之情專制朝廷威權遂使九服起來蘇之歎曰夷有杼讚之悲藤原内大臣少貽英風早標神算每以或遇栖懷復在念即立議曰天下不業也若位曠其主國家立崩自此成矣輕皇子文武天授親賢無比之爲君天下誠幸甚矣其議已定期有日矣獨慮事不濟仰發弘願奉造尺迦丈六像一軀脇侍並四天王等像奉屈四天王寺其後天下遂定於輕皇子也仍於山階敬寫真像雖能事云畢然未遑諸堂近江大津宮御宇天命開別天皇八年歲次乙冬十月内大臣二堅入夢七尺不安嫡室鏡女王請曰別造伽藍安置前像大臣不許再三始乃許之便於山階就開眞院世傳山階寺是也逮于壬申之際兵革休息區宇安寧鸞輿回駕南都飛鳥仍復移造高市厩坂故亦云厩坂寺後及和銅年中先太上天皇俯從民願遷都平城太政大臣又於春日更營造焉仍定其額名興福寺

興福寺緣起 興書云昌泰三年歲次庚申六月廿六日從二位致仕左大臣藤原朝臣良世曰

金堂一字七間右岡本天皇即位十三年歲次辛丑冬十月天皇崩明年正月皇后即位是爲天豐財重日足姬天皇皇統於皇統是宗我大臣毛人之男入鹿自執國柄恣行威福王室衰微社稷傾危于

時藤原内大臣竊謂立輕皇子爲君。即計其事不終。發願奉造釋迦丈六像一軀。脇侍菩薩二軀。住於四天王寺事。遂叶願。仍造茲像。至於天命開別天皇即位二年歲次己巳冬十月。内大臣枕席不安。嫡室鏡女王請曰。敬造伽藍。安置尊像。大臣不許。再三請。乃許。因此開基山階。始構寶殿。逃乎神駕南遷。改造厩坂。和鋼三年歲次庚戌。太上天皇俯從人願。定都平城。於是太政大臣相承先志。簡春日之勝地。立興福之伽藍也。

七大寺巡禮記曰

興福寺 大和國添上郡平城左京三條七坊 淡海公御願也爲藤氏繁昌和銅三年三月五日建立……

爾來藤原氏ノ氏寺トナシ、一門コレニ歸依シ競フテ莊嚴ヲ加ヘ、七堂ノ伽藍瓦ヲ並ベ、無數ノ房室簷ヲ連ネ、莊園末寺諸國ニ跨リ頗ル富盛ヲ極メ、南都七大寺ノ其ノ一タリシモ、星移リ物變リ、今ハ僅ニ金堂・東金堂・圓堂・五重塔等ノ名殘ヲ存スルノミ。

寺地

興福寺流記曰 寺家一院方四町内敷地十六町

山階流記曰 寺家一院方四町左京三條七坊 天平記云地十八坊云云或十五坊云云

寶字記曰 寺家一區地十六坊十二坊餘

山階流記曰 四至東限 氷室西垣 延曆記云東限京極路西限 大路 延曆記同之南限 深谷峰 延曆記云元興寺北

小道 北限從 厩坂寺小路 直登 春日山黑葛中尾 延曆記北小路東野廿七町

寶字記曰 東限 氷室西垣 西限 大路 南深谷峰北從 東大寺南道中 直登 春日里 天平記云東野廿町或廿

七町八

堂塔

既ニ上ニ述ブル如ク、當寺ハ藤原不比等ノ創立スル所ニシテ、其ノ氏寺トセラレシヲ以テ、一門競フテ之ヲ尊敬シ、隨テ伽藍ノ宏大莊嚴ノ華美殆ンド人目ヲ驚カセリ。昌泰年藤原良世ノ興福寺緣起ニ據ルニ、堂塔雜舍一百七十五宇ヲ有セリト。又以テ此時ノ盛大ヲ想見スベシ。而モ風火雷震ハ數ノ免ルル能ハザルノミナラズ、中世以降一山ノ僧徒富勢ヲ恃ミ、干戈ヲ動カシ爲ニ兵燹ニ罹リ、爾後僧徒ノ勢力凋落ト共ニ荒廢ニ委シタルモノナリ。茲ニ記錄中堂塔ノ興廢ニ關スルモノヲ抄出シ、以テ其ノ沿革ヲ示サン。

類聚國史曰 元慶二年四月八日發酉 大和國興福寺失火燒堂宇僧房

小右記萬壽四年八月廿三日之條曰今日巳時立興福寺塔

興福寺流記曰 五重寶塔及東金堂寬仁二年六月廿一日夜爲雷火燒畢長者殿下造立長元四年十月甲午供養畢

舊跡幽考曰

永承元年十二月二十四日諸堂燒失此時佛像けぶりをまぬかれさせつつがなくなつたせ給ふ、朝野群載…
 …永承二年柱立棟上朝野群載同三年三月供養○和州寺社記同…康平三年五月四日廻廊僧房南大門燒失…
 …治暦元年二月廿五日供養帝王編年…寛治元年二月東金堂燒失帝王編年…永長元年九月廿五日金堂燒失帝王編年…
 康治三年金堂棟上再興帝王編年…治承四年十二月廿八日平家の兵火にかゝり、伽藍一字ものこらす…
 建久五年五月二十二日再興の供養あり…建治三年七月二十六日雷火にかゝり…正安二年十一月二十一日再興の供養をとげられり。

法隆寺別當次第曰

建治三年七月廿六日申尅。興福寺爲龍火。金堂講堂西室中室上階鐘樓經藏中門南大門等悉以燒失了。今度マデ火災五箇度也。

舊蹟幽考曰

嘉暦二年の春南都大乘禪師房六方の大衆と確執の事ありて、合戦におよびしほどに、金堂南圓堂西金堂兵火の餘燼とぞなりける太平記…應永六年三月十一日公方鹿園院義満公の御建立此時の佛師は藤山とぞ聞えし。…

法隆寺別當次第曰

嘉暦二年丁卯三月十二日未時。興福寺金堂講堂鐘樓經藏廻廊中門南大門南圓堂西金堂悉以燒失了。

依南御所禪師御房事。合戦最中燒畢。文和五年二月十七日夜半。興福寺東金堂同塔爲雷火燒失了。

但東金堂本佛取出畢。

興福寺炎上再建記曰

應永五戊寅三月十一日金堂供養同七年庚辰年諸堂供養同十五年戊子閏十月廿五日金堂五重塔廻廊大湯屋四足門雷火同廿二年九月廿九日東金堂再建本尊藥師如來像鑄同廿六年同廿八年迄に五重塔再建同十二月廿八日塔供養文安元甲子年十月西不明門諸坊享保二丁酉年正月十四日講堂を出火講堂金堂鐘樓鼓樓三面僧坊四面廻廊中門南圓堂南大門燒失寛政元年四月六日南圓堂再建文政二年九月廿四日金堂假再建

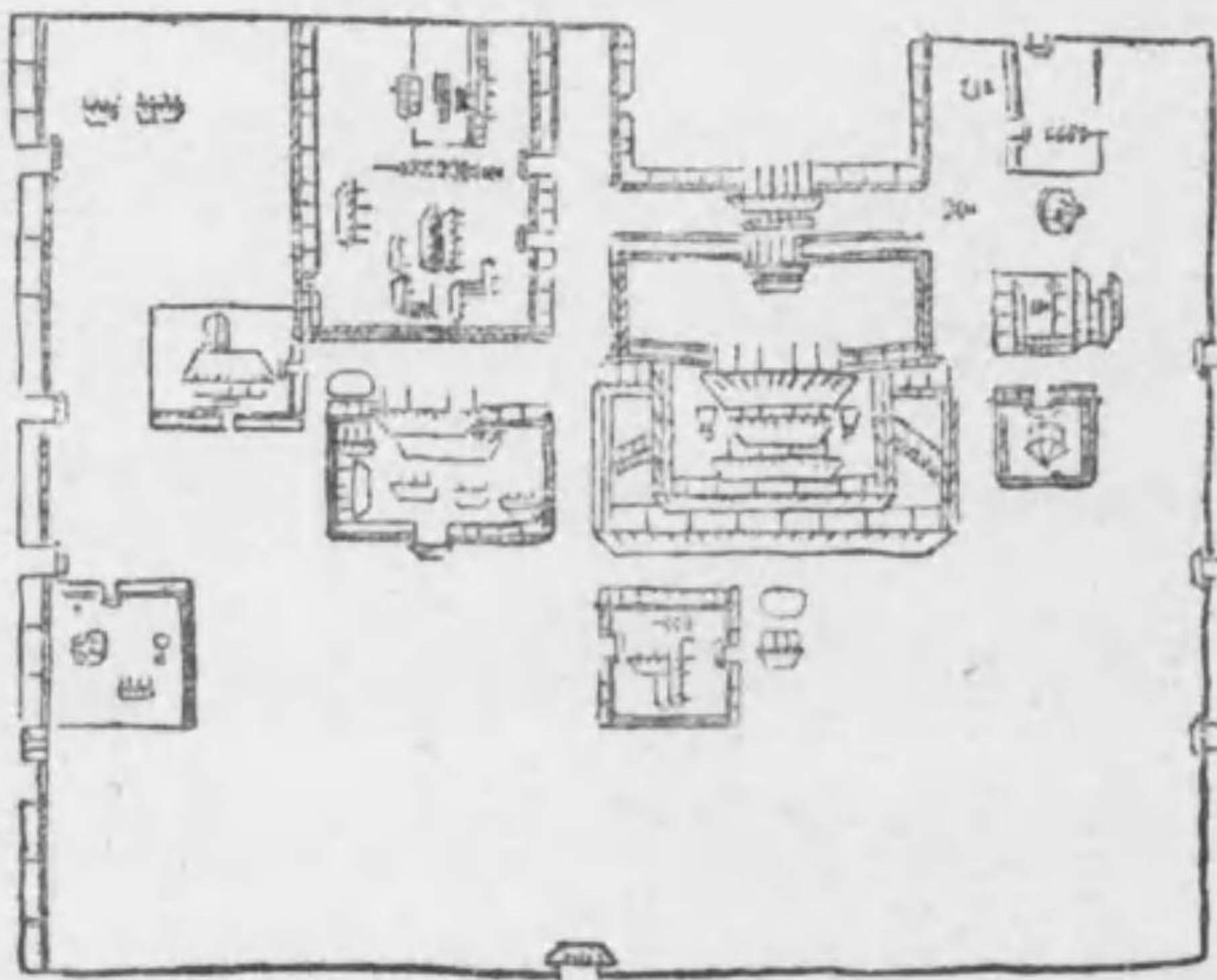
諸門

山階流記曰 有門四

南 長者門 前四町破三四季花爲供佛。寶字記云南花園四坊在池一堤天平記云名佐勢作波。又云以西瓦屋一區

諸上郷

興福寺堂舍圖



西 敬田門 前四町爲供三乘僧二值三四季菜一寶字記云西果園二坊在三條六坊在園地二坊寶字元年十月六日依勅施納也

北 悲田門 前四町爲病苦孤獨之住處爲芳養也云々

東 奴婢門 爲寺役勤仕令住奴婢

御門九宇 弘仁記亦云九口矣
延曆記云七口

南大門一宇 云々天平記云内左右師子形捻金色、
外左右金剛力士捻綠色云々

東門三宇

西二宇

北一宇

北外一宇

興福寺緣起曰

寺家一院 在左京三條七坊。御門九宇。南大門一宇。東三宇。西三宇。寺東屋廿七町。
宇。脇門二宇。堂塔雜舍一百七十五宇之中。堂廿一宇。

七大寺巡禮記曰

南大門安_三金剛力士安_三内師子在_三門前仁池、云_三猿澤池……東西御門各號慶賀門○東西不開御門二宇○東西穴口二所○大湯屋門一宇○北御門一宇○南大門左右穴口二所窪口一所○僧正門但非門也……

所謂南方長者門ハ後ニ大峰門ト稱セシモノナラン。敬田門ハ西方ノ惣門ニシテ俗ニ酢屋町門ト稱シ、悲田門ハ當時悲田院アリシヨリ名ヅケラル。即チ北ノ惣門ニシテ俗ニ延乘坊門ト稱ス。奴婢門ハ東ノ惣門ニシテ後、東門ト稱スルモノナリ。此等ヲ始メ諸門皆廢絶シ僅ニ其ノ址ヲ認ムルノミ。南大門址ノ下ヲ般若芝ト云ヒ、其ノ下ニ猿澤池アリ。

中金堂

和銅三年藤原不比等ノ創始スル所ナリ。後、東西ノ二金堂成ルニ及ビ、本堂ヲ中金堂院ト稱ス。山階流記ニ「金堂一宇寶字記云長十二丈四尺延曆記云九間十丈五尺」ト。以テ其ノ規模ノ宏大ナリシヲ見ルベシ。爾後數回ノ火災ニ罹リ舊觀ニ復スル能ハズ。今ノ堂ハ文政二年ノ造營ニ係ル。マタ佛像ニ關シテハ、山階流記曰

寶字記云中佛殿一乘院 延曆記名
中金堂院 尺迦丈六佛像一口脇侍并四軀 二軀十一面觀音藥王藥
上巳上四軀金色云々 四大天王像

七大寺巡禮記曰

金堂 永承元年丙戌十二月廿四日講堂燒失建立
以後三百歲康平三年庚子五月四日講堂燒 件堂者淡海公和銅三年建立供養本尊丈六釋迦像也此像者大職冠御願也皇極天皇即位四年爲_三誅_三入鹿大臣_三奉_三造_三之則安_三山城國山階_三也然而和銅三年當堂建立之時奉_三入_三件_三本_三尊_三也……親通之記云釋迦三尊也云云案今者釋迦丈六座像脇士者藥王菩薩藥上菩薩十一面觀音二軀各立像丈六也四天王八尺許也……

七大寺日記曰 金堂中尊釋迦丈六、聖德太子柱繪等範俊法橋筆。
和州寺社記曰 金堂の本尊ハ丈六釋迦の三尊其脇に藥王無盡意妙曠并多門持國增長廣目の四天王の像まします。

舊跡幽考曰 中金堂は釋迦如來ニ菩薩なり、釋此東西に二基の鐘樓あり、……
ト見ユ。現今安置スル釋迦丈六脇侍二藥王菩薩四天王、及ビ無盡畏・妙曠・六祖・仁王・世親・無著ノ像ハ、共ニ中世以後ノ作ナルモ共ニ精巧ヲ極メ、就中世親・無著ノ二像ハ希世ノ傑作ナリ。

東金堂

神龜三年七月聖武天皇、太上天皇元正ノ御爲ニ創始シ給フ所ニシテ、藥師佛ヲ本尊トナス。脇侍ニ日光・月光及ビ十二神將アリ。興福寺流記曰

東金堂 五間四面奉安丈六藥師脇仕淨名文珠日光月光十二神將、件十二神柔栗形也。右神龜三年丙寅秋七月太上天皇飯高寢膳不_レ安之時聖武天皇奉爲除病延命勅所司奉建立也。

山階流記曰

東金堂一字 寶字記云東佛殿院佛殿一基、長八丈廣四丈四尺垂木并高細用裁金銅筋云々安置佛像者寶字記云藥師丈六軀脇侍并二口 延曆記云有坐又云卅佛像一軀高一丈奉爲國家僧惠林等之所奉造也右丙午年十二月十五日 弘仁記云涅槃像一軀奉臥涅槃像大床覆帛帳一藥師淨土緣起者神龜三年丙寅秋七月今帝陛下私

聖武天皇延曆奉爲太上天皇 私云元正天皇寢膳不_レ安勅所司敬奉造立也

東金堂後戶釋迦三尊 金銅脇侍觀音盧舍那東大寺大佛移之云々

聖德太子傳曆曰

八年己亥冬十月新羅國獻送佛像太子令皇子奏曰西國聖人釋迦牟尼佛遺像末世尊之則銷禍蒙福茂之則災災縮壽兒讀佛經其旨微妙也望崇貴佛像如說修行天皇太悅安置供養今在興福寺東金堂之

障子傳曰

上蘇我大臣建立本元興寺安置此像云々彼寺已後今興福伽藍東金堂奉置者也後戶東座是也今度日記云件像自新羅國所貢佛也前々炎上之時皆以奉取出畢而今度不能奉取出、中尊無首脇士兩軀或全體破損、或半身損壞又同堂了知大將奇代靈像也寬仁炎上之時自踊出時々人號之云踊大將而今度大十師辨基纒奉取出御首

七大寺巡禮記曰

東金堂 件堂者神龜二年丙午七月依元明天皇御不例元正天皇勅所司造給云云本尊丈六藥師三尊也又或記云元正天皇依御不例聖武天皇造給云云又等身文珠淨明梵天帝釋十二神將立像也古本尊者炎上之時燒失仍長者殿下仰佛師定朝造之云云其後又燒失及度々又或記云當堂本尊藥師者蘇我大臣建立之山田寺本尊也……又在_レ本佛右厨子云宮毗羅大將又或記云正了智大將堂秘佛

也又在^二本佛左厨子^一云^二小藥師^一同秘佛也本佛大故云^三以^二之小藥師^一又安^三後戶金銅釋迦像脇士觀
 音虛空藏^一也高三尺計也入^二厨子^一件像者號^二佛法最初釋迦^一口傳云本朝卅代王欽明天皇御宇十三年
 壬申十月自^二百濟國聖明王^一所^三奉渡^一也如來入滅後當^二於一千四百八十年^一此像始來給仍日本最勝佛
 像是也就中^二并像不可思議也能々可^一拜見立像也脇士也但治承四年十二月廿八日炎上之時燒亡仍
 新造^一之云云供養導師大乘院僧正信圓云云 又十二神將之板二枚在^二之弘法大師筆也云云度々炎上
 不^レ燒希代之本尊後戶庭上在^二馬瑠燈殿^一高八尺計大和國豐良寺物云云可^レ尋^二子細^一也正面庭上在^二
 金銅燈燭殿^一如^二南圓堂^一也……治承四年十二月廿八日炎上之時當堂本尊禪定院之天竺堂奉^レ入修正
 修二等始行^一之

和州寺社記曰

東金堂の本尊は藥師如來神龜三年丙寅七月元正天皇御惱の時、寢膳平安御祈りの爲め、聖武天皇
 の御建立……此堂後門に本元興寺の釋迦の三尊おはします。此尊像は敏達天皇即位八年己亥十月
 に新羅國より渡せし金銅の靈佛なるが……今此堂に傳はりておはしますと也。

現今安置スル本尊藥師・脇士日光・月光及ビ文珠・維摩・十二神將ハ、應永廿二年九月當堂造營ト
 共ニ成ルモノナリト云フ。

註 佛頭・銀手 昭和十三年東金堂解体修理ニ際シ、台座内ヨリ優秀ナル佛頭・銀ノ手ナド發見セラル。

講堂

天平十八年藤原夫人藤原仲麻呂先妣本編ノ爲ニ創立スル所ニシテ、彌陀三尊・文珠菩薩ヲ本佛
 トナス。有名ナル維摩會ハ當堂ニ於テ行ハル故ニ維摩堂トモ稱ス。

山階流記曰

講堂一字 天平流記云講堂一基弘仁記長十三丈九尺五寸九間々別一丈六尺延曆記廣加端皆用金塗裁銅
高一丈五尺五寸寶字記云安置佛者不空絹索觀自在一軀高一丈六尺法務御房後移ニ右從二位藤原夫人參議正四位

下民部卿藤原朝臣以^二天平十八年歲次丙戌正月^一爲^二先考先妣^一所^二造立^一也

興福寺緣起曰

講堂一字 右安置絹索菩薩像也。天平十七年歲次乙酉正月、正三位牟漏女王寢膳乖和、造^二件像^一。
 并寫^二神咒經一千卷^一。而藏山遂遷、不^レ果^二其願^一。孝子從二位藤原夫人、正四位下民部卿藤原朝臣等、
 并願先志堂遺忌日。件像像以弘仁四年長岡右大臣奉^レ造。未^レ作^二圓堂^一之間。假以安置之。

興福寺流記曰

講堂九間、間別一丈六尺。丈六彌陀如來、觀音勢至、淨名文珠、四大天王、惣九軀聖像御。右天
 平十七年乙酉正月、正三位牟漏女王、寢膳背、例仍立^二此願^一。不^レ叶遷化、爰孝子從二位藤原夫人、
 正四位下民部卿藤原朝臣、合力遂願、先志忌日、造^二立^一之。

七大寺巡禮記曰

講堂 伴堂者從二位藤原卿仲丸押勝爲先妣。天平十八年正月日造立供養延曆廿年聖武天皇御宇維摩會於興福寺行之不可移他所之由宣下以來又號維摩堂也本尊阿彌陀三尊淨明文珠四大天王等也又親通之記和銅三年於此堂修維摩會仍云維摩堂也云云

和州寺社記曰

講堂の本尊は阿彌陀如來三尊脇士に四天王像も御座す、天平十八年丙戌長岡大臣の御願武智麻呂の女同男惠美の大臣母の爲造立し給ふよし……

創立ヨリ幾回ノ沿革ヲ閱シ、應永ノ建物ハ享保二年ノ火災ニ燒失シ、爾後建立ナシ、址金堂ノ後ニアリ。

西金堂

天平六年正月、光明皇后妣橘大夫人ノ爲ニ創立シ給フ所ニシテ、釋迦丈六像ヲ本尊トナス。已廢シ址南圓堂ノ北ニアリ。

山階流記曰

西金堂一字 寶字記云長九丈七尺廣五丈二尺云云 延曆記云高一丈九尺安置佛像者 寶字記云釋迦丈六一軀脇士菩薩二軀四天王八部神王師子吼一頭延曆記加注云阿彌陀佛一軀不空罽索觀自在菩薩一軀十一面觀自在并一軀 寶字記云緣起者光明皇后藤原先妣贈一位縣因濃養橘氏忌日所造也皇

后踐霜八角頰挺愜而傷懷永言追孝欲報罔極爰寄良工令募遺像兼復設齋講給屈僧施財是年天平六年歲次甲戌正月十一日也、延曆記云天平六年歲次甲戌正月十一日贈從一位內侍縣狗養橘大夫人薨仍

仁政皇后奉爲先妣敬造件像

興福寺流記曰

西金堂五間四面 奉安丈六釋迦佛像、并脇仕二人、十大羅漢、八部力士、四大天王、梵釋等、右天平聖曆六年正月十一日、先妣橘大夫人御忌日、光明皇后所造立供養也、請僧四百口、造納袈裟四百帖、

七大寺巡禮記曰

西金堂 件堂者天平六年甲戌正月十一日奉爲橘大夫人往生極樂當彼忌日所造之也其日屈四百僧人別各施納袈裟一帖設大會如此行道件袈裟少々于今在北寶藏云云是光明皇后御願也本尊丈六座像釋迦脇士藥王藥上也……

等身金色准肚觀音像三目十八臂靈像也在本佛左方……帝釋像一軀四天王力士等像此八部衆等者不可思議也件像者大和國額田部寺之像也此像渡西金堂後每年寺中有鬪亂之事仍長承中返本

度云云但今於在○按有闕字數此像等不審云云靈驗觀音寶帳一基安等軀十一面觀音像行基菩薩所

寺原

派 上 郡

三六一

造云云服寺之像云云件像者天長二年二月五日壽廣負來而自西金堂南脇戶奉入之其以後不開此戶云云……

銀釋迦立像一軀高六尺三寸安厨子高九尺許件佛者海龍王寺佛也云云角寺之事也興福寺之智尊僧都海龍王寺別當之時恐盜人寺家會議言上於長者殿下依仰去永久二年春移件像此堂四天主之內毘沙門天殊靈驗在之安此天下寶珠云云金鼓一口經八寸許在臺以之用響件金鼓者在正面之壇下又婆羅門立像高三尺許也件像立於金鼓之傍執鐘木表打金鼓之勢也婆羅門足下踏朽木形其口爛之軀不可思議也不似構造之物尤奇妙也稱金佛之間及度盜人取之依有靈不紛失云云近者享德三年五月廿一日夜盜人取之同六月一日尋出所無左右腕仍以佛師令作繼之云云金事虛言也親通記云木像也云云不審也今度相尋處唐金也……治承炎上之時當堂本尊等奉遷禪定院丈六堂而修正等行之了建立以後又如元……

和州社記曰

西金堂の本尊は釋迦如來天竺健達羅國の佛師造れり、天平六年甲戌光明皇后御母橘氏往生菩提の御爲に建立し給ふ。

南圓堂

弘仁四年藤原冬嗣先考右大臣内膳ノ遺願ニヨリ創立スル所ニシテ、不空絹索觀音ヲ本尊トナス。

山階流記曰

南圓堂一字八角 右安置不空絹索觀音像并四天王像也長岡右大臣發大願所奉造也後閑院贈太政大臣以弘仁四年造立圓堂安置也故法華會緣起

伏惟閑院贈太政大臣大閣下構仁德以爲字裁忠孝以爲衣在朝則周且之輔君、飯釋則淨名之愛道、先考長岡左大臣殊發大願敬以奉造不空絹索觀音尊像又常歸依妙法花經、尊重至深、渴仰至篤、而尊容功畢、假以安置、法門威生、未遑講演、進凝之間母螫忽遷矣大閣下以爲尊親莫先於同心、酬往莫貴於述志、仍占勝地於伽藍中、建立堂宇於清淨之刹、遂使八柱圓堂挺玉墀而表麗、八學金容映蓮座而居尊等則堂先考忌辰、說妙法於其中七日設座八軸盡者連日開始修此會矣

興福寺流記曰

南圓堂 中尊不空絹索四天王像 日本六人祖師木像 喜持、眞壽、善味、東南角畫 天台大師使者童子 一人持梵夾一人持綵、不知誰人 西南角 惠果和尚 童子法 東北玄奘三藏 童子法寶師相傳云……弘法大師 偏爲藤原氏繁昌所造立之也壇下安置金龜文 諸尊木像繪銘等大師手自所顯也、燒亡之時、取出中尊并六祖并天台惠果玄奘三繪并四天王及南方天所踏鬼也、自餘三鬼、法眼定朝新造之。